

國造ヲモ伴  
造トイフ  
アリ

然レドモ亦國史中ニハ時トシテ公始メ君ト書シ天平實字三年公ノ字ニ改ム  
同。國造、縣主、村主、宿置、五姓ヲ混同シテ伴造ト云ヘリ。蓋皆部民ノ長タリシ故ナ  
ルベシ。皇極天皇二年紀元一千九百年ノ條ニ、仍リテ臣連、伴造ニ帛布ヲ賜フコト  
各、差有リトアリ。十月ノ條ニ、食ヲ群臣伴造ニ朝堂ニ賜フトアリ。又孝德紀大化  
元年紀元一千七百零七年ノ條ニ、大夫ト百ノ伴造等トナドアルハ、國造伴造ヲ合セ云  
ヘルナリ。孝德紀ハ二造ヲ共ニ伴造ニ多シ。此等ハ文章ノ零式ナリ。

○六節 血族國家

以上陳述セル諸項ノ事ヲ以テ推シ考フルトキハ、日本上  
世ノ政體ハ大ニ當今ト趣ヲ異ニスル所アリ。今之ヲ現時學術上ニ於テ用ウル  
所ノ語ヲ以テ定言セバ左ノ如シ。

上世ノ政體

「日本上代ニ於テハ血統上ノ關係ヲ以テ社會ノ秩序ヲ立テ、此ノ秩序ニ依リ  
テ國家ヲ編制シタリト。

カク定言セル意ヲ解センニハ、先國家及政體ノ何タルヲ論ゼサル可カラズ。  
國家トハ即國中一切ノ民衆ヲ統治スル爲ニ設クル所ノ君民ノ等序ナリ。然  
ルニ各國君民ノ序ヲ立ツル法ニ差別アルヨリ、政體ニ種々ノ異同ヲ生ズ。

社會ノ組織  
ト國家ノ編制  
ト分離セ  
ス

例ヘバ君タルベキ者ヲ人民一同ヨリ選舉スルハ是共和政體ナリ。武力ヲ以テ  
人民ヲ征服シタル者、自權柄ヲ握リテ君位ニ居ルハ是專制政體ナリ。然ルニ  
國家ノ上ニ於テ云フ君民ノ等序ハ必シモ社會ニ於テ人々交際スル上ノ貴賤  
上下ノ秩序ト相同シカラズ。共和政體ニ於テハ貴族タリトモ國家ノ官職ヲ受  
クルコト無シ。又專制政體ニ於テハ元來社會ニ貴賤上下ノ別アリト雖、王家ノ  
權柄ヲ保ツニ利アル人々ヲ舉ゲテ任用シ、舊來ノ門閥タリトモ王政ニ利無キ  
ハ尊マズ。然ルニ日本上代ニ於テハ社會ニ在リテ尊マルベキ者、即血統ノ上  
ニ於テ貴ク、從ヒテ財産モ多ク、部民モ多キ者ヲ以テ國家ノ高キ地位ニ置キタ  
リ。サレバ國家政治ノ上ニテ臣連ハ國造伴造ヨリモ尊ク、大臣大連ハ臣連ヨ  
リモ尊ク、天皇ハ大臣大連ヨリモ尊カリシナリ。而シテ此ノ尊卑ノ順序ハ國家  
政治ヲ離レテ社會私交ノ上ニ至リテモ異ナルコト無カリキ。語ヲ換ヘテ之ヲ  
言ハバ、社會ノ組織ト國家ノ編制ト未分離セズ、孰モ氏族ノ團結ニ基キタリシ  
ナリ。然リト雖、日本ニ於テモ此ノ政體ハ常恒不變ナリシニ非ズ、現ニ第三十  
代ヨリ第三十五六代ノ天皇ノ御宇ニ至リ一大變動ヲ見タリ。而シテ其ノ原因

結果ハ事實ニ就キテ之ヲ觀察セザル可カラズ故ニ是ヨリ更ニ編年ノ事實ヲ述ブベシ。

### 第十三章 應神天皇及文教工藝ノ渡來

○節一 三韓トノ關係 神功皇后攝政六十九年ニシテ崩シ給ヒ、譽田天皇

親政シ給フ。之ヲ應神天皇トス。武内宿禰補弼ス。紀元九百七十年ニ至ルマデ天皇ノ親政四十一年ナリキ。天皇胎内ニ坐シテ既ニ人君ノ位ニ居給ヘリ。故ニ又胎中天皇ノ稱アリ。

應神天皇  
胎中天皇ノ稱アリ  
百濟王ノ無禮ヲ責ム  
外藩四國朝貢ス  
韓人池  
韓土裁縫ノ風ヲ傳フ  
百濟其馬ヲ貢ス  
高麗王表ノ無禮ヲ責ム

三年紀元九百百濟ノ辰斯王禮ヲ失ス。乃紀角宿禰、羽田、矢代宿禰、石川宿禰、木兔宿禰ヲ遣シ噴讓セシメ給フ。此ノ四人ハ共ニ武内宿禰ノ子ナリ。百濟國辰斯王ヲ殺シテ謝ス。紀角宿禰等阿花王ヲ立テ、歸ル。七年高麗人百濟人新羅人任那人並ニ朝貢ス。時ニ武内宿禰ニ命シテ諸ノ韓人等ヲ領シテ池ヲ作ラシメ給フ。之ヲ韓人池ト云フ。蓋以テ屬服ノ紀念トセラレシナリ。十四年百濟王縫衣ノ女工二人ヲ貢ス。其ノ後ヲ來目ノ縫衣ト云フ。蓋韓土裁縫ノ風ヲ傳ヘタルナリ。十五年百濟王其ノ族阿直岐ヲ遣シテ、其馬二頭ヲ貢ス。因リテ阿直岐ヲシテ掌飼セシメ給ヘリ。廿八年高麗國朝貢ス。上表ニ高麗王教日本ニノ語アリ。皇



漢氏

工女ヲ求ムニ

本邦絹帛ノ  
産出大ニ進  
歩ス

文字ハ應神  
天皇以前ニ  
傳來ス

ク此ノ處ニ居ラバ、恐ラクハ覆滅ヲ取ラント。即母弟逆與德及七縣民ヲ携ヘテ、歸化シタルナリ。阿知ハ倭ノ漢氏ノ祖ニシテ、雄略天皇ノ時其ノ氏上ニ倭漢直ノ稱ヲ賜ヒシコト前ニモ述ベタリ。アヤハ文錦ノ義ニシテ、其ノ織工ニ巧ナルヨリカク名ヅケラレシナリ。三十二年、阿知使主及都加使主ヲ吳ニ遣シ、工女ヲ求メシメラル。使主ノ名ハ蓋此ノ時ニ賜ヒシ所ナリ。二人高麗ニ依リ、吳ニ到ル導者ヲ求ム。高麗王即久禮波、久禮志、二人ヲ以テ導者ト爲ス。是ニ由リ吳ニ至ルヲ得タリ。吳王工女兄媛弟媛、吳織穴織ノ四婦女ヲ與フ。天皇ノ四十年ニ筑紫ニ歸着ス。既ニシテ天皇崩シ給ヒシヲ以テ工女ヲ仁德天皇ニ獻ス。其ノ子孫吳衣縫氏、蚊屋衣縫氏等アリ。秦氏漢氏ノ歸化ヨリ本邦絹帛ノ産出ハ大ニ進歩シタリ。

○三節 文教傳來

從來世間ニ傳フル所ニ依レバ文字ノ始メテ本邦ニ傳ハリシモ應神天皇ノ時トナス。然レドモ此ノ時傳ハリシハ經書ニシテ、文字ハ稍、早く本邦ニ入レリ。前期ノ部ニ於テモ述ベシガ如ク、崇神天皇以來既ニ支那ニ通ズル者アリテ、垂仁天皇ノ章ニ云ヘル後漢光武帝ガ伊觀縣主ニ授ケク

漢委奴國王ノ印

神代文字

文學ノ起原

ル金綬ノ印ニハ既ニ漢委奴國王ノ字アリテ、今尙見ルベシ。又此ノ外ニ親魏倭王ノ印トイフモノアリテ、實物ハ存セザレドモ、印草ハ宣和集古印史ニ載セタリ。一説黒川博ニ、是神功皇后攝政ノ三十九年ニ使ヲ支那ニ遣シシトキ、魏ノ明帝ガ詔書ニ添ヘテ奉ル所ナリト。又同皇后ノ新羅ニ入り給ヒシトキ、其ノ寶庫ヲ封シ、圖籍文書ヲ收ムトアリ。則此ノ時我が屬國トナリタル新羅ニハ既ニ文字書籍ノ存セシヲ知ルナリ。然レドモ應神仁德ノ比マテハ普通應用ノ文字未有ラス、前言往行ハ皆口碑ヲ以テ相傳ヘタリ。中ニハ符號ヲ以テ事物ヲ記スルモノ無キニ非サリシカドモ、一境一區各、其ノ制ヲ異ニシ、海内普通ノモノ有ラザリキ。其ノ時代ノ文字トモ稱スヘキモノ、今ニ存スル所、殆十餘種アリ。世ニ之ヲ神代文字ト稱ス。大抵象形文字ニシテ、尤キ物ハ○ト書シ、方ナル物ハ□ト記シ。一ノ數ハ一ト書キ、五ハⅢト記セル類ナリ。又音ノ符號トモシタリ。或ハ間粗ナル繪畫ノ如キ物ヲ以テ之ヲ寫シタルモノアリキ。日本歴史カクテ應神天皇ノ時ニ至リ、天皇百濟ノ阿直岐ノ能ク經典ヲ讀ムヲ見テ、皇太子菟道稚郎子ヲシテ之ヲ習ハシメ給ヒ、又使ヲ百濟ニ遣シテ玉仁ヲ徵シ給ヘ



孝道建國ノ  
體ト通ズ

本ハ天祖ノ遺訓ニ在リ而シテ代々ノ天皇此ノ遺訓ヲ守リテ初メ神靈ヲ正殿ニ安置シ後之ヲ伊勢ニ移シ給ヒシハ孝道ノ建國ノ體ト通ズル所以ニ非ズシテ何ゾ。景行天皇ハ官軍ノ爲ニ己ノ父ヲ殺シ天皇ヲシテ又ニ血ヌラス熊襲ヲ平クルコトヲ得シメシ鳥帥ノ女ヲ賞セズ却リテ其ノ不孝ヲ惡ミテ之ヲ殺シ給ヒシニ非ズヤ。萬葉集ノ歌ニ、あはなむぢすくなひこなの神代より言ひ繼ぎけらし父母を見ればたふとく妻子みればかなしくめぐし萬葉集ナド云ヘルニテモ孝ノ道ハ神代ヨリ同シカリシヲ知ルベシ。橿原ノ宮門ヲ守衛シタルシ大久米ノ訓言トシテ大伴氏ニ傳フル所ニ大伴の遠つ神祖の其の名をば大久米主と負持ちて仕へし官海行かば水濱屍山行かば草生屍大君の邊にこそ死なぬ返見はせじ萬葉集卷十八大伴家持歌並ト云ヘルハ忠ナリ大國主命ノ讓國ハ義ナリ神武天皇戰窮スル毎ニ歌ヲ謠ヒテ士卒ヲ慰メ給ヒシハ仁ナリ要スルニ支那經籍ノ入ルニ及ビテモ本邦國民ノ論理ニ於テ新ニ得タル所ノ者ハアラズシテ唯支那ノ國風先王ノ血統ヲ重ンゼス或ハ前主ヲ殺シテ自後主トナルモ民之ヲ惡マザルヲ見テ怪シムヨリ外ハナカリシナラン。

大久米ノ訓

忠  
義、仁

### 第十四章 仁德天皇善政

#### ○節稚郎子、大鷦鷯相讓

應神天皇仲姫ヲ立テ、皇后トシ、大鷦鷯ヲ生ミ給フ。是ヨリ先皇后ノ姉ヲ以テ妃ト爲シ、大山守ヲ生ミ、晩年又和珥氏ノ女ヲ以テ妃ト爲シ、菟道稚郎子ヲ生ミ給ヘリ。大鷦鷯、大山守、菟道稚郎子共ニ皇太子タリシニ、菟道稚郎子ハ庶ニシテ且幼ク坐シ、カドモ、才智アリ、且漢學ヲ善クシ給ヒシヲ以テ、應神天皇位ヲ菟道稚郎子ニ讓ラント思ホシ、大山守、大鷦鷯ヲ召シテ問ヒ給ハク、長ト少ト孰カ尤愛スヘキト。大山守對ヘテ曰ハク、長子ニ如カザランカト、大鷦鷯豫天皇ノ色ヲ察シ、對ヘ給ハク、長子ハ多ク寒暑ヲ經テ既ニ成人セリ。唯少子ハ未其成不ヲ知ラズ。是ヲ以テ少子甚憐ムベシト。天皇悅ビテ宣ハク、汝ノ言寔ニ朕ノ心ニ合ヘリト。乃菟道稚郎子ヲ立テ、太子トシ、大山守ニ命ヲテ山川林野ヲ掌ラシメ、大鷦鷯ヲ以テ太子ノ輔ト爲シ、國事ヲ知ラシメ給ヘリ。父ノ天皇崩ヲ給ヒシ後、皇太子菟道ニ避ク、位ヲ大鷦鷯ニ讓リテ宣ハク、夫昆上タリ、季下タリ、聖君タリ、愚臣タルハ古今ノ常典ナリ。先帝我ヲ

菟道ノ稚郎子ヲ太子トシ給フ

稚郎子大鷦  
鷯相讓り給

大山守ノ反

(一五八)

立テ給ヒシハ唯愛ヲ以テノミ。何ソ私情ヲ以テ公道ニ代ヘント。大鷦鷯之ヲ聞  
 キテ亦難波ニ避ク對ヘタマハク、皇位ハ一日モ空シクスベカラズ。故ニ先帝預  
 明德ヲ選ビテ貳ト爲シ、以テ國ニ聞エシメ給ヘリ。我不賢ト雖先帝ノ命ヲ捨  
 テ、弟王ノ意ニ從ハシヤト。固ク辭シテ承ケズ、各相讓リ給フ。時ニ大山守先  
 帝ノ己ヲ立テ給ハザリシヲ恨ミ、皇太子ヲ殺シテ位ニ登ラント欲ス。大鷦鷯其  
 ノ謀ヲ聞キ、密ニ太子ニ告ケ兵ヲ備ヘテ守ラシメ給フ。大山守其ノ情ヲ知ラ  
 ズ、獨兵數百ヲ領シ、夜半行シ、會明菟道ニ詣リ、河ヲ渡ラントシタリシニ、舟中  
 ニテ覆没シ、伏兵忽起リシカバ、岸ニ着クテ得ズシテ遂ニ沈死セリ。蓋皇太子ノ  
 謀ニ陥リシナリ。皇太子宮室ヲ菟道ニ與シテ之ニ居リ、尙大鷦鷯ニ讓リテ皇  
 位ニ即キ給ハザルコト三歲。時ニ海人アリ、鮮魚ノ苞苴ヲ以テ菟道ニ獻ズ。皇太  
 子宣ハク、我天皇ニ非ズ、難波ニ進ムベシト。因リテ難波ニ奉ル。大鷦鷯亦宣ハク、  
 「我天皇ニ非ズ、菟道ニ進ムベシト。海人ノ苞苴往還ニ於テ驕ス、更ニ他ノ鮮魚ヲ  
 取リテ獻ズルニ、相讓リ給フ前日ノ如クナリシカバ、鮮魚亦懸ス。海人屢還ル  
 ナ苦ミ、乃鮮魚ヲ棄テ、哭シキ。茲ニ皇太子兄王ノ志森フ可カラサルヲ知リ

稚郎子自殺  
シ給フ

仁德天皇難  
波ニ都シ給

堀江

「豈久シク生キテ天下ヲ煩ハサシヤト曰ヒテ即自殺シ給ヘリ。大鷦鷯之ヲ聞  
 キテ大ニ驚キ馳ヒテ菟道ニ至リ、慟哭シテ爲ス所ヲ知ラス。親喪服シ、喪ヲ發シ  
 テ菟道山ニ葬リ、乃始メテ位ニ即キ給ヒヌ。時ニ紀元九百七十三年ナリ。

○二難波ノ都 第一期ニ於ケル代々ノ天皇ハ多ク大和ニ坐シ、カド、仁  
 德天皇ニ至リ攝津、難波ヲ以テ帝都トシ給ヘリ。之ヲ高津宮ト云フ。蓋難波ハ當  
 時第一ノ津港ニシテ、新羅、高麗、百濟任那諸國ノ貢船年期ヲ定メ、筑紫ヨリ武庫  
 ニ進ミ、遂ニ難波ニ入リシヲ以テ、其ノ昌盛想見スヘシ。十一年、群臣ニ詔シ給ハ  
 ク、朕今是ノ國ヲ視レバ、郊澤曠遠ニシテ、田圃少乏ナリ。且河水横ニ逝キ流未駛  
 カラズ。聊霖雨ニ逢フトキハ、海潮逆上シ、巷里船ニ乘リ、道路亦壅アリ。故ニ横源  
 ナ決シテ海ニ通シ、逆流ヲ塞ギテ田宅ヲ全クセヨト。乃宮北ノ郊原ヲ堀リ、南水  
 ナ引キテ以テ海ニ入ル。之ヲ堀江ト號ス。十四年、宮ノ南門ヨリ直ニ指シテ河  
 内ノ丹比ニ至ル大道ヲ作ラル。蓋當時未條坊ノ制アラズ、帝宅ノ地ハ、稻村邑  
 ノ大ナルモノニ過ギザリシナラン。然リト雖難波ハ仁德天皇ノ始メテ都シ給  
 ヒシヨリ、第二第三ノ兩期ニ於テ、日本文化ノ中心トナリ、千歳ノ後ニ至リ、豊臣

氏城郭ヲ此ニ構ヘシ以來、遂ニ三府ノ一トナレリ。而シテ高津、宮長柄宮等ノ舊跡ハ今猶存セリ。

(160)

○節水利ヲ起シ賦歛ヲ輕クス。上古土地荒蕪ニ屬シ、聖主出テ、水ヲ治メ民ヲ利スル。各國揆テ一ニス。河内河流多ク、屢溢レテ田園ヲ浸ス。因リテ十一年、天皇命シテ茨田ノ堤ヲ築カシメ給フ。工事壯大ナリ。山背國水流乏シ、因リテ十二年、大溝ヲ栗隈縣ニ堀リ、以テ田ニ潤ス。是ヨリ、其ノ百姓毎ニ豊ナリ。

百姓既饑ニシテ凶年ノ患ナシ

用度ヲ節シ民力ヲ養ヒ給フ

十三年、和珥ノ池ヲ造リ、又横野ノ堤ヲ築ク。十四年、大溝ヲ感玖ニ堀リ、石河ノ水ヲ引キテ上、鈴鹿下、鈴鹿上、豊浦下、豊浦四處ノ郊原ヲ潤シ、之ヲ墾キテ四萬餘頃ノ田ヲ得タリ。是ヨリ近郊ノ百姓寛饒ニシテ凶年ノ患ナカリキ。天皇民利ヲ計リ給フニ汲々タルコト、斯ノ如シ。而シテ又宮中ノ用度ヲ節シ、勉メテ民ノ負擔ヲ輕クシ給ヘリ。初メ宮殿ヲ高津ニ興シ給フトキ、宮垣室屋ハ聖色セズ、桷梁柱楹ハ藻飾セズ、茅茨ノ蓋ハ割齊シ給ハザリキ。四年、群臣ニ詔シ給ハク、朕高臺ニ登リ遠キヲ望ムニ、烟氣域中ニ起ラス、以爲ヘラク、百姓既ニ貧シク、家ニ炊ク者ナシト。即知リス。五穀登ラス、百姓窮乏セルヲ、封畿ノ内尙給

三年ノ課役ヲ除キ給フ

宮室破壞ス

セサルモノアリ。况ヤ畿外ノ諸國ヲヤト、乃三年課役ヲ除キ百姓ノ苦ヲ息ハセ給フ。是ニ於テ朝廷ノ用度ヲ節シ、黼衣鞋履ハ、弊盡セズバ更ニ爲リ給ハズ。温飯煖羹ハ酸醜セス、易ヘ給ハズ。宮垣崩レテ造リ給ハズ。茅茨壞レテ葺キ給ハズ。風雨隙ヨリ入り、星辰壞ヨリ漏リキ。七年、天皇再高臺ニ登リ遠キヲ望ミ給フニ、煙氣多ク起リヌ。乃皇后ニ語リ給ハク、朕既ニ富メリ、豈愁フルコトアラソト。皇后諾ヒ給ハク、宮垣壞レテ脩スルコトヲ得ズ、殿屋破レテ衣被露アリ。イカデカ富メリト謂サント。天皇宣ハク、天ノ君ヲ立ツルハ、是民ノ爲ナリ。君ハ百姓ヲ以テ基ト爲ス。百姓ノ貧シキハ即朕ノ貧シキナリ。百姓ノ富メルハ即朕ノ富メルナリ。未百姓富ミテ君貧シキモノハ有ラズト。時ニ諸國稅調ヲ運ビ、以テ宮室ヲ脩理セント請フ。天皇聽シ給ハズ。翌年始メテ課役シ、宮室ヲ造構ヒシメ給ヒシニ、百姓老ヲ扶ク、幼ヲ携ヘテ來リ、材ヲ運ビ、賃ヲ負ヒ、日夜ヲ問ハズ、饑ヒ作リキ。是ヲ以テ未幾時ヲ經サルニ、宮室悉成リヌ。天皇在位八十七年ノ間、海内無事、政令善ク行ハレタリキ。後世聖主ヲ談スル者、言必仁德ニ及バザルハナシ。



第十五章 武内宿禰及子孫

○一節 武内宿禰ノ事蹟

上古身天位ニ居ラズシテ、大關係ヲ歴史上ニ有  
スル者三人アリ。日本武尊、神功皇后、武内宿禰是ナリ。而シテ日本武尊ト神功皇  
后トノ御事跡ハ、前章ニ述ベシ所ヲ以テ足レリトシ、茲ニ武内宿禰ノ爲ニ別ニ  
一章ヲ設ケタリ。孝元天皇ノ皇子彦太忍信命、屋主忍男武雄心命ヲ生ミ給フ。  
屋主忍男武雄心命、景行天皇ノ三年紀元七百三十二年ニ命ヲ奉マテ紀伊ノ群神ヲ祀リ、  
阿備柏原ニ居ルコト九年、菟道彦ノ女影媛ヲ娶リテ武内宿禰ヲ生ム。同天皇  
ノ二十五年武内宿禰命ヲ奉マテ東北諸國ノ地形民情ヲ巡察シ、蝦夷ノ地沃壤  
曠衍、擊テ取ルベキヲ奏ス。是日本武尊ノ東征アリシ所以ナリ。五十一年、東  
西ノ賊悉平キシテ以テ、群臣ヲ宮中ニ召シテ宴ヲ賜フコト數日。時ニ稚足彦皇  
子ト武内宿禰ト宴廷ニ參ラズ。天皇召シテ其ノ故ヲ問ヒ給フ。因リテ奏シテ  
曰ハク、ソレ宴樂ノ日ニハ、群卿百僚、情必遊戯ニ在リテ國家ニ存セズ。恐ラクハ、  
狂生此ノ時ニ乘シ、墻閣ノ隙ヲ伺ハノコトヲ。故ニ門下ニ侍シテ非常ニ備ヘシ

上古史上ニ  
大關係ヲ有  
スル三人

武内宿禰ノ  
事蹟

ナリト、天皇益々異寵シ給ヘリ。同年稚足彦成務ヲ立テ、皇太子トシ給ヒシト  
キ、武内宿禰棟梁臣トナル。皇太子ト武内宿禰ト同日ニ生マル。故ニ甚相款洽  
ス。皇太子位ニ即キ給フニ及ビテ、武内宿禰ヲ進メテ大臣トシ給フ。仲哀天皇  
崩御ノ後、武内宿禰神功皇后ヲ輔ケテ三韓ヲ伐テ、歸ルニ及ビテ、忍熊王ヲ討ツ。  
事跡ハ前章ニ詳ナリ。仁徳天皇五十年紀元一千二百一十二年河内人奏ス、茨田堤ニ雁産メ  
リト。天皇使ヲ遣シテ見シメ給ヒシニ、實ナリキ。因リテ歌ヲ以テ武内宿禰ニ問  
ヒ給ハク、

たまきはる玉極ニテ、うちのおそは、内ノ我ノ兄ノ義ニテ尊稱ナリ。なこそは、汝  
ソよのどほひと、勳ノ遠キ人ニこそは、前ノくは、ひと、國ノ長人ニテ、國  
あきつしま、秋津、やまどのくは、日本、かきこむと、雁子、生なはきか、ずや、秋津  
ヤト。

武内宿禰亦歌ヲ以テ答ヘ申サク

やすみし、八咫知ヲスニ、わがほきみは、我ハ大ラウベナラベナ。宜ナリわれ  
をどはすな、給ヘリ。あきつしま、秋津、やまどのくは、かりこむと、われきか

五十五年武内宿禰薨ズ。宿禰景行成務仲哀、應神、仁德ノ五朝ニ歷仕シ、朝政ヲ輔  
クルコト、凡ベテ二百四十四年ナリ。其ノ年壽詳ナラズ。或ハ云フ二百九十四  
任補或ハ云フ二百八十、或ハ云フ三百ト。外人亦其ノ長壽ヲ傳ヘ稱ス。宋史日本  
傳ニ云ハク、紀武内三百七歳ト。

武内宿禰ノ  
七子

第二期ニ於テ政事軍務ノ要路ニ立チシ者ハ、皆武内宿禰ノ子孫ナリキ。武内宿  
禰七子アリ。羽田矢代宿禰、巨勢小柄宿禰、蘇我石川宿禰、平群木兔宿禰、紀角宿禰、  
葛城長江、襲津彦若子宿禰是ナリ。巨勢氏、蘇我氏、平群氏、紀氏、葛城氏、是ヨリ出ツ。  
後世武内宿禰ヲ以テ臣下ノ列ニ置クハ非ナリ。彼孝元天皇ノ曾孫ナレバ、王ト  
稱スベキ身分ニテ、例ヘバ眉輪王、男大迹王ノ如シ。而モ皇室ニ次グル舊家ナリ。  
當時天皇ノ皇子ヨリ出テタル家他ニモ亦多シ。然レドモ孝元天皇ヨリ開化、崇  
神垂仁ノ三帝ヲ合セテ二百五十餘年ヲ經シ間ニハ、既ニ數世ヲ重キ、景行、履中、  
應神、仁德ノ朝ニ至リテハ益々皇親ヲ遠ザカリテ遂ニ人臣ノ列ニ入レリ。獨武  
内宿禰ハ非常長壽ノ故ヲ以テ、先帝ノ遺族トシテ尊重セラレタリ。成務天皇

武内宿禰ノ  
身分

人臣ヨリス  
テ皇后ト  
ナリ給ヒシ  
始メ

巨勢小柄宿  
禰

ノ時武内宿禰ヲ以テ大臣ト爲シ給ヒシハ、前述ノ如ク天皇ノ前ニ侍シテ國政  
ヲ執ル者ノ主坐トスト云フニ止マリ、必シモ人臣ノ分ヲ定メ給ヒシニ非ズ。宿  
禰ハ尊稱ナリ。仁德天皇ノ第四子モ亦雄朝津間稚子宿禰ト云ヘリ。武内  
宿禰ノ子ニ葛城襲津彦アリ。姓氏錄ニ之ヲ襲津彦命ト書ク。其ノ女磐之媛、仁  
德天皇ノ皇后トナリ給フ。後世藤原氏之ヲ曲ゲテ人臣ヨリ入リテ皇后ト爲リ  
給ヒシ例トナシ、聖武天皇ノ不比等ノ女ヲ皇后ニ立テ給ヒシヲ辯ゼントシタ  
レドモ當ラズ。皇后ハ必之ヲ皇親ニ取リ給フコト神武以來ノ典則ニシテ、聖武  
天皇ニ至リ始メテ更メラレタルナリ。

○二節 巨勢氏

巨勢小柄宿禰三子アリ。星川建彦宿禰、應神天皇ノ朝ニ御膳  
ヲ監掌シ、姓ヲ大雀臣ト賜フ。第二子ハ伊刀宿禰、第三子ハ宇利宿禰ナリ。小柄  
宿禰四世ノ孫、巨勢男人、繼體天皇ノ朝ニ大臣トナル。

男人ノ曾孫、巨勢德太古、或ハ德太ニ傳ル。又ハ皇極天皇ノ二年、紀元三年、小德ノ位ニ  
叙セラレ、孝德天皇ノ大化五年、紀元九年、左大臣ト爲レリ。其ノ子黑麻呂、齊  
明天皇ニ事ヘ、中納言小錦中トナル。二子、邑治、小邑治アリ。邑治、持統天皇ノ朝ニ

巨勢氏ノ子

蘇我石川宿禰

參河守ニ任シ、大寶元年紀元六百六十一年粟田真人ニ從ヒ遣唐使トナル。爾後巨勢氏子孫繁榮シ、歷朝屈指ノ大氏ト成レリ。

○三 蘇我氏

蘇我石川宿禰河内ノ石川ニ生マル。故ニ以テ名トス。子ヲ滿智宿禰ト云フ。履中天皇ノ二年紀元六百六十一年平群木兔宿禰ト國政ヲ執ル。滿智ノ子ヲ韓子ト云フ。雄略天皇ノ時、紀小弓ト新羅ヲ征ス。韓子ノ子ヲ高麗ト云ヒ、高麗ノ子ヲ稻目ト云フ。大臣ト爲リテ權勢ヲ振ヒ、欽明天皇ノ時、佛法ヲ本朝ニ入レシメ、後ニ命スルガ如シ。稻目ノ子ハ即馬子ニシテ、馬子ノ子ハ即蝦夷ナリ。此ノ二人ニ至リテハ誰カ其ノ暴逆ヲ知ラザラン。カク蘇我氏モ繁榮シテ最強勢ナル皇別氏族トナレリ。而シテ第三期ノ變亂ハ、主トシテ此ノ氏族ノ爲ニ起レリト謂フ可シ。

○四 平群氏

仁德天皇生マレ給フ時、木兔產殿ニ入ル。明且應神天皇武内宿禰ヲ呼ビテ問ヒ給ハク、是何ノ瑞ソト。武内宿禰對ヘテ曰ハク、是吉祥ナリ。昨日臣ノ妻産スル時ニ當リ、鰐鰀産室ニ入りヌ。亦異ナラズヤト。天皇宣ハク、今朕ノ子ト大臣ノ子ト同日ニ生マレ、共ニ瑞アルハ天表ナリ。其ノ鳥ノ名ヲ取リテ

平群木兔宿禰

蘇我氏ノ子

相易ヘテ以テ名トセシト。乃鶴鶴ヲ取リテ皇子ノ名トシ、木兔ヲ取リテ大臣ノ子ノ名トス。是平群木兔宿禰ナリ。木兔宿禰應神天皇ノ十六年紀元六百五十九年、的戶田宿禰ト兵ヲ帥井テ新羅ヲ伐ツ。是ヨリ先葛城、襲津彥加羅ニ入り、融通王ノ部民ヲ召サントシテ新羅ノ爲ニ抑留セラル。木兔宿禰等精兵ヲ進メテ其ノ國境ニ臨ミシカバ、新羅服罪シタリキ。仲皇子反セシトキ、木兔宿禰物部大前宿禰等ト皇太子天智中ヲ扶クテ逃レ、瑞齒別皇子天正ニ從ヒ難波ニ至リ、仲皇子ヲ殺スコトヲ謀ル。刺領巾仲皇子ヲ刺ス。木兔宿禰瑞齒別皇子ニ言ツテ曰ハク、刺領巾我ニ功アリト雖、其ノ君ヲ殺ス。罪容スヘカラスト。乃之ヲ誅ス。履中天皇立チ給ヒテ、平群木兔宿禰蘇我滿智宿禰等ト國政ヲ執ル。子平群眞鳥雄略天皇ノ朝ニ大臣トナル。眞鳥ノ子ヲ鮪ト云フ。父子驕慢、人臣ノ禮ヲ失ヒ、一家終ニ亡フ。事後章ニ詳ナリ。

紀角宿禰

○五 紀氏 紀角宿禰應神天皇ノ朝ニ羽田、矢代、宿禰等ト百濟ニ往キ、辰斯王ノ無禮ヲ責メ、阿花王ヲ立テ、歸ル。仁德天皇ノ四十一年紀元六百七十年、紀角宿禰再勅ヲ奉ツテ百濟ニ往キ、國郡ヲ疆理シ、產物ヲ審録ス。子田鳥、仁德天皇ノ時、

紀氏ノ子孫

都怒國造トナル。雄略天皇ノ時紀小弓アリ所傳ナシト雖案ズルニ角宿禰ノ後ナリ。九年紀元五百蘇我韓子大伴談等ト新羅ヲ伐チテ功アリシガ病發シテ軍中ニ死セリ。欽明天皇ノ時紀男麻呂アリ。亦所傳ナシ。然レトモ必角宿禰ノ後ナラン。二十三年紀元一千新羅任那ヲ侵スニ當リ命ヲ被リ大將軍ト爲リテ征討シタリキ。此ノ如ク紀氏モ亦一大氏ニシテ世繁榮シ子孫常ニ重職ニ在リシナリ。

葛城國津彦

○六節 葛城氏

新羅汗禮斯伐毛麻利叱智富羅母智ヲ遣シ貢調シ其ノ先ニ質トセル微叱許智ヲ還ラシメント欲シ僞ヲ構ヘ奏請ス神功皇后覺リ給ハズシテ之ヲ許シ葛城襲津彦ニ命ヲテ微叱許智ヲ護送セシメ給フ。襲津彦往キテ對馬ノ鉏海ノ水門ニ宿ス。毛麻利叱智等相謀リ微叱許智ヲテ先新羅ニ逃レシメ、莖ヲ縛シテ人ト爲シ微叱許智ノ牀ニ置キ襲津彦ヲ給キテ曰ハク微叱許智遠ニ病ミ將ニ死セントスト。襲津彦人ヲ遣シ之ヲ視シメ始メテ其ノ欺カルハ知リテ大ニ怒リ毛麻利叱智等三人ヲ收メ檻中ニ囚ヘテ之ヲ焚キ殺シ直ニ新羅ニ抵リ踏鞞津ニ次シ攻メテ草羅城ヲ拔キ其ノ民ヲ虜ニシテ歸レリ。

葛城氏ノ子孫

後一年新羅貢セズ襲津彦師ヲ帥井テ之ヲ討ツ。應神天皇ノ十四年紀元四百加羅ニ使シ融通王ノ人口ヲ召シ、ニ新羅ノ爲ニ留メラレ、三年ヲ經テ還ル。子葦田宿禰女磐之媛仁德后アリ。葦田宿禰ノ孫女莖媛ハ市邊押磐皇子ニ嫁シ顯宗仁賢ノ二帝ヲ生ミ奉レリ。襲津彦ノ子ヲ磐村宿禰ト云ヒ其ノ子ヲ玉田宿禰ト云フ。允恭天皇ノ五年紀元一千先帝ノ殯宮ノ事ヲ掌レリ。時ニ會地震ス。天皇人ヲ遣リ殯宮ノ勳靜ヲ察セシメ給ヒシニ玉田在ラズ葛城ノ家ニ居テ男女ヲ集メ酒ヲ置キテ高會シ使者ヲ欺キ殺セリ。天皇玉田ヲ召シ給フ。玉田甲ヲ裏ニシテ來ル。天皇之ヲ怒リ將ニ殺サントシ給フ。玉田家ニ匿ル。乃兵ヲ發シ捕ヘテ之ヲ誅シ給ヘリ。仁德天皇ノ十二年紀元九百高麗ノ獻マタル鐵的ヲ射穿キテ名ヲ賜ハリシ的戶田宿禰ハ系譜明瞭ナラザレドモ蓋襲津彦ノ子ナリ。大日本史此玉田ノ子葛城圓大臣ハ眉輪王ノ其ノ宅ニ匿レタルヲ庇護シ大泊瀬皇子雄ノ爲ニ燔キ殺サレタリ。然レトモ葛城氏ハ此ニ絶ニス。子孫後世ニ垂ル。唯國政ノ要地ニ立ツ者ヲ出ダサハリシノミ。

前月田宿禰

第十六章 履中天皇ヨリ安康天皇ニ至ル

履中天皇

仲皇子ノ反

○一節 履中天皇、反正天皇 紀元一千六十年履中天皇位ニ即キ給フ。仁德天皇ノ皇子ナリ。都ヲ大倭ノ磐余ニ移シ、平群、木兔、宿禰、蘇我、滿智、宿禰、物部、伊弉諾、葛城、圓ヲシテ共ニ國政ヲ執ラシメ給ヘリ。在位六年ナリキ。仁德天皇崩シ給ヒシ時、同母弟仲皇子反ス。而シテ其ノ由リテ來ル所實ニ後宮ノ治マラザリシニ在ルナリ。天皇未位ニ即キ給ハザリシトキ、武内宿禰ノ男羽田、矢代、宿禰ノ女黑媛ヲ容レテ妃ト爲サント欲シ、仲皇子ヲ遣リ吉日ヲ告グシメ給フ。仲皇子皇太子ノ名ヲ冒シテ黑媛ヲ私シ、事覺ハル、ニ至リ、誅セラレシメ給フ。恐レテ遂ニ反セリ。仲皇子兵ヲ舉ゲテ皇太子ノ宮ヲ圍ム。時ニ平群、木兔、宿禰物部、大前、宿禰、阿知、使主、變テ皇太子ニ告グ。皇太子醉ヒテ信ヲ給ハズ。三人乃太子ヲ扶ケテ馬ニ乗ラシメ、逃レテ大和石上ノ振神宮ニ至ル。皇弟瑞齒別皇子皇太子ニ請ヒテ仲皇子ヲ誅セントシ、且彼死スル後、太子ノ尙己ヲ疑ヒ給ハシコトヲ恐レ、忠直ノ士ヲ請ヒテ俱ニ行カントシ給フ。皇太子乃平群、木兔ヲシテ從

反正天皇

皇位兄弟相及  
及アコトノ  
始

九恭天皇

後宮治マラ

ハシメ給ヘリ。皇太子ト仲皇子トハ皆瑞齒別皇子ノ兄ナリ。瑞齒別皇子因リテ嘆シテ曰ハク、順ニ就キ逆ヲ討ツ、己ムコトヲ得ズト。遂ニ難波ニ赴キ、仲皇子ノ近習隼人刺領巾ヲ誘ヒテ之ヲ刺殺セシム。皇子又刺領巾ヲ誅シ給フ。事乃平々皇太子立チ給フ。履中天皇是ナリ。天皇皇子坐サマリシヲ以テ、皇弟瑞齒別皇子ヲ立テ、皇太子トシ給ヘリ。

履中天皇崩御シ、瑞齒別皇子位ヲ繼ギ給フ。之ヲ反正天皇トス。皇位ノ兄弟相及ガコト茲ニ始マル。天皇河内國丹治ノ柴籬宮ニ在ス。在位六年。人民富饒、天下太平ナリキ。

○二節 九恭天皇(衣通姬)

反正天皇崩御シ、同母弟雄朝津間稚子、宿禰皇子位ヲ嗣ギ給フ。之ヲ九恭天皇トス。天皇幼時ヨリ篤疾坐シヌ。因リテ固ク位ヲ辭シ給ヒシカドモ、群臣強ヒテ請ヘルヲ以テ、終ニ位ニ即キ給ヘリ。三年、紀元一四其醫ヲ新羅ニ求メ、天皇ノ病ヲ治メシム。暫時ニシテ平癒ス。天皇之ヲ歡ヒ、厚ク賞シテ國ニ歸ラシメ給ヒキ。四年、詔シテ探湯ノ盟ヲ以テ、姓氏ヲ正シ給フ。其ノ事上ニ詳ナリ。第十二節 是ノ時、後宮又治マラザリキ。一日天皇皇后群卿

ヲ新室ニ讒シ、親琴ヲ撫シ給ヒ、皇后立チテ舞ヒ給ヘリ。當時ノ風俗、宴會ニ於テ舞フ者舞終フルトキハ、則自坐長ニ對シテ、娘子ヲ奉ラント曰ヘリ。而シテ皇后此ノ禮事ヲ言ヒ給ハス。蓋天皇ノ意中ヲ知り給ヘバナリ。天皇皇后ノ常禮ヲ失ヘルヲ責メ給フニ、皇后惶レテ復起チテ舞ヒ、舞終ヘテ、娘子ヲ奉ラント奏シ給フ。天皇即同ヒ給ハク、奉ル所ノ娘子ハ誰ソ、姓字ヲ知ラント欲スト。皇后已ムコトヲ得スシテ宣ハク、妾ノ弟名ハ弟姫、容姿絶妙無比、艶色衣ヲ徹シテ見ル。故ニ時人衣通姫ト號スト。天皇大ニ喜ビ、即弟姫ヲ近江ニ召シ給フ。弟姫皇后ノ情ヲ畏レテ參ラズ。七ヲヒ喚シ給フニ、七ヲヒ辭セリ。天皇舍人中臣、鳥賊津使主ニ勅シ、往キテ召サシメ給フ。弟姫、皇后ノ志ヲ傷フヲ欲セザルガ故ニ、身亡ブトモ參ラシト誓フ。鳥賊津使主ハ、臣天皇ノ嚴命ヲ奉マテ來ル。若姫ヲ將井ズシテ返ラバ極刑ヲ被ラン。寧庭ニ伏シテ死ナンノミト言ヒテ、七日七夜庭中ニ伏シ、飲食セザリキ。蓋密ニ懷中ノ繡ヲ食セシナリ。弟姫遂ニ參ル。然レドモ天皇皇后ノ不平ヲ畏レ、別ニ居殿ヲ藤原ニ構ヘテ居ラシメ給フ。適、皇子大泊瀬生マレ給ヒシ夕、天皇始メテ藤原ニ幸シ給ヘリ。皇后大ニ恨ミテ宣ハク、甚シキ哉、天皇ヤ。

衣通姫

皇太子ハ嗣スルヲ得ス

今妾死生相半ス。何ソコトサラ今夕ニ當リ藤原ニ幸シ給フカト、乃火ヲ産殿ニ放チテ死セントシ給フ。天皇大ニ驚キ、皇后ヲ慰諭シ給ヒキ。後弟姫ヲ茅渟ニ移シ、屢幸シ給フ。皇后奏シ給ハク、妾敢テ弟姫ヲ嫉ムニ非ズ。然レドモ陛下屢茅渟ニ幸ス。是百姓ノ苦ナリ。願ハクハ車駕ノ數ヲ除キ給ヘト。是ノ後幸シ給フコト稍希ナリ。衣通姫頗歌ヲ善クス。紀貫之古今集ノ序ニ小野小町ノ歌ヲ評シテ、小野小町は、古の衣通姫の流なり。愁なるやうにて強からず。言はれ、女の煩めるどころあるに似たり。強からぬは、女の歌なればなるべしト云ヘリ。天皇ノ廿四年ニ、後宮珍事アリ。即夏六月御膳ノ羹汁凝リテ氷ト爲リシコト是ナリ。天皇之ヲ異トシテ其ノ所由ヲトセシメ給フ。ト者曰ハク、内ニ亂レ有り。蓋親親相姦スルカト。時ニ人アリテ曰ハク、輕皇太子、同母妹ノ輕大娘ト姦スト。因リテ推問シ給フニ、辭既ニ實ナリ。然レドモ皇太子ハ儲君ナルガ故ニ罪スルヲ得ズ。乃輕大娘ヲ伊豫ニ流シ給ヒキ。

○三 安康天皇眉輪王

允恭天皇在位四十二ニシテ崩ヲ給フ。時ニ皇太子暴行多ク、婦女ヲ虐淫シ給ヒシカバ、國人皆之ヲ誇リ、群臣亦從ハズシテ悉ク

皇太子  
首殺シ給フ

穴穂皇子<sup>アノホ</sup>天安麻<sup>テンアンマ</sup>ニ隸ス。爰ニ皇太子穴穂皇子ヲ襲ハント欲シ、密ニ兵ヲ設ケ給フ。皇子亦兵ヲ起シ給ヒシニ、皇太子克クテ物部大前宿禰ノ宅ニ自殺シ給ヘリ。安康天皇即位ノ後、數年ヲ出テズシテ後宮復亂レキ。天皇仁徳天皇ノ皇子大草香ノ妹幡梭皇女ヲ以テ大泊瀬皇子<sup>オホノセ</sup>天皇略<sup>テンニ</sup>ニ配セントシ、根使主ヲ遣シテ之ヲ求メ給ヘリ。大草香皇子ハ喜ビテ承諾シタリシニ、根使主其ノ信契トシテ奉獻セル押木珠綬ヲ盜マント欲シ、天皇ニ讒シテ大草香皇子ヲ殺サシム。安康天皇ト大泊瀬皇子トハ兄弟ニ坐ス。而シテ大草香皇子ハ其ノ叔父ニ當レリ。サレバ女子ノ事ヨリシテ、兄弟相與シテ叔父ヲ殺シ給ヒシナリ。時ニ大草香皇子ノ家臣難波日香蚊<sup>ヒカガ</sup>父子、主ノ罪ナクシテ死セルヲ傷ミ、屍ヲ抱キテ悲泣シ、遂ニ自刎シテ其ノ側ニ死ス。天皇乃大泊瀬皇子ノ爲ニ幡梭皇女ヲ娶リ、自大草香皇子ノ妃中帯姫ヲ納レテ皇后トシ、頗之ヲ寵シ給フ。初メ皇后大草香皇子ノ家ニ在リテ生ミ給ヘル子ヲ眉輪王ト云フ。母ニ從ヒテ宮中ニ養ハル。一年天皇山宮ニ幸シ、樓ニ登リテ宴飲シ給ヒシ時、皇后ニ謂リ給ハク、汝ハ親昵スレドモ、朕眉輪ヲ畏ル。彼異日朕ガ其ノ父ヲ殺シ、コトヲ知ラバ、必朕ヲ仇トセント。眉輪

(一七四)

眉輪王大道  
ヲ行フ

王時ニ年七歳、樓下ニ遊戯ス。其ノ言ヲ聞キテ樓ニ登リ、天皇ノ醉ヒテ熟睡シ給ヘルヲ伺ヒ、刺シテ殺シ奉ル。在位三年ナリ。大舍人馳ヒテ樓ヲ大泊瀬皇子ニ報ズ。皇子諸兄ヲ疑ヒ、兵ヲ率ヒテ弟ノ八釣白彦皇子<sup>ヤツリシロヒコ</sup>ニ迫リ、其ノ所以ヲ問ヒ給ヒシニ、皇子答ヘズ。大泊瀬皇子怒リテ宣ハク、天皇ノ害ニ遭ヒ坐セルヲ聞キテ悲ミ駭カザルモノアラソヤト。刀ヲ挺キテ之ヲ斬リ、又兄ノ坂合黑彦皇子<sup>サカヒ</sup>ニ問ヒ給フ。皇子亦答ヘズ。大泊瀬皇子愈々怒リ、眉輪ヲ拷問シ給ヒシニ、眉輪曰ハク、臣素ヨリ天位ヲ求ムルニ非ズ。唯父ノ仇ヲ報ゼシノミト。黑彦皇子モ亦疑ハレソコトヲ恐レテ、竊ニ眉輪ニ語リ、共ニ逃レ出テ、葛城圓大臣<sup>ツツツ</sup>ノ家ニ匿ル。大泊瀬皇子使ヲ遣シテ二人ヲ乞ヒ給フ。大臣對ヘテ曰ハク、人臣事アルトキハ王室ニ入ル。未君主ノ臣ノ舍ニ隠レシヲ聞カズ、何ソ送ルニ忍ビント。乃其ノ第ヲ圍ミ、火ヲ縱チテ黑彦皇子及眉輪ト大臣トヲ焚殺シ給フ。坂合部連賢宿禰皇子ノ屍ヲ抱キテ燔死ス。

大泊瀬皇子位ニ即キ給フニ及ビテ、幡梭皇女皇后トナリ給ヘリ。嘗テ吳人ノ來、鶉セシ時、天皇根使主ヲシテ之ヲ饗セシメ、舍人ヲシテ饗宴ノ狀ヲ視察セシメ

根使主ノ奸  
惡露ル

大草香皇子  
ノ宛テ贈キ  
日香蚊ノ忠  
ヲ註シ給フ

後宮ノ亂レ  
以テ起リシ所

(七六)

給フ舍人歸リテ根使主ガ着ケタル珠纒ノ美麗ヲ賞贊ス。天皇之ヲ觀ント欲シ、群臣ヲシテ吳人ヲ養セシ時ノ如ク服飾セシメ、殿前ニ引見シ給フ。皇后根使主ガ珠纒ヲ見給ヒテ歎歎已マズ。天皇怪ミテ之ヲ問ヒ給フ。皇后宣ハク、根使主ガ悦ビ、獻シテ信契トセシ者ナリ。今根使主之ヲ着ケタレバ、疑テ根使主ニ致シ、覺エズ涙垂ル、ナリト。天皇根使主ノ姦ヲ悟リ、大ニ怒リテ詰問シ、遂ニ之ヲ誅シ、乃勅シテ大草香皇子ノ宛テ雪キ、又日香蚊ノ子孫ヲ索メテ、其ノ忠死ヲ旌シ給ヒキ。

○四當時帝室ノ事情

仁德天皇崩御ノ後政事ノ配スベキモノハ、屢中天皇史官ヲ諸國ニ置キ給ヒシト、允恭天皇姓氏ノ錯亂ヲ糾シ給ヒシトノ二事アルノミ。而シテ規律弛ミ、後宮類ニ亂レ、事婦女子ニ原因シテ兄弟相殺シ、遂ニ危害ヲ至尊ノ身ニ及ボスニ至リタル所以ノモノハ何ゾヤ。蓋帝權既ニ強固ニシテ内國ニ不順者ナク、外邦調貢ヲ絶タズシテ官庫亦常ニ充溢セルニ因リ、進取ノ氣象漸衰ヘ、太平ヲ樂ミ、情緒ヲ縱ニスル風隨ヒテ起レルニ因ルカ。然

海外ノ屬領  
ヲ失ヒシ所

レドモ當時皇室ノ部内ニ亂離ノ事アリシニモ關ラズ、天下ノ人民ニ對シテハ其ノ權勢頗強大ナリシト、大泊瀬雄略天皇ノ事跡以テ之ヲ證スベシ。天皇ハ實ニ日本建國以來ノ暴君ニシテ、殺伐ヲ好ミ、恐畏ヲ以テ天下ニ臨ミ給ヘリ。而シテ敢テ背クモノナカリシハ、臣民トシテ天位ノ侵ス可カラサルヲ知レバナリ。獨異域ノ人民ハ之ヲ知ラズ、是ニ因リ新羅先背キ、終ニ祖先累代ノ屬領ヲ失フニ至レリ。請フ其ノ事跡ヲ次章ニ述ベソ。



第十七章 雄略天皇專制

大泊瀨皇子  
市邊押磐皇子  
子御馬皇子  
ヲ殺シ給フ

○一市邊押磐皇子等ヲ殺シ位ニ即キ給フ 紀元千百十一年八月眉輪ノ變アリ。大泊瀨皇子之ニ乘シテ諸兄ヲ殺シ給ヒ、他ニ皇儲坐サズ而シテ屢中天皇ノ二子市邊押磐皇子及御馬皇子尙存ス。大泊瀨皇子允恭天皇ノ嘗テ位ヲ市邊押磐皇子ニ傳ヘ、後事ヲ付囑セントシ給ヒシヲ恨ミ、乃使ヲ市邊押磐皇子ニ遣シテ宣ハク、近江ノ狹々城山君韓袋、其ノ國蚊屋野ニ猪鹿多クアリ。戴角ハ枯樹ノ末ニ類シ、聚脚ハ弱木ノ林ノ如ク、呼吸氣息ハ朝露ニ似タリト上言セリ。願ハクハ孟冬作陰ノ月、寒風肅然ノ晨、皇子ト郊野ニ獵射シ、以テ情ヲ娛マシメント。十月、市邊押磐皇子、大泊瀨皇子ト蚊屋野ニ獵ス。大泊瀨皇子弓ヲ彎キ、馬ヲ驟セテ呼ビ給ハク、猪アリト。即市邊押磐皇子ヲ射殺シ給フ。皇子ノ帳内佐伯部賣輪又曰、屍ヲ抱キ、駭然トシテ所由ヲ解セズ。反側呼號シテ頭脚ニ往還ス。皇子又之ヲ誅シ給ヘリ。同月、御馬皇子嘗テ三輪君身狹ト善キヲ以テ、往キテ防ハントス。途ニシテ不意ニ遼軍ニ逢ヒ、逆戰久シカラズシテ捉ヘラル。大泊瀨

雄略天皇

大臣大連ヲ  
並ヘ置カレ  
シ始

池津媛石河  
ヲ醜利セラ

皇子強フルニ罪ヲ以テシ終ニ刑ニ處シ給フ。十一月朔、大泊瀨皇子有司ニ命ヲテ壇ヲ泊瀨朝倉ニ設クシメ、天皇ノ位ニ即キ、遂ニ宮ヲ定メ給ヘリ。雄略天皇是ナリ。

天皇平群、臣眞鳥ヲ以テ大臣ト爲シ、大伴連室屋ト物部連目トシ、以テ大連トシ給フ。大臣大連ヲ並ベオクコト此ニ始マル。大臣ハ皇別諸氏ノ統領ニシテ、大連ハ神別諸氏ノ統領ナリ。而シテ天皇ノ左右ニ侍シ、國政ヲ執ルコト、一ニ後世ノ左右大臣ノ如クナリキ。

○二節 天皇以心爲師

此ノ時代ニ於テ、天皇ノ權勢頗強固ナルニ至リシハ、雄略天皇ノ事跡ニテ明ナリ。天皇常ニ人ヲ威赫シテ強暴ノ御行ノミ多カリシカドモ、臣民皆怖レニ怖レテ服從シ奉リシハ、尤注目スベキ事ナリ。二年、紀元百十八七月、百濟ノ池津媛、天皇ノ將ニ幸セントシ給フニ、遼ヒテ石河、楯ト姦ス。天皇大ニ怒リ、大伴室屋、大連ニ命シ、來目部ヲシテ二人ノ四支ヲ木ニ張り、假殿ノ上ニ置キ、火ヲ以テ燒殺セシメ給ヘリ。十月、吉野ノ宮ニ幸シ給フ。御馬瀨ニ到リ給ヒシトキ、真人山ニ命シテ獵ヲ縱ニシ、重嶮ニ凌リ、長鞞ニ赴キ給ヒシニ未

天皇御者ヲ  
斬リ給フ

六人部ヲ  
殺ス

(一八〇)

移影ニ及バズシテ十二七八ヲ獲、鳥獸將ニ盡キントシタリ。遂ニ旋リテ林泉ニ  
憩ヒ、藪澤ニ相羊シ、行夫ヲ息メ、車馬ヲ展フ。乃群臣ニ問ヒ給ハク、獵場ノ樂、膳夫  
ヲシテ鮮ヲ割カシムルト、自割クト孰カト。群臣忽對フル者ナシ。是ニ於テ天皇  
大ニ怒リ、刀ヲ拔キテ御者大津馬飼ヲ斬リ給ヒキ。還幸ニ及ビテ國內ノ居民咸  
皆振怖ス。皇太后皇后ト之ヲ聞キテ大ニ懼レ、倭采女日媛ヲシテ酒ヲ舉ケ迎ヘ  
進メシメ給フ。天皇采女ノ面貌端麗、形容温雅ナルヲ見給ヒ、乃色ヲ和ケテ宣ハ  
ク、朕豈汝ノ姁咲ヲ親ルテ欲セザランヤト。相携ヘテ後宮ニ入り、太后ニ語リ給  
ハク、今日ノ遊獵大ニ禽獸ヲ獲タレバ、群臣ト鮮ヲ割キ野ニ饗セント欲シ、乃歷  
問スルニ能ク對フル者無カリキ。故ニ朕之ヲ嗔ルト。皇太后慰メ給ハク、陛下遊  
獵ノ場ニ六人部内ナ料理ヲ置カントシ給フ、群臣降問ノ意ヲ悟ラズシテ、默然  
タリシハ、理且對ヘ難カラシ。今貢スルモ未晚カラズ。請フ我ヲ以テ初メト爲サ  
シ。膳臣長野能ク突喰ヲ作ル。願ハクハ之ヲ貢セント。天皇跪禮シテ受ケ給フ。皇  
太后天皇ノ悦色ヲ視、歡喜懷ニ盈チ、更ニ人ヲ貢セント思ホシテ宣ハク、請フ我  
ガ厨人兔田御戸部、眞鋒田高天ノ二人ヲ加ヘ貢シ、以テ六人部ト爲サント。コレ

大惡天皇

天皇舍人ヲ  
殺シテ  
給フ

皇后ノ善諫

ヨリ以後大和國造吾子籠宿禰狹穗子鳥別ヲ貢シテ六人部トス。臣連伴造國造  
等モ亦相續ギテ之ヲ貢シタリキ。  
紀ニ曰ハク、天皇心ヲ以テ師ト爲シ、誤リテ人ヲ殺シタマフコト衆シ。天下誹謗  
シテ大惡天皇ト言フ。唯愛寵スル所ハ史部身狹村主青檜隈民使博德等ナリト。  
五年葛城山ニ獵シ給フ。時ニ靈鳥忽來ル。其ノ大サ雀ノ如ク、尾長クシテ地ニ曳  
キ、且鳴キテ曰ハク、努メヨ努メヨト。俄ニシテ噴猪草中ヨリ暴レ出テ、人ヲ逐  
フ。天皇舍人ニ詔シ給ハク、猛獸人ニ逢フトキハ即止マル。汝宜シク逆射シテ且  
刺スベシト。舍人性懦弱、榛樹ニ緣リテ色ヲ失シ、五情主ナシ。噴猪直ニ來リテ天  
皇ヲ噬マント欲ス。天皇弓ヲ以テサシ止メ、脚ヲ舉ケテ踏ミ殺シ給ヘリ。田罷ミ  
テ、舍人ヲ殺サント思ホス。舍人刑ニ臨ミ、歌ヲ作リテ曰ハク  
「やすみし、安ク知ラスニわがおほきみの、あそまし、遊獵シ給し、のうた  
ざりニ、かしこみ、長レわがにけのぼりし、ありをのうへの、荒丘ノはりがえ  
だ、枝ガあせを、我ガト」  
皇后舍人ヲ憐ミ、天皇ヲ諫止シ給フ。天皇宣ハク、皇后トシテ天皇ニ與ヒス。舍人

ヲ顯ミルハ何ゾヤト對ヘ給ハク國人皆謂フ陛下田獵ヲ好ムト今又獸ノ故ヲ以テ人ヲ斬ラントシ給フコレ豺狼ニ異ナルコトナキナリト天皇此ノ言ヲ得テ大ニ喜ビ給ヒ皇后ト車ニ上リテ歸リ萬歲ト呼ビテ宣ハク樂キカナ人皆禽獸ヲ獵シ獲タリ朕獨善言ヲ獵シ得テ歸ルト

○節三 天皇尊大ヲ示シ給フ

雄略天皇亦能ク皇室ノ威嚴ヲ保チ皇位

ノ尊大ヲ示シ給ヘリサレバ規律ノ極メテ嚴重ナリシコト此ノ時ノ如キハ無シ嘗テ皇后ヲ日下ニ訪ヒ給ヒシトキ道ヲ河内ニ取リ山上ニ登リテ國內ヲ望ミ給ヘバ堅魚木堅魚木ノ事第四卷上ケテ屋ヲ作レル家アリ天皇其ノ難ノ家タルヲ問ヒ給フ從者答ヘ奏ス志城大縣主ノ家ナリト天皇詔シ給ハク奴己ガ家ヲ天皇ノ御舍ノ如ク造レルカト即人ヲ遣リ其ノ家ヲ燒カシメ給フ大縣主大ニ懼レ誓首シテ物ヲ獻シ罪ヲ謝セリ

四年天皇吉野ニ獵シ給フニ當リ此來リテ天皇ノ臂ヲ嚼ヒタリシニ蜻蛉忽然トシテ飛ビ來リ此ヲ齧ミキ天皇其ノ心有ルコトヲ喜ビ給ヒテ御歌アリ

祝律ノ殿ナ  
ノ時ニシク  
ハナシ

志城大縣主  
メ給フ

天皇尊大ヲ  
示シ給フ

事おほまへにまうす御前ニおほきみはそこをきかして大君ハ其ノ事ヲたままきのあくらにたし玉立ヲ給ヒしづまきのあくらにたし後文立ノヒ給ししまつと鹿待わがいませば朕ハさあまつと猪待わがたしせばたぐぶらに手解あむかきつきつ若キツそのあむをあきつはやくひ蜻蛉はふむしもし虫おほきみにまつらふ大君ニながかたはおかん汝ノ記念あきつしまやまど日本津洲ト

因リテ此地ヲ名ヅケテ蜻蛉野ト云ヒキ天皇人君ノ尊大ヲ示シ給ヒシ意明ニ見エタリ又吉備下道臣前津屋ガ賊ニ小女ト幼女トヲ鬪ハセ又大雄雞ト小雄雞トヲ鬪ハセテ其ノ弱キヲ天皇ノ物ト稱シタリシ罪ニ因リ全族七十人ヲ戮セラレシコト前ニ述ベタルガ如シ第十一章 第十二節

○節四 任那國司ノ叛逆

天皇私情ニ因リテ臣下ノ恨ヲ買ヒ遂ニ三韓ノ

亂ヲ來シ韓土ニ於ケル日本ノ權勢ヲ失ヒ給フニ至レリ七年吉備上道臣田狹殿側ニ侍シ盛ニ其ノ妻稚媛ヲ朋友ニ稱シテ曰ハク天下ノ麗人吾ガ婦ニ若クモノナシ茂ナリ綽ナリ諸ノ好備ハレリ暉ナリ温ナリ諸相足レリ鈴花御

天皇田狹ノ  
妻ヲ幸シ給  
フ  
田狹任那ニ  
反ス

天皇ノ命  
復日本府ニ  
行ハレズ

セズ蘭澤加フルコトナシ、曠世儔罕ニシテ、當時ノ獨秀ナリト。天皇耳ヲ傾ケテ、遙ニ聽キ、心ニ悦ビ給ヒ、乃稚媛ヲ以テ女御ト爲サント欲シ、田狹ヲ拜シテ任那國司ト爲シ、俄ニ稚媛ニ幸シ給ヒヌ。是ヨリ先田狹稚媛ヲ娶リテ兄君弟君ヲ生メリ。既ニ任所ニ之キ、天皇ノ其ノ婦ヲ幸シ給フヲ聞キテ大ニ恨ミ、日本ニ背キ、新羅ニ寄リテ援ヲ求ム。天皇田狹ノ子弟君ト吉備海部直赤尾トニ詔シ給ハク、「汝宜シク往キテ新羅ヲ討ツベシト。是ニ於テ弟君命ヲ銜リ、衆ヲ率井、行キテ百濟ニ到リ、躊躇シテ敢テ新羅ヲ伐タズ。百濟ノ貢スル所ノ今來ノ才伎ヲ大島ノ中ニ集メ、風ニ託稱シテ淹留スルコト數月、田狹喜ビ、密ニ人ヲ百濟ニ遣リ、弟君ヲ戒メテ曰ハク、「汝ノ首何ノ牢綱アリテ人ヲ伐ツカ。傳ヘ聞ク、天皇吾ガ婦ヲ幸シテ遂ニ兒息アリト、禍其ノ身ニ及バンコト足ヲ踏テ待ツベシ。汝百濟ニ踰據シ、日本ニ通ズルコト勿レ。吾任那ヲ據有シテ、亦日本ニ通ズルコト無カラント。弟君ノ婦、椋媛國家ノ情深ク、君臣ノ義切ナリ。斯ノ謀叛ヲ惡ミ、竊ニ火ヲ殺シテ室内ニ隠シ埋メ、乃海部直赤尾ト百濟王ノ獻セシ手末ノ才伎ヲ將井テ大島ニ歸ル。田狹ノ反シテ日本府ニ據リシヨリ、天皇ノ命令復日本府ニ行ハレズ。是

天皇ノ御事  
ノハレズ

天皇ノ御事  
ノハレズ

ニ因リテ三韓亂レ、新羅、高麗我ニ背キ、百濟遂ニ高麗ノ爲ニ亡ボザル、ニ至レリ。其ノ事別ニ述アル所アラソ。

○五 節 工 藝 ヲ 獎 勵 ス

雄略天皇ノ事蹟トシテ數ヘ奉ルベキハ唯一アリ、即盛ニ外邦ノ工藝ヲ入レテ本邦ノ工藝ヲ獎勵シ、就中蠶業ヲ勸メ給ヒシコト是ナリ。天皇融通王<sup>弓月</sup>ノ子孫ノ爲ニ散逸セル秦氏ヲ集メ、秦酒公ヲ以テ其ノ伴造トシテ宇都萬佐ノ姓ヲ賜ヒ、又阿知使主ノ子孫ヲ漢人ノ伴造トシテ漢直ノ姓ヲ賜ヒ、以テ支那風ノ職工ヲ進メ給ヒシコト前ニ述ベタリ。六年、天皇后妃ヲシテ親桑ヲ取り蠶事ヲ勸メシメント思ホシ、螺贏ト云フ者ニ命シテ國內ノ蠶ヲ聚メシメ給フ。而シテ螺贏誤リテ嬰兒ヲ聚メ、天皇ニ奉獻セリ。天皇大ニ笑ヒ、嬰兒ヲ螺贏ニ賜ヒテ養ハシメ、姓ヲ少子部連ト賜ヒキ。七年、弟君ヲ遣シテ新羅ヲ伐タシメントシ給ヘルトキ、西漢ノ才伎、因知利奏シテ曰ハク、「臣ヨリ巧ナル者多ク、韓國ニ在リ、召シ給ヘト。天皇乃歎因知利ヲ弟君ニ副ヘテ遣シ、勅書ヲ百濟王ニ下シテ工藝ニ巧ナル者ヲ獻セシメ給フ。弟君ノ妻其ノ夫ヲ殺シ、自百濟ノ獻セシ手末ノ才伎ヲ率井テ歸レルトキ、天皇之レヲ廣

百種ノ工藝  
振起ス

吳工女ヲ貢  
ス

桑ヲ天下ニ  
植エシム

津邑ニ置キ給ヘリ。然ルニ病死スルモノ多カリシカバ、更ニ東漢直掬ニ命シ、  
 新漢ノ陶部高貴、鞍部堅貴、壽部因斯羅我、錦部定安、那錦、譯語、卯安、那等ヲ上、桃原、  
 下、桃原、真神原ノ三地ニ移サシメ給フ。是ノ時ヨリ百種ノ工藝振起セリ。又魏ノ  
 文帝ノ後ナル安貴公ト云フ人モ、雄略天皇ノ御時四衆ヲ率井テ歸化ス。男龍名、  
 辰繪工ヲ善クス。ト姓氏錄ニ見エタレバ、本邦支那風藝術ノ始モ遠ク此ノ御代  
 ニ在ルナリ。十四年、身狹材主青等、吳國ノ使ト吳國ノ獻セシ所ノ手末ノ才伎、漢  
 織、吳織及衣縫、兄媛、弟媛等ヲ將井テ住吉津ニ泊ス。是ノ月吳客ノ道ヲ爲リテ磯  
 齒津ノ路ニ通シ、吳坂ト名ヅク。蓋以テ紀念トヒラレシナリ。三月、臣連ニ命シ、吳  
 使ヲ迎ヘシメ、乃吳人ヲ檜隈野ニ安置シ、因リテ吳原ト名ク。衣縫、兄媛ヲ以テハ  
 三輪ノ神ニ奉リ、弟媛ヲ以テ漢衣縫部ト爲シ給フ。漢織、吳織、衣縫ノ後ヲ飛鳥衣  
 縫部ト云フ。四月、天皇、使主ニ命シテ共食者ト爲シ、石上高坂原ニ於テ吳人ヲ  
 饗ヒシメ給フ。使主ノ舊惡始メテ露見シ、天皇大草香皇子ノ宛ヲ知リ給ヒシ  
 ハ此ノ時ナリ。十六年、詔シテ桑ヲ天下ノ國縣ニ植エシメ、又秦民ヲ諸國ニ散  
 遷シテ府調ヲ獻セシメ給フ。蓋悉集メテ一地ニ置クハ產殖ノ爲不利ナルモノ

多キニ因レリ。カク天皇ノ百工ノ獎勵ヲ勉メ給ヒシハ、恐ラクハ朝廷ノ壯觀  
 ヲ欲シ給ヒテナラン。然レドモ國民ノ爲ニ最大利益アリシコトハ疑ヲ容レザ  
 ルナリ。

○節大藏ヲ起ス 初メ祭事ト政事トノ未タ分レザリシトキハ、神物官物  
 コレヲ同倉ニ藏シ、齋部氏ヲシテ掌理セシメラレキ。三韓征服ノ後朝貢絶エ  
 サルコト數十年。是ニ於テ朝廷豊富ナリ。乃チ履中天皇ノ時新ニ内藏ヲ作り、阿  
 智使主ト王仁トヲシテ出納ヲ錄セシメタマヘリ。蓋其ノ書ト算トヲ知レルヲ  
 以テナリ。雄略天皇ニ至リ、秦、酒、公等盛ニ蠶業ヲ興シ、其ノ織ル所ヲ貢獻セシヨ  
 リ、絹線殿前ニ堆積シ、諸國ノ朝貢モ亦年々充溢シタリ。因リテ更ニ秦氏ノ民ヲ  
 役シ、八丈ノ大藏ヲ宮側ニ造ラル。即チ齋藏、内藏、大藏ヲ以テ三藏ト爲ス。泊瀬朝  
 倉、宮ノ名コ、ニ出ツ。蘇我、滿智三藏ヲ檢校ス。是レヨリ齋部氏衰ヘ蘇我氏榮ユ  
 ト云フ。

二十三年天皇崩シ給ヘリ。遺詔ノ中、但朝野ノ衣冠未鮮麗ナルコトヲ得ズ、刑政  
 猶未善ヲ盡サズ、言ヲ與ゲ此ヲ念ヘバ、唯以テ恨ヲ留ムノ語アリ。蓋晩年ニ至リ

三藏  
泊瀬朝倉ノ  
宮

頗經世ノ念ヲ起シ給ヒシナラン。

(一八八)

第十八章 清寧天皇ヨリ宣化天皇ニ至ル

白髮皇子

星川皇子等  
謀殺セラル

○節 星川皇子謀反 雄略天皇葛城圓大臣ノ女韓姬ヲ妃トシ、白髮皇子（白髮皇子）天皇ヲ生ミ給フ。皇子生マレナガラニシテ髮白ク坐ス。天皇之ヲ靈異トシ、二十二年（紀元八百八十一年）立テテ皇太子トシ給ヘリ。天皇田狹ノ妻吉備上道臣女稚媛ヲ妃トシ、磐城皇子ト星川稚宮皇子トヲ生ミ給ヘリ。天皇病篤ク坐セルトキ、大伴室屋大連ト東漢掬直トニ遺勅シ給ハク、星川心性悖惡、行爲粗暴ナリ、朕崩セン後ハ、將ニ皇太子ヲ害セントス。大連等民部廣大ニシテ國ニ充盈ヒリ、努力相助ク、侮慢セシムルコト勿レト。崩ズルニ及ヒテ吉備稚媛星川王ニ教ヘテ曰ハク、天皇ノ位ニ登ラント欲セバ、先大藏ノ官ヲ取レト。依リテ星川王其ノ志アリ、磐城皇子之ヲ止ムレトモ聽カズ。即大藏ノ官ヲ取リ、外門ヲ閉鎖シテ防禦ニ備ヘ、自由ニ官物ヲ費用ス。大伴室屋大連東漢掬直ト遺詔ニ從ヒ、軍士ヲ發シテ大藏ヲ圍ミ、火ヲ放テテ燔殺ス。吉備稚媛、磐城皇子、兄君（田狹皇子）星川ニ從ヒ、共ニ燔殺セラル。

清寧天皇

國司

御名代ノ民ヲ匿キ給フ

(一九〇)

○二清寧天皇 是ニ於テ大伴、室屋、大連、璽ヲ皇太子ニ奉ル、乃有司ニ命シ、壇ヲ大倭磐余ノ瓊栗ニ設ケ、天皇ノ位ニ即キ給フ、之ヲ清寧天皇トス、遂ニ宮ヲ定メ給ヘリ。大伴、室屋、大連タリ、平群、真鳥、大臣タルコト故ノ如シ、而シテ大臣ノ權勢ハ稍、大連ニ讓ルモノアリキ。臣、連、伴、造等、各、其ノ職位ニ仍ル、時ニ紀元千百四十年ナリ。二年、天皇、臣連ヲ諸國ニ遣シテ、風俗ヲ巡省セシメ給フ、之ヲ國司ト稱シタリ。蓋第二期ニハ、各國ニ國造アリ、而シテ國司ハ第四期、即大化改新ノトキ始メテ置カレシ官ナリ、然レドモ、日本書紀仁德天皇ノ條ニ、近海、國司アリ、雄略天皇ノ條ニ、任那、國司アリ、清寧天皇ノ條ニ、伊豫、久目部、小楯ヲ播磨國司ト稱シ、事ハ次節又第三期ノ聖德太子十七憲法ニ、國司、國造ノ語アリ、因リテ大化以前ニ於テモ、時ニ巡察ノ官ヲ設ケ、之ヲ國司ト稱シタリト云フ説アルナリ。清寧天皇在位五年、國內無事ナリ、曾テ臣連ヲ大廷ニ宴シ、綿帛ヲ賜ヒ、各、其ノ自取ルニ任ゼラレキ。

○三弘計王、億計王、清寧天皇繼嗣坐サズ、乃大伴、室屋、大連ヲ諸國ニ遣シテ、部民ヲ課シ、以テ白髮部、舍人、白髮部、膳夫、白髮部、鞆負ヲ置キ、御名代ノ民ト

二王子億計トナリ給フ

シテ遺跡ヲ垂レシメ給ヘリ、或ハ云フ、天皇大連ニ命シテ諸國ヲ巡行シ、先代天皇ノ遺子ヲ求メシメラレシナリト。時ニ弘計、億計ノ二王隱レテ民間ニ坐セリ、王ハ即雄略天皇ノ爲ニ蚊屋野ニ於テ射殺セラレシ市邊押磐皇子ノ遺子ニシテ、履中天皇ノ皇孫ナリ。二王父ノ射ラレシヲ聞キ、懼レテ隱レントシ給フ、而シテ人皆天皇ノ威勢ヲ憚リ、敢テ保庇スル者ナシ。皇子ノ帳内ニ日下部使主ト云フ者アリ、其ノ子吾田彦ト、竊ニ二王ヲ奉シテ丹波國余社郡ニ避ケ、名ヲ田疾來ト改ム、而シテ尙追跡ヲ恐レ、播磨國縮見山ノ石室ニ入り自經シテ死セリ。二王使主ノ之ヲ所ヲ識ラス、播磨國赤石郡ニ行キ、俱ニ名ヲ丹波小子ト改メ、縮見ノ屯倉首忍海部細目ノ僮僕トナリ、三十秋ヲ經給ヘリ、而シテ吾田彦ハ二王ヲ離レズ、常ニ臣從セリ。清寧天皇ノ二年、播磨國司伊豫來目部小楯赤石郡ニ於テ自新嘗ノ供物ヲ調ス、屯倉首忍海部細目、國司ヲ新室ニ饗ス、弘計王乃億計王ニ謂リ給ハク、亂ヲ斯ニ避ケ、年數紀ヲ除ユ、名ヲ顯シ、貴ヲ著スハ、方ニ今宵ニ屬セリト。億計王惻然トシテ歎シテ曰ハク、ソレ自導揚シテ害セラルト、身ヲ全クシテ厄ヲ免ル、トイゾレソヤト。弘計王曰ハク、吾等ハ是去來穗別天皇ノ

孫ナリ而シテ困ミテ人ニ事ヘ牛馬ヲ飼牧ス、豈名ヲ顯シテ害セラル、ニ若カ  
 ソヤトテ兄弟相抱キ泣涕シ給フ。億計王曰ハク、然ラバ則弟ニ非ズシテ誰カ能  
 ク此ノ大事ヲ成サント。弘計王固辭シテ曰ハク、僕不才ナリ。豈敢テ當ランヤト。  
 億計王曰ハク、弟ハ英才賢徳ナリ。必過チナカラント。相譲リ給フコト再三ナリ  
 シテ、弘計王遂ニ諾シ給ヘリ。時ニ屯倉、首兄弟ニ命ツテ、竊傍ニ居リ、左右ニ燭  
 ナ乗ラシム。夜深ク酒酣ニシテ次第ニ舞ヒ訖ヘヌ。屯倉、首國司小橋ニ謂ヒケラ  
 ク、僕此ノ燭ヲ乗ル者ヲ見ルニ、人ヲ貴ビ己ヲ賤ミ、人ヲ先ニ己ヲ後ニシ、節ヲ  
 尊ビテ禮ヲ明ニス。君子ト謂フヘシト。是ニ於テ小橋亦絃ヲ撫シ、燭ヲ乗ル者ニ  
 命ツテ起チテ舞ハシム。兄弟相譲リ給フコト久シ。客之ヲ噴ム。億計王乃起チテ  
 舞ヒ、次ニ弘計王起チ給フ。衣帶ヲ整ヘ室壽ヲ爲シ給ハク、

「つきたつる築キ立ルわむろつなね、葛根つきたつるはしらは、築キ立ッこのい  
 へぎみの、此ノ家みこころの御心、しづめなり、鐘ナどりあぐる、取リ舞うつば  
 りは、棟梁、このいへぎみのみこころのはやしなり、林ナどりあける、取リ置た  
 るきは、棟棟このいへぎみのみこころのどしのほりなり、齊ヒどりあける  
 ナリ、とりあける

えつりは、直このいへぎみのみこころのたひらぎなり、平キどりゆへつるな  
 ねは、葛このいへぎみのみこころのかためなり、御ナリとりふけるかやは、取  
 舞ハク、このいへぎみのみとみのあまりなり、御ナリいづもは、出にひはり、  
 新にひはりのとつかしねのは、和ノさらげに、淡かめるおほみきを、御  
 ナ酒うまらにをやらふるかね、ス飲、あこたち、音があしびきの山ノ、枕ノハ  
 このかたやまの山ノ、傍さをしかのつ、の角ささげて、捧がわがまはん、  
 ハン、舞うまきけ酒、えかのいちに、市ニあたひもてかはず、直モテ、買ハズ、即手  
 義テ、たなそこもやら、に、手ニうちあげたまへ、拍マヘ、わがどこよたち、  
 人、長、壽

壽キ畢ヘテ乃起チ、節ニ合ハセテ歌ヒ給ハク、  
 「いなむしろ、枕かはそひやなぎ、河傍みづゆけは、水行なびきあきたち、立キ起  
 そのねはうせず、失セズ、根ハト。  
 蓋吾今名ヲ匿シ人ニ從ヘドモ、元貴人ナルコトヲ失ハズトノ意ヲ微示セラレ  
 シナリ。小橋曰ハク、可、願ハクハ復聞カント。弘計王ニ遂ニ舞ヲ、作、舞ヲ起  
 帝國史略 第二期 第十八章 清寧天皇ヨリ宣化天皇ニ至ル (一九三)



ヲ云シテ語ヒテ宣ハク、

「やまとは大倭、そそのちはら原、あさちはら原、あどひやつこらまこれなり、  
兄弟は、  
是ナリト。」

弘計王素性

ヲ明シ給フ

小楯深ク怪ミ更ニ唱ヘシム。乃復語ヒ給ハク

いそのかみ石ふるのかみすぎ、神祖もときり、すゑおしはらひ未排ひいちの  
へのみやに宮ニ遊ノあめのしたしろしめし、天治あめよろづくによろづ  
天萬國おしはのみことの御、みすゑやつこらこれなり、  
萬ナリおしはのみことの御、みすゑやつこらこれなり、  
是ナリト。

小楯大ニ驚キ、席ヲ離レテ再拜シ、事ヲ承ケテ供給シ、屬ヲ率テ欽伏ス。是ニ於  
テ郡民ヲ發シテ宮ヲ造リ、權ニ二王ヲ安置シ、自京都ニ詣リ、二王ヲ迎ヘンコト  
ヲ奏請ス。白髮天皇喜ビテ宣ハク、朕子ナシ。以テ嗣トスベシト。乃大臣大連ト策  
ヲ禁中ニ定メ、播磨國司來目部小楯ヲシテ、左右ノ舍人ヲ將、赤石郡ニ至リテ  
奉迎セシメ給ヒキ。

顯宗天皇

○四節顯宗天皇 清寧天皇ノ三年ニ億計王ヲ立テ、皇太子トシ、弘計王ヲ

以テ皇子トシ給ヘリ。五年天皇崩ヲ給フニ及ビテ、兄弟位ヲ讓リ給ヒ久シク決

飯豐青皇女  
假ニ朝政ヲ  
執リ給フ

億計王トシ  
弘計王トシ

弘計王位ニ  
即キ給フ

セザリシカバ、天皇ノ姉飯豐青皇女忍海ノ角刺宮ニ居テ假ニ朝政ヲ執リ給ヒ  
キ。當時ノ歌ニ曰ハク、  
やまどへに遊みがほしものは、見物欲おしぬみの、忍海このたかきなる  
城ナル高つぬさしのみや。」

而シテ皇女モ亦同年十一月ニ至リテ崩ヲ給ヘリ。十二月皇太子億計王百官  
ヲ會シ天皇ノ璽ヲ取リテ、弘計王ノ座ニ置キ、再拜シテ自諸臣ノ列ニ從ヒ、乃宣  
ハク、天皇ノ位ハ功アル者ノ居ルベキ所ナリ。我が今日アルハ皆弟ノ功ナリ。故  
ニ天下ヲ以テ弟ニ讓ラント。弘計王亦固ク辭シテ宣ハク、我ハ弟ナリ。兄ノ上ニ  
居ルベカラズ。且先帝兄ヲ以テ皇太子ニ立テ給ヒシニ非ズヤト。紀元千四百十  
五年春正月、大臣大連等弘計王ニ啓シテ曰ハク、天位久シク空シキトキハ、恐ラ  
クハ藩國群僚ヲシテ望ヲ失ハシメン。皇太子ハ兄ナリ。大王ハ弟ナリ。弟トシテ  
兄ノ命ヲ奉リ、以テ皇太子推讓ノ德ヲ明ナラシメ給フハ、亦慈順ト謂フヘキカ  
ト。強ヒテ承統ヲ請ヒテ息マズ。弘計王制シテ宣ハク、可シト。乃公卿百僚ヲ飛鳥  
ノ八釣宮ニ召シテ天皇ノ位ニ即キ給フ。億計王皇太子ニ坐スコト故ノ如シ。天

下忻々タリ。同月、允恭天皇ノ曾孫難波小野王ヲ立テ、皇后トシ、天下ニ赦シ給ヘリ。

○五節 蚊屋野ニ遺骨ヲ求ム

二月、天皇父皇子ノ非命ヲ痛ミ、億計王ト往事ヲ語リ、悲泣憤慨ニ勝ヘ給ハズ。其ノ遺骨ヲ求メ給ヘドモ、絶エテ知ル者ナシ。翌月、耆宿ヲ召シ、聚メテ親歴問シ給フ。一老嫗アリ、進ミテ曰ハク、置目本名名媛ノ御骨ノ埋所ヲ知レリ。願ハクハ示シ奉ラント。天皇乃億計王ト近江國蚊屋野ニ到リ、發掘シテ見給フニ、果シテ婦ノ言ノ如シ。兄弟穴ニ臨ミ、哀號シテ宣ハク、古ヨリ以來斯ノ如ク酷ナルハ莫シト。初メ市邊押磐皇子ノ殺サレ給フトキ、帳内佐伯部賣輪共ニ殺サレシヲ以テ、其ノ尸皇子ノ骨ト交横シテ能ク別ツ者ナシ。爰ニ磐坂皇子ノ乳母アリ、奏シテ曰ハク、賣輪ハ上齒墮落セリ。之ヲ以テ別ツベシト。是ニ於テ僅ニ髑髏ヲ別テ得タリ。然レドモ四支諸骨ハ竟ニ別テ難シ。因リテ蚊屋野ノ中ニ雙陵ヲ造リ、葬儀ヲ同クシテ葬リ給フ。天皇老嫗ヲ厚遇シテ宮傍ニ居ラシメ、毎日之ヲ召ス。老嫗伶俜羸弱ニシテ行歩ニ便ナラズ。天皇乃命ヲテ繩ヲ張リテ引キ、繩シ、以テ出入ヲ扶クシメ、繩端ニ鐔ヲ懸ク。老嫗ニ詔リシ

置目遺骨ノ所在ヲ知ル

雙陵ヲ造リ給フ

置目厚遇ヲ蒙ル

給ハク、入ラバ則之ヲ鳴ラセ。朕汝ノ到レルヲ知ラント。老嫗詔ヲ奉リ、毎日鐔ヲ鳴ラシテ進ム。天皇遙ニ鐔聲ヲ聞キ、歌ヒ給ハク、  
「あさぢはら、浅茅をそねをすぎ、尾曾村もつたふ、首傳フナリ。鐔チ傳ヒ來ル給  
狀ニ載レテヨ、ぬてゆらぐもよヲケハ、實助ナリ。よきめくらしも。置目來ト。

曲水ノ宴

小楯ヲ賞シテ山官ニ拜シ給フ

韓併刑ニ臨ミ命ヲ惜ミ、言詞哀ヲ極ム

三月、後苑ニ幸シ、曲水ノ宴ヲ行ヒ給フ。四月、詔シ給ハク、凡人主ノ民ヲ勸ムル所以ハ、惟官ヲ授クルナリ。國ヲ興ス所以ハ、惟功ヲ賞スルナリ。ソレ前、播磨國司來目部小楯、朕ヲ求メ迎ヘタリ。ソノ功茂シ、志願スル所ヲ言ヘ、隨ヒテ許サント。小楯謝シテ曰ハク、山官ハ宿ヨリ願フ所ナリト。乃山官ニ拜シ、改メテ姓ヲ山部連ト賜ヒ、吉備臣ヲ以テ副ト爲シ、山守部ノ民ヲ賜ヒ、以テ其ノ功ヲ顯シ給ヒ、寵愛殊絶ナリ。狹々城山君韓併宿禰ハ、大泊瀬皇子ノ押磐皇子ヲ殺シ給フヲ助ケタリ。因リテ五月之ヲ刑セントシ給フ。韓併刑ニ臨ミ、命ヲ惜ミ、言詞哀ヲ極ム。天皇戮スルニ忍ヒズ。陵戸ニ充テ、兼テ山ヲ守ラシメ、籍帳ヲ削除シテ、奴隸トシ、山部連ニ隸屬セシメ給ヒ、又其ノ同胞倭併宿禰ハ、置目ノ兄ナリシカバ、妹ノ

聖目ニ歌ヲ

功ニ因リ、本姓狹々城山君ヲ賜ヒテ、其ノ氏ヲ繼ガシメ給ヘリ。  
二年九月、置目氣力衰邁、老髦虛羸、繩アルモ尙進歩スルコト能ハス。因リテ近江國ニ歸リ、其ノ餘日ヲ送ランコトヲ請フ。天皇痛惋ニ勝ヘ給ハズ、物千段ヲ給ヒ、アラカサメ岐路ヲ傷ミ、再會ノ難キヲ感サ、乃歌ヲ賜ヘリ。曰ハク、

「あきめもよ、置目あふみのあきめ、近江ノあすよりは、明日みやまがくりて、  
深山ニみえずかもあらん、見エズナト。」

○六 天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ 二年三月、曲水ノ宴ヲ後苑ニ張リ、公卿大夫、臣連、國造、伴造ヲ集メテ酒食ヲ賜フ。群臣頻ニ萬歳ヲ稱ス。

天皇父ノ靈ヲ給フ

天皇、皇太子億計王ニ宣ハク、吾ガ父王罪オハセズ。然ルヲ大泊瀨、天皇射殺シテ骨ヲ郊野ニ棄テ給ヘリ。今ニ至リテ憤歎懷ニ盈ツ。ソレ匹夫ノ子モ父母ノ讐ニ居テハ、苦ニ寝テ千ニ枕シテ國ヲ共ニセズ。市朝ニ遇フトモ兵ヲ反サズシテ闘フ。况ヤ吾立チテ天子タルコト、茲ニ二年、願ハクハ其ノ陵ヲ壞チ、骨ヲ掘キテ投

億計王ノ善

グ散サン。亦孝ナラズヤト。億計王歎歎シテ答ヘ給フコト能ハズ。乃諫メ給ハク、不可ナリ。大泊瀨、天皇ハ萬機ヲ正統シ、天下ニ照臨シ給ヒ、華夷欣仰シ奉レル。天

皇ノ御身ナリ。吾ガ父ノ先王ハ、是天皇ノ子タリトモ、沌道ニ遭遇シテ天位ニ登リ給ハズ。是ヲ以テ尊卑自別ナリ。而ルヲ忍ビテ陵墓ヲ壞チ給ハバ、誰ヲ人主トシテ以テ天ノ靈ニ奉ラント。是日本書紀ノ紀事ナリ。而シテ古事記ノ傳フル所モ亦同シ。曰ハク、

「天皇深ク其ノ父王ヲ殺シシ大長谷、天皇ヲ怨ミ、其ノ靈ニ報イント欲ス。故ニ其ノ大長谷、天皇ノ御陵ヲ毀タント欲シテ人ヲ遣シ給フ。之ノ時其ノ兄意富

禰命奏シテ言ハク、是ノ御陵ヲ破壞シ給フニ、他人ヲ遣ス可カラズ。僕自行キ、天皇ノ御心ノ如ク破リテ參出シ。天皇詔ハク、然レバ命ノ隨ニ幸行シ玉フベシト。是ヲ以テ意富禰命自下幸シテ、少シク其ノ陵傍ノ土ヲ掘リ給ヒキ。天皇

詔シテ云ハク、父王ノ仇ヲ報イント欲セバ、必悉其ノ陵ヲ破壞セン。何ソ少ク掘リ給フ乎ト。答ヘテ曰ハク、父王ノ怨ヲ其ノ靈ニ報イント欲スルハ、是誠ニ

理ナリ。然レドモ其ノ大長谷、天皇ハ父ノ怨タリトモ、還リテ我が從父タリ。亦

天下ヲ治メ給ヒシ。天皇ナリ。是今單ニ父ハ仇トスル志ヲ取リ、悉天下ヲ治メ給ヒシ。天皇ノ陵ヲ破ラバ、後人必誹謗セン。唯父王ノ仇ハ報イズハアル可カ

ラズ。故ニ少ク其ノ陵邊ヲ堀ル。既ニ是ノ耻ヲ以テ後世ニ示スニ足レリト。此ノ如ク奏シ給ヘバ、天皇答ヘテ詔ハク、是亦大理ナリ。命ノ如クニシテ可ナリト。

○七節 仁賢天皇

顯宗天皇在位三年ニシテ崩ヲ給ヘリ。是ノ時、天下安平、民

備役ナク、歲比ニ登稔シ、百姓殷富、稻一斛ニ銀錢一文、馬野ニ被ルト日本書紀ニ見エタリ。蓋當時我が邦未鑄錢ノ事アラズ。案スルニ此ニ所謂銀錢ハ、韓國ヨリ輸入シタリシモノナラン。

仁賢天皇

紀元千四百四十八年億計王位ニ即キ給フ。之ヲ仁賢天皇トス。天皇在位十一年、仁義ノ政ヲ行ヒ給ヘリ。是ノ時國中無事、吏ハ其ノ官ニ稱ヒ、民ハ其ノ業ニ安ソマ

顯宗仁賢二帝ノ治

海内仁ニ歸シ、五穀登衍シ、蠶麥善ク收マリ、遠近清平ニシテ戶口慈殖スト云ヘリ日本書紀。蓋顯宗仁賢ノ二帝ハ、久シク邊境ニ坐シテ百姓ノ憂苦ヲ知り、德ヲ布

キ惠ヲ施シ給ヒシニ因リ政令流行ハレ、天下親附シタリシナリ。仁賢天皇ノ七年ニ、皇子小泊瀬稚鷦鷯ヲ立テ、皇太子トシ給フ。

○八節 平群大臣滅亡

大伴室屋大連雄略天皇ノ遺勅ヲ奉テ、群臣ヲ率

平群真鳥國政ヲ專ニス

テ聖ヲ清寧天皇ニ奉リ、又清寧天皇ノ繼嗣坐サマルニ當リ、策ヲ禁中ニ定メテ億計、弘計ノ二王ヲ播磨ニ迎ヘシ事等ハ、既ニ其ノ樞要ノ路ニ立テリシ證トハスベク、レドモ、要スルニ雄略清寧ノ朝ニ在リテハ、未大臣、大連ノ政權ヲ爭ヒシヲ見ザルナリ。仁賢天皇ノ崩後ニ及ビ、大臣平群真鳥國政ヲ專ニシ、日本ニ王タラント欲ス。乃陽リテ皇太子ノ爲ニ宮ヲ營ミ、功了ハリテ自之ニ居リ、又事ニ觸レ驕慢ニシテ、曾テ臣節ヲシ。爰ニ皇太子武烈物部、鹿火連ノ女影媛ヲ聘セント思ホシ、媒人ヲ遣シ、影媛ノ宅ニ會センコトヲ期セシメ給フ。影媛會平群、真鳥大臣ノ男鮪ト通ズ。然レドモ皇太子ノ意ニ違ハノコトヲ恐レ、報ヲ曰ハク、「妾望ムラクハ海柘榴市ニ待チ奉ラント。皇太子乃期處ニ往カント思ホシ、近侍ノ舍人ヲ平群大臣ノ宅ニ遣シ、官馬ヲ求メシメ給フ。大臣戲言シ陽リ諾シテ久シク進メズ。皇太子恨ヲ懷キ、忍ビテ顔ニ發シ給ハズ。海柘榴市ニ之キ、歌垣ノ衆中ニ立チテ影媛ガ袖ヲ執リ、躑躅從容シ給フ。俄シラフテ鮪來リ、皇太子ト影媛トヲ排シテ其ノ間ニ立ツ。皇太子甫メテ鮪ガ曾テ影媛ヲ得タリシコトヲ知り、父子無敬ノ狀ヲ覺リ、赫然トシテ大ニ怒リ、此ノ夜速ニ大伴、金村、連ノ宅ニ向ヒ、兵ヲ

平群關ヲ誅ス

會シテ計策シ給フ。大伴連兵數千ヲ將井テ之ヲ路ニ徵ヘ、共ニ鮪ヲ乃樂山ニ戮ス。日本書紀ニハ、此ノ一古事記ニ據ルニ、鮪ト申シ給フ。古事記ニハ、之ヲ清寧ノ無禮ヲ見ルニ足レリ。

○九節武烈天皇 紀元千五百五十九年、大伴、金村、連賊ヲ平定シ訖ヘテ、政ヲ皇太子ニ還シ、尊號ヲ上ラシメテ、乃有司ニ命マ、埴坂ヲ泊瀬列城ニ設ケシメテ、天皇ノ位ニ上リ、遂ニ都ヲ定メ給ヘリ。武烈天皇是ナリ。大伴、金村、大連ト爲ル。

武烈天皇

武烈天皇ノ事跡ニ就キテハ二派ノ説アリテ、今ニ孰ヲ信ナリトモ定メ難シ。書紀ニハ、長シテ刑理ヲ好ミ、法令分明、日晏ルマテ朝ニ坐シ、幽枉必達シ、獄ヲ斷テテ情ヲ得タマヘリ。又顯ニ諸惡ヲ造シ、一善ヲ修メタマハズ。凡諸ノ酷刑親覽タマハザルハナク、國內ノ居人咸皆震怖ストアリテ、又左ノ記事ヲ載セタリ。二年秋九月、孕婦ノ腹ヲ刳キテ其ノ胎ヲ觀タマフ。三年冬十月、人ノ指甲ヲ解キテ薯蕷ヲ堀ラシメタマフ云云。四年夏四月、人ノ頭髮ヲ拔キ、樹蠟ニ具ラシメ、樹ノ本ヲ削リ倒シ、昇者ヲ落シ死シテ快トシタマフ云云。五年夏六

武烈天皇ノ暴惡ニマシマザリシヲ

月、人ヲシテ塘槭ニ伏シ入ラシメ、外ニ流出スルヲ、三刃矛ヲ持テ刺シ殺シテ快トシタマフ。七年春二月、人ヲシテ樹ニ昇ラシメ、弓ヲ以テ射墜シテ快ヒタマフ云云。八年春三月、女ヲシテ裸形ニテ板上ニ坐セシメ云云。是ノ時池ヲ堀リ苑ヲ起シ、以テ禽獸ヲ盛リタマフ。而シテ田獵ヲ好ミ、物ヲ走セ馬ヲ試ベ、出入時ナラズ。大風甚雨ヲ避ケズ。温ヲ衣テ百姓ノ寒ヲ忘レ、美ヲ食シテ天下ノ飢ヲ忘レタマフ。大ニ侏儒倡優ヲ進メテ爛熳ノ樂ヲ爲シ、奇偉ノ戲ヲ設ケ、靡々ノ聲ヲ縱ニシ、日夜常ニ宮人ト酒ニ沈湎シ、錦繡ヲ以テ席ト爲シ、衣スルニ綾綺ヲ以テシタマヘル者衆シ云云。

日本書紀ニ此ノ文アルヲ以テ、其ノ後ノ歴史ハ、水鏡、神皇正統記、扶桑略記、愚管抄ヲ始メトシテ、大日本史、本朝通鑑ノ類ニ至ルマテ皆之ニ據レリ。然ルニ古事記及古語拾遺ニハ此ノ如キ記事ナシ。且恰モ同マ時代ニ百濟ニ末多王ト稱スル暴逆無道ノ君アリテ、天皇ノ四年ニ國人ノ爲ニ逐ハレ、斯麻ト云ヘル者繼ギテ立テ、又惡業ヲ極メタリシ事アルニヨリ、一派ノ歴史家ハ、是全ク百濟王ノ惡事ヲ天皇ニ委シタル上表文ノ錯リテ本文ニ入りシナラント云ヘリ。又三刃矛

ハ朝鮮ノ武器ニシテ日本ニナク、且日本書紀ノ他ノ所ニハ、詳ニ人名ヲ舉グテ、何年何月天皇何某ヲ殺スト書クヲ例トセルヲ、武烈天皇ノ條ニ限リ、一モ人名ヲ記セズ。故ニ此ノ派ノ學者ノ說或ハ信ナラン。蓋印刷術ノ未行ハレザルニ當リ、日本書紀モ久シク寫本ノマ、ナリシヲ以テ、錯誤ノ多キハ獨此ノ條ノミニ止マラサルナリ。

○十繼體天皇

武烈天皇崩ヲ給ヒテ繼嗣坐サズ。是ニ於テ仁德天皇ノ子孫ハ絶エ給ヘリ。大伴金村大連議シテ曰ハク、今皇統繼嗣ヲ絶テ給フ。何ニ依リテ天下ノ心ヲ繫ガン。古ヨリ今ニ至ルマテ、禍斯ニ由リテ起ル。足仲彦天皇仲五世ノ孫倭彦王丹波ニ坐セリ。迎ヘテ人主ト爲シ奉ラント群臣皆其ノ議ニ隨フ。乃兵仗ヲ設ク、乘輿ヲ夾衛シテ丹波國桑田郡ニ至ル。倭彦王遙ニ望ミ視テ、懼然色ヲ失ヒ、山谷ニ遁レテ詣ル所ヲ知ラズ。是ニ於テ大伴金村大連更ニ議シテ

群臣倭彦王ヲ迎立セン

(110E)

男大迹王ヲ迎ヘ奉ル

繼體天皇ノ即位

曰ハク、男大迹王慈仁孝順、天緒ヲ承ク給フベシ。冀ハクハ慰勸勸進シテ、帝業ヲ紹隆セシメ奉ラント。物部、鹿鹿火、大連、巨勢、許、男人、大臣等、僉曰ハク、男大迹王ハ賢者ナリト。因リテ迎ヘ奉ル。男大迹王ハ應神天皇五世ノ孫、彦主人王ノ御子ニシテ、御母ハ垂仁天皇七世ノ孫、振媛ニ坐セリ。振媛甚嬌色アリ。彦主人王之ヲ三國ノ坂中井ニ聘シテ妃ト爲シ、近江國高島郡ノ別業ニ居給フ。男大迹王幼ク坐セルトキ、彦主人王薨シ給ヒシカバ、振媛三國ニ歸リ王ヲ養ヒ給フ。王長スルニ及ヒテ賢ヲ禮シ士ヲ愛シ、意裕如タリ。奉迎ノ使容儀肅整、前驅警蹕シテ至ル。王時ニ年五十七。晏然自若、胡床ニ踞坐シ給ヒ、臣從齊列セルコト既ニ天皇ノ如シ。迎者皆心ヲ傾ク、使意ヲ呈シ、忠誠ヲ盡サソトヲ請フ。王意裏疑ヲ懷キ、久クシテ就キ給ハズ。時ニ河内、馬飼、首荒籠密ニ使ヲ王ニ奉リテ、大臣大連等ガ奉迎セル本意ヲ具陳ス。是ニ於テ王ノ疑解ケ、遂ニ發シ給フ。乃歎シテ宣ハク、豈哉。馬飼首、汝等ノ來告ナカリセバ、吾殆啗テ天下ニ取ラントセリト。後厚ク之ヲ賞シ給ヘリ。王駕樟葉宮ニ到ル。大伴金村大連乃跪キテ天皇ノ鏡、劔、冠符ヲ上ル。王天皇ノ位ニ即キ給フ。コレヲ繼體天皇トス。時ニ紀元千百六十七年二月ナリ。大

伴、金村大連タリ。巨勢、男人大臣タリ。物部、鹿鹿火大連タルコト故ノ如シ。天皇  
大伴、金村大連ノ奏請ヲ納レ、清寧天皇ノ皇女白髮、皇女ヲ立テ、皇后トシ給フ。  
其ノ生ミ給ヘル天國排開廣庭尊ハ後ニ天皇ノ位ニ即キ給ヘリ。欽明天皇是ナ  
リ。是ヨリ先天皇尾張連草香ノ女ヲ納レテ妃トシ、勾大兄皇子、檜隈高田皇子ヲ  
生ミ給ヒシカバ、二皇子先位ニ即キ給ヘリ。之ヲ安閑、宣化ノ二帝トス。  
天皇ノ二十一年ニ、筑紫國造磐井叛ス。事ハ次章ニ詳ナリ。二十三年、巨勢、男入  
大臣薨ズ。

安閑天皇

宣化天皇

○十一 安閑天皇、宣化天皇 繼體天皇在位廿五年ニシテ崩ヲ給ヒ廣國  
押武金日尊（兄）六位ニ即キ給フ。之ヲ安閑天皇トス。安閑天皇在位二年ニシテ  
崩ヲ給ヒ、武小廣國押盾尊（高田）位ニ即キ給フ。之ヲ宣化天皇トス。其ノ元年ニ、物  
部、鹿鹿火大連薨ズ。天皇モ在位四年ニシテ崩ヲ給ヘリ。二帝ノ間皇別氏長ニシ  
テ大臣タリシ者ナシ。而シテ大伴、金村、物部、鹿鹿火ノ二大連國政ヲ執ル。是ノ  
時三韓ノ治益、困難ヲ極ム。事ハ次章ニ詳ナリ。

### 第十九章 雄略天皇以後三韓ノ動靜

○一 新羅及日本府 雄略天皇、葛城上道臣、田狹ヲ任那國司トシテ遣シ、

三韓中最近  
ノ難カキ事  
也  
高麗新羅ヲ  
伐ツ

其ノ妻ヲ奪ヒ給ヒシヨリ、田狹天皇ヲ恨ミテ日本府ニ據リ、日本ニ背カントシ  
タリシコト、同天皇ノ章ニ述ベタリ。又日本府ノ起リハ垂仁天皇ノ章ニ詳ニセ  
リ。三韓ノ治實ニ是ノ時ヨリ困難ニ赴ケリ。三韓ノ中ニ就キテ最近ノ難ク、  
常ニ我カ動靜ヲ伺ヒテ、動モスレバ背カントセシモノハ新羅ナリ。雄略天皇  
即位ノ年ヨリ、新羅朝貢セズ。而シテ日本ノ攻撃ヲ恐レ、好テ高麗ニ通ズ。是ノ時  
高麗漸強大ニシテ平壤ニ都シ、北靺鞨ヲ略シ、南新羅、百濟ヲ併スル意アリ。高  
麗王乃精兵百人ヲ新羅ニ貸シ、以テ其ノ國ヲ守ラシム。高麗ノ軍士新羅人ヲ  
以テ典馬ト爲シ、一日之ニ言ツテ曰ハク、汝ノ國吾ガ國ノ爲ニ破ラレシコト久  
シキニ非ザルヘシト。新羅王即高麗ノ僞ヲ守ルヲ知リ、竊ニ意ヲ國人ニ通サテ、  
悉國內ニ有ル所ノ高麗人ヲ殺サシム。高麗王軍ヲ發シテ新羅ヲ伐ツ。是ニ於  
テ新羅王、人ヲ任那王ニ遣シ、救テ日本府ノ元帥ニ乞ハシム。任那王、臚臣班鳩吉

新羅ノ朝貢  
由セザリシ理

備臣小梨、難波吉士赤目子ニ勸メ、往キテ新羅ヲ救ハシム。膳臣等急ニ進ミテ之ヲ攻メ、奇兵ヲ設ケテ大ニ高麗ノ軍ヲ破ル。新羅、高麗相怨ムコト是ヨリ益シ。此ノ時新羅ノ滅亡ヲ免レシハ、一ニ日本府ノ將帥ノ力ニ因レリ。然ルニ新羅ノ尙日本ニ朝貢セザリシハ、思フニ日本府ノ將士田狹ニ黨シ、新羅ト相堤拂シテ日本ヲ離レントセシニ因レルナリ。

○二節 紀、小弓等新羅ヲ伐ツ 九年元千五百三月、雄略天皇親新羅ヲ伐

紀、小弓等新羅  
之ヲ討テテ  
之ヲ敗ル

タント思ホス。神天皇ニ戒メテ曰ハク、往クコトナカレト。之ニ因リ親征ヲ果シ給ハズ。乃更ニ紀、小弓、宿禰、蘇我、韓子、宿禰、大伴談連、小鹿火、宿禰等ニ勅シ給ハク、新羅西土ニ居リ、葉ヲ累テ臣ト稱シ、朝聘違フコトナク、貢職允ニ濟レリ。朕天下ニ王タルニ違ヒテ、身ヲ對馬ノ外ニ投テ、跡ヲ匿シ、高麗ノ貢ヲ阻ギ、百濟ノ城ヲ吞ム。况ヤ復朝聘既ニ闕ク、貢職修ムルコトナク、狼子野心、飽キテ飛ビ飢エテ附ク。汝四卿ヲ以テ並ニ大將ト爲サソ。宜シク王師ヲ以テ薄リ伐テ、天討ヲ行ヘト。紀、小弓、宿禰等命ヲ奉テ新羅ニ入り、行、傍郡ヲ屠ル。新羅王夜四面官軍ノ鼓聲ヲ聞キ、敵味ノ地ニ入レルヲ知り、數百騎ト亂走ス。小弓、宿禰伐チ

大將軍紀  
小弓中ニ  
殺ス

紀、大磐宿禰  
韓地ニ反ス

テ之ヲ敗リ、追ヒテ敵將ヲ陣中ニ斬ル。噓地略定ルト雖、遺衆尙降ラス。乃大伴談連等ト兵ヲ合セテ之ヲ擊ツ。是ノ夕、大伴談連及紀、崗前來目、連皆力闘シテ死ス。談連ノ從人同姓津麻呂、主既ニ死スト聞キ、何ノ爲ニ我獨身ヲ全クセント云ヒテ、敵中ニ入りテ戰死ス。頃アリテ遺衆自退キ、官軍モ亦兵ヲ收ム。大將軍紀、小弓、宿禰病ニ値ヒテ薨ズ。五月、紀、大磐、宿禰父既ニ薨ズト聞キテ新羅ニ行キ、小鹿火、宿禰ノ掌ル所ノ兵馬船官及諸小官ヲ執リ、專威命ヲ行フ。是ニ於テ小鹿火、宿禰深ク大磐、宿禰ヲ怨ム。乃詐リテ韓子、宿禰ニ告ケテ曰ハク、大磐、宿禰僕ニ謂ヘリ。我復久シカラスシテ、韓子、宿禰ノ掌ル所ノ官ヲ執ルベシト。願ハクハ固ク之ヲ守レト。是ニ由リテ韓子、宿禰モ亦大磐、宿禰ト隙アリ。時ニ百濟王人ヲ韓子、宿禰等ニ使ハシテ曰ハク、國堺ヲ觀ント欲ス。請フ降臨ヲ垂レヨト。韓子、宿禰等戀ヲ並ベテ往ク。大磐、宿禰河ニ下リ馬ニ飲フ。是ノ時韓子、宿禰後ヨリ大磐、宿禰ノ鞍ヲ射ル。大磐、宿禰愕然反視シ、韓子、宿禰ヲ中流ニ射墮ス。新羅ノ役此ニ止ム。紀、大磐、宿禰韓地ニ留マリテ高麗ニ通シ以テ日本ニ背ク。

○三節 高麗百濟ヲ伐ツ 雄略天皇ノ二十年、高麗大軍ヲ發シテ百濟ヲ陷



地ヲ賜ヒテ  
百濟ヲ復興  
セシム

高麗ヲ擊ツ

紀生磐三韓  
ト王タラシ  
ト欲ス

生磐收レテ  
邊ヲ歸ル

レ國王ヲ殺シ、悉王族ヲ害ス。天皇之ヲ聞キ、久麻奈利ノ地ヲ以テ百濟王ノ弟汝  
洲ニ賜ヒ、其ノ國ヲ復興セシメ給フ。二十三年、百濟文斤王薨ス。天皇昆支王五  
子ノ中第二ノ末多王幼ニシテ聰明ナルヲ以テ、之ヲ内裏ニ召シ、親頭面ヲ撫シ  
テ慰勸試勅シ、其ノ國ニ王タラシメ、仍リテ兵器ヲ賜ヒ、並ニ筑紫國ノ軍士五百  
人ヲ遣シ、國ニ護送セシメ給フ。東城王是ナリ。同年筑紫ノ安致臣馬飼臣等船  
師ヲ率ホテ高麗ヲ擊ツ。

○四節 紀生磐宿禰任那ニ據リ反ス 顯宗天皇ノ三年、紀元七百年紀生  
磐宿禰任那ニ跨據シテ高麗ト通マ、將ニ西ノ方三韓ニ王タラントシ、宮府ヲ整  
修シ、自神聖ト稱ス。任那ノ左魯那奇他甲肖等ノ計ヲ用キ、百濟ノ適莫爾解ヲ爾  
林ニ殺シ、帶山城ヲ築キテ東海ヲ距守シ、百濟ノ糧道ヲ斷チ、其ノ軍ヲシテ飢困  
セシム。百濟王大ニ怒リ、領軍古爾解、内頭莫古解等ヲ遣シ、衆ヲ率ホテ帶山ニ趣  
キ攻メシム。生磐宿禰軍ヲ進メテ逆ヘ擊ツ。膽氣益壯ニシテ、向フ所皆破リ、一ヲ  
以テ百ニ當ル。俄ニシテ兵盡キ力竭ク、乃事ノ濟ラサルヲ知り、任那ヨリ逃レ歸  
ル。是ニ由リ百濟國左魯那奇他甲肖等三百餘人ヲ殺ス。

百濟朝貢ス

百濟任那ノ  
四縣ヲ請フ

鹿火ノ妻  
ノ音謀

○五節 百濟内亂 武烈天皇ノ四年、紀元六十二年百濟ノ末多王無道ニシテ百姓  
ヲ暴虐ス。國人遂ニ之ヲ逐ヒ島王ヲ立ツ。是ヲ武寧王ト爲ス。六年、百濟國麻那  
君ヲ遣シ調ヲ進ム。天皇以爲ヘラク、百濟歷年貢職ヲ修メズト。因リテ拘留セシ  
メ給フ。七年、百濟王其ノ族斯我君ヲ遣シテ調ヲ進メ、別ニ表シテ曰ハク、前ニ  
調ヲ進メシ使麻那ハ百濟國主ノ族ニ非ズ、故ニ謹ミテ斯我ヲ遣シ朝ニ奉事セ  
シムト。斯我我ガ邦ニ居テ遂ニ子アリ。法師君ト云フ。是倭君ノ祖ナリ。

○六節 大伴金村任那ノ失政 繼體天皇ノ六年、紀元七十二年百濟積臣押山ヲ  
百濟ニ遣シテ哆唎國守タラシメ、仍リテ筑紫ノ馬四十四匹ヲ百濟ニ賜フ。十二月  
百濟使ヲ遣シテ貢調シ、別ニ表シテ任那國上哆唎下哆唎婁陀牟婁ノ四縣ヲ請  
フ。哆唎國守穗積臣押山百濟ノ賄ヲ受ク、奏シテ曰ハク、此ノ四縣ハ遠ク日本ヲ  
隔テ、近ク百濟ニ連リ、且暮通マ易ク、雞犬別チ難シ。今百濟ニ賜ヒ、合シテ同國ト  
爲サバ、固存ノ策以テ之ニ過クルコトナカラント。大伴大連金村モ亦此ノ議ヲ  
可トシテ奏聞ス。乃物部大連鹿火ヲ以テ勅使トシ、百濟ノ客ニ宣セシメ給フ。  
物部大連將ニ難波館ニ發向シ、百濟ノ客ニ宣勅セントス。其ノ妻固ク諫メテ曰

百濟ニ任那  
ノ四縣ヲ賜  
フ

ハク、夫ノ住吉大神、初メ海表金銀ノ國高麗、百濟、新羅、任那等ヲ以テ譽田、天皇ニ  
授託シ給フ。是ヲ以テ太后氣長足姫尊武内宿禰大臣ト共ニ之ヲ征服シ、國毎ニ  
官家ヲ置キテ海表ノ蕃屏トシ給ヘリ。然ルヲ今ニシテ本ノ區域ヲ改メバ、後世  
ノ刺ヲ奈何セシト。大連因リテ病ト稱シテ宣勅セス。乃使ヲ改メテ宣勅セシメ、  
任那ノ四縣ヲ賜ヘリ。大兄皇子前ニ國ヲ賜フ議ニ與ラズ。晚ク宣勅ヲ知り、驚  
キ悔イ令ヲ改メント欲シテ曰ハク、胎中ノ帝ヨリ官家ノ國ヲ置キ給ヘリ。今輕  
シク蕃ノ請ニ隨フベカラズト。乃日鷹吉士ヲ遣シ、改メテ百濟ノ客ニ宣セシム。  
使者答ヘ啓ス、父ノ天皇宣勅既ニ畢ハル。子ノ皇子豈帝勅ニ違ヒ妄ニ改メ令セ  
シヤ。是必虛ナラン。タトヒ實ナリトモ、杖ノ大頭ヲ持チテ打ツト、杖ノ小頭ヲ持  
チテ打ツト、就カ痛キト。遂ニ罷ム。是ニ於テ流言アリ。曰ハク、大伴、大連モ亦百濟  
ノ賂ヲ受ケタリト。

○七 節 筑紫國造磐井ノ叛逆

百濟國、又伴跋國ノ已汝ヲ得ント欲シ、繼  
體天皇ノ七年ニ、五經博士段揚爾ヲ貢シ、陽リ奏シテ曰ハク、伴跋國臣ガ國ノ已  
汝ノ地ヲ賂奪セリ。伏シテ乞フ、天皇判斷シ、之ヲ本屬ニ還シタマヘト。大伴、金村

已汝帶沙ヲ  
百濟ニ賜フ

大連之ヲ信ツ、百濟、新羅、安羅、伴跋ノ使者ヲ召集シ、已汝帶沙ヲ百濟ニ賜フ。伴跋  
國之ヲ怨ミ、帶沙江ニ城キテ背ク。物部、連某百濟ノ使者ヲ護送シ、伴跋ノ爲ニ破  
ラレテ百濟ヨリ逃レ歸ル。時ニ新羅、任那ノ内亂ニ乘ツ、兵ヲ發シテ其ノ領地ヲ  
奪ヘリ。朝廷乃近江毛野臣ヲシテ衆六萬ヲ率テ新羅ヲ討チ、任那ヲ扶クシ  
メントス。新羅之ヲ知り、密ニ賂ヲ筑紫國造磐井ニ贈リ、毛野臣ノ軍ヲ中途ニ  
防遏セシメ、トテ請フ。是ニ於テ磐井、火國、豐國、ニ據リテ朝廷ニ背キ、高麗、百濟、新  
羅、任那等ノ貢船ヲ誘致シ、毛野臣ノ軍ヲ遮斷ス。天皇大伴、金村、物部、鹿鹿火等  
ニ、征討ノ軍ニ將タラシムベキ者ヲ問ヒ給フ。大伴、金村等僉曰ハク、正直仁勇ニ  
シテ兵事ニ通ズルハ鹿鹿火ノ右ニ出ツル者無シト。天皇之ヲ可トシ、物部、大連  
鹿鹿火ニ征伐ノ事ヲ命テ給フ。大連再拜シテ曰ハク、磐井ハ西戎ノ犴猪ナル者  
ナリ。川阻ヲ負ミテ庭セス。山峻ニ憑リテ亂ヲ稱ク。德ヲ敗リ道ニ背キ、侮慢シテ  
自賢ナリトス。臣ノ祖道、臣ヨリ室屋ニ至ルマデ世討伐ノ任ニ當レリ。臣不肖ナ  
レドモ、豈恭伐セザランヤト。天皇又詔シ給ハク、大將ハ民ノ司命ナリ。社稷ノ存  
亡是ニ在リ。賜メヨヤ、恭ミテ天爵ヲ行ヘト。乃親斧鉞ヲ操リ、大連ニ授クテ宣ハ

筑紫磐井新  
羅ト通シテ

物部大連鹿  
鹿火大將ヲ  
伐ナリ給フ

帝國史略 第二期 第十九章 雄略天皇以後三韓ノ動靜

鹿鹿火盤井  
ヲ誅ス

磐井ノ墳墓

(114)

ク、長門ヨリ以東朕之ヲ制セシ。以西ハ汝之ヲ制セヨ。箕子ヲ專行シテ、頻奏ヲ煩  
スコト勿レト。二十二年十一月、鹿鹿火終ニ磐井ヲ誅ス。磐井ハ一時勢力甚強大  
ニシテ、其ノ死前ニ造ラシメタル墳墓ノ如キハ、實ニ壯大ヲ極メ、近世ニ至ルマ  
テ殘存セリ。其ノ内ニ在リシ石人ハ、今、筑後風土記ニ在リ。筑後風土記ニ左ノ文ヲ載セタリ。  
上妻、縣南二里ニ筑紫君磐井ノ墳墓アリ。高サ七丈、周六丈。墓田南北各六十丈、  
東西各四十丈。石人石盾各六十枚、交陳行ヲ成シ、四面ヲ周匝ス。東北角ニ當リ  
一別區アリ。號シテ衛頭ト曰フ。其ノ中一石人アリ。從容トシテ地ニ立ツ。號シ  
テ解部ト曰フ。前ニ一人アリ。裸形ニテ地ニ伏ス。號シテ偷人ト曰フ。側ニ石猪  
四頭アリ。臧物ト號ス。彼ノ處亦石馬三匹、石殿三間、石藏二間アリ。古老傳ヘ云  
フ、雄大迹天皇ノ世ニ當リ、筑紫君磐井豪強暴虐ニシテ、皇風ニ偃サズ。生平ノ  
時預此ノ墓ヲ造ル。俄ニシテ官軍動發シ、之ヲ襲ハント欲ス。勢勝タザルヲ知  
リ、獨自豐前國上臈縣ニ遁シ、南山峻嶺ノ曲ニ終ハル。是ニ於テ官軍追尋シテ  
蹤ヲ失フ。略中上妻、縣多ク篤疾アリ。蓋茲ニ由ル歟ト。  
其ノ後百濟又朝貢ノ津路ノ爲ニ加羅ノ多沙津ヲ請フ。朝廷又之ヲ許ス。任那之

諸韓向背常  
ナシ

ヲ怨ミ、遂ニ新羅ニ黨ス。既ニシテ二國復隙アリ。朝廷近江、毛野ヲ遣シテ諸蕃ヲ  
和解セシム。毛野處置宜シキヲ失ヒ、却リテ諸蕃ノ怨ヲ得テ召シ還サル。是ノ時  
諸韓向背常ナク、大連大伴金村綏取ノ法ヲ得ズ、事情益難シ。後數十年紀元千二  
百十一年ニ至リテ、新羅遂ニ任那ヲ滅ボス。

宮中ノ所用

國家公用ノ

稻穀

○節一 財政 第二期ニ於テハ、未田租ノ制ナク、宮中ノ所用ハ、御縣ノ產出ヲ以テ之ニ充テタリ。

屯田ニ屯倉ヲ置キテ稻穀ヲ納レ、以テ其ノ所在ノ地ノ公用ニ充ツ。又時トシテハ、諸國屯倉ノ稻穀ヲ須要ノ所ニ集メタリ。例ヘバ、宣化天皇ノ二年、九十七年ニ諸國ノ稻穀ヲ筑紫ニ集メシメ給ヒシコトアリ。其ノ詔ニ曰ハク、

「食ハ天下ノ本ナリ。黃金萬貫アリトモ飢ヲ療スベカラス。白玉千箱アリトモ何ソ能ク冷ヲ救ハン。夫ノ筑紫ノ國ハ、遐邇ノ朝届スル所、去來ノ關門トスル所ナリ。是ヲ以ツテ海表ノ國海水ヲ候ヒテ來賓シ、天雲ヲ望ミテ奏貢ス。胎中ノ帝ヨリ朕ノ身ニ及アマテ、穀稼ヲ收藏シ、儲糧ヲ蓄積シ、遙ニ凶年ニ設ク厚ク、賓客ヲ饗ス。國ヲ安ゾズル方ハ、更ニコレニ過クルコトナシ。故ニ朕、阿蘇仍君ヲ遣シテ河内、國茨田郡ノ屯倉ノ穀ヲ加運セシム。蘇我大臣稻目宿禰ハ宜シク尾張連ヲ遣シ、尾張國ノ屯倉ノ穀ヲ運アベク、物部大連、鹿火ハ宜シク

天皇領有ノ

部民

新家連ヲ遣シ、新家ノ屯倉ノ穀ヲ運アベク、阿部臣ハ宜シク伊賀臣ヲ遣シ、伊賀ノ國ノ屯倉ノ穀ヲ運ヒ、宮家ヲ那津ノ口ニ脩造スベシ。又其ノ筑、肥、豐、三國ノ屯倉ハ、散ラテ懸隔ニアリテ、運輸遙ニ阻リ、儼如須要アラバ以テ卒ニ備ヘ難シ。亦宜シク諸郡ニ課シ、分移シテ那津ノ口ニ聚メ建テ、以テ非常ニ備ヘ、永ク民命ト爲セ。早ク郡縣ニ下シ、朕ガ心ヲ知ラシメヨト。

是ノ如キ財政ノ大本タル稻穀ハ、諸國ノ屯田ニ於テ備ハリタリ。且ソレ天皇ハ獨屯田ヲ領有シ給ヘルノミナラズ、又多ク部民ヲ領有シ給ヘリ。而シテ此等ノ部民ハ、或ハ殖産ヲ以テ事ヘ、或ハ技藝ヲ以テ奉マタリ。即宮殿ノ造營ヨリ、衣服食膳ノ用ニ至ルマデ、皆特ニ其ノ業務ヲ世襲セル部民ニ徴シ、首直ノ輩ヲシテ之ヲ監督セシメラレシナリ。又天皇ノ部民ノ貢獻シテ足ラザル所ハ、之ヲ諸ノ伴造ニ課セラレタリ。例ヘバ、物部連ノ物部ヲ率テ天皇ニ事ヘ、土師部連ノ土師部ヲ率テ朝廷ニ事ヘタリシ類是ナリ。

是ニ由テ之ヲ觀ルニ、當時ハ毎年ノ例トシテ一般ニ租稅ヲ課セラル、コト無カリシガ如ク、又人民一般ニ調庸ヲ課セラル、コトモ稀ニシテ、タゞ祭祀兵戰

毎年一般  
調度ヲ徴ス  
ルナシ

普通徴收ノ  
制ヲ行ハル  
ザリシ理由

土工ノ如キ、國家ノ公事アル時ニ應ミ之ヲ課セラレタリト見ユ。又毎年一般ニ調度ヲ徴收スルモ、上古ニ於テハ有ラザリシナリ。仁徳天皇ノ時、三年、悉課役ヲ除キ、百姓ノ苦ヲ息ムト云ヘルモ、天皇ノ部民及諸ノ伴造ノ部曲ニ對シテ云ヘルコトナルハ、其ノ大詔中ニ枚擧セル調度ハ、皆コレヲノ人民ノ常ニ貢獻セシ所ナルニテモ知ルベキナリ。

○二節 人口及土地ノ徴發 朝廷經常ノ財政ハ、略上陳ノ如シ、而シテ普通徴收ノ制ノ行ハレザリシハ、一ニ氏族ノ團結ニ於テ國家編制ノ基本ヲ爲シ、土地モ人民モ天皇御料ノ外ハ皆或ル氏ノ領有ニ屬シタルニ因ル。祭祀戰備ノ爲ニ、一般賦課ヲ行ハル、ニ當リテモ、必大臣大連ヨリ大氏ノ氏上ニ宣シ、大氏ノ氏上ヨリ之ヲ小氏ノ氏上ニ傳ヘテ各家ニ及ビシモノカ。

此ノ如ク天皇ニ於テ直接ニ天下ノ各個人民ニ對シテ徴發シ給フコト無カリシハ、氏族ノ團結ノ其ノ間ニ介立シタルニ因ルトセバ、次ニ講究スベキハ、天皇ハ諸氏ヲ以テ統治ノ目的トシ、之ニ對シテ土地或ハ人民ヲ徴收スル權ヲ行ヒ給ヒシカ否カト云フコト是ナリ。諸氏ノ土地人民ハ、天皇之ヲシラシ給ヘド

土地徴收權

土地徴發ノ  
命令ハ不敬  
ノ罪トシテ  
制裁トシタ  
ル

モウシハ、給ハズ、即今日ノ語ヲ以テ言ハバ、統治シ給ヘトモ領有シ給ハザリシコト既ニ述ベタルガ如シ。故ニ之ヲ概言セバ、土地ノ諸氏ノ領有ニ在ルモノハ、天皇ニ於テ徴發シ給フコトナク、唯、天皇ノ所望ニ應ゼサルヲ以テ、不敬ナリトセル制裁ニ依リ、土地徴收ノ權ヲ行ヒ給ヒシモノナリ。

其ノ中ニモ人民ハ次第ニ増加シタリシカバ、諸氏モ常ニ其ノ徴發ヲ拒マザリキ。例ヘバ雄略天皇ノ朝ニハ國造伴造ヨリ采女ヲ獻ゼシメ、清寧天皇ハ其ノ御名ヲ後世ニ留メ給ハンガ爲ニ、白髮部ノ舍人、白髮部ノ膳夫、白髮部ノ韃負ヲ置カレシトキ、大伴室屋大連ヲ諸國ニ遣シタリ。蓋人口徴發ノ爲ナリ。然ルニ土地ニ至リテハ、其ノ居住耕耘ニ適セルモノハ、世ノ開クルニ從ヒテ漸得難クナリユクヲ以テ、天皇ノ之ヲ徴收シ給フコト動モスレバ行ハレ難カリキ。安閑天皇ノ紀ニ、土地徴發ノ命令ハ不敬ノ罪ヲ以テ其ノ制裁トシタルヲ證スルモノアリ。元年、紀元四年、天皇皇后ノ爲ニ新ニ良田ヲ得テ屯田トシ、以テ其ノ迹ヲ後代ニ遺サント思ホシ、勅使ヲ遣シテ大河内、直味張ニ宣シ、唯雄田ノ田ヲ奉進セヨト命ヲ給ヒシニ、味張惜ミテ勅使ヲ欺キテ曰ハク、此ノ田ハ天旱ニ漑キ難

ク水潦ニ浸シ易シ功ヲ毀スコト極メテ多ク收穫甚少シト。而シテ同年十月ノ條ニ左ノ記事アリ。

天皇大伴大連金村ニ勅シタマハク朕四妻ヲ納レ今ニ至リテ嗣ナシ萬歳ノ後朕ガ名絶エシ大伴ノ伯父今何ノ計ヲ作ス茲ヲ念フ毎ニ憂慮何ゾ已マント大伴大連金村奏シテ曰ハク亦臣ガ憂フル所ナリソレ我が國家ノ天下ニ王トマシマスハ嗣アルト嗣ナキトヲ論ゼズ要須物ニ因リテ名ヲ爲ス請フ皇后次妃ノ爲ニ屯倉ノ地ヲ建立シ後代ニ留メテ前述ヲ顯サシメント詔シタマハク可シ宜シク早ク安置スベシト大伴大連金村奏稱ス宜シク小墾田ノ屯倉ト毎國ノ田部トヲ紗手媛ニ給ヒ櫻井ノ屯倉ト毎國ノ田部トヲ香々有媛ニ賜ヒ難波ノ屯倉ト毎郡ノ鑿丁トヲ宅媛ニ給ヒ以テ後ニ示シ式ヲ普テ觀サント詔シタマハク奏ニ依リ施行セヨト。閏十二月三島ニ行幸ス大伴大連金村從フ天皇大伴大連ヲシテ良田ヲ縣主飯粒ニ問ハシメ給フ縣主飯粒慶悅限リナク謹敬誠ヲ盡ス仍リテ上御野下御野上桑原下桑原并ニ竹村ノ地合セラ四十町ヲ奉獻ス大伴大連勅ヲ奉シ宣シテ曰ハク率土ノ上王

大伴金村味張ノ不敬ヲ

成文法アラ

封ニ匪ザルハナク普天ノ下王城ニ匪ザルハナシ故ニ先ノ天皇顯號ヲ建テ鴻名ヲ垂レタマフ廣大乾坤ニ配シ光華日月ニ象ル長駕遠撫シテ都外ヨ横逸シ區域ヲ鑿鏡シ無垠ニ充塞シ上九域ニ冠シテ八表ニ旁ク禮ヲ制シテ以テ功成ヲ告グ樂ヲ作シテ以テ治定ヲ彰ス福應允ニ致リ祥慶往歳ニ符合ス今汝味張率土幽微ノ百姓忽爾ニ王城ヲ惜ミ率リ輕シク使ノ宣旨ニ背ケリ味張今ヨリ以後郡司ニ預ラシムルコト勿レト是ニ於テ大河内直味張恐畏永悔シ地ニ伏シ汗流レ大連ニ啓シテ曰ハク愚昧ノ百姓萬死ニ當ル伏シテ願ハクハ每郡ノ鑿丁ヲ以テ春時五百丁秋時五百丁ヲ天皇ニ奉獻シ子孫絶タマ此ニ藉リテ生ヲ祈リ永ク鑿戒ト爲ント別ニ狹井田六町ヲ以テ大伴大連ニ賂フ蓋三嶋ノ竹村ノ屯倉ニ河内ノ縣ノ部曲ヲ以テ田部ト爲スコトノ元是ニ起レリ

○三 刑律

第二期ニ至リ文字ノ用既ニ起リシカドモ未成文ノ法令アラズ刑政ハ專慣例ニ依リ時トシテハ天皇ノ獨斷ニ依リテ行ハレタリ而シテ其ノ間三韓或ハ支那刑政ノ影響ヲ及ボシタリシ痕跡ヲ見ルコト甚稀ナリ

盟神探湯

盟神探湯、クガダチハ神代ヨリ傳ハレル神冥裁判ノ法ナリ。而シテ之ヲ實行シタル場合ハ第一期ノ歴史中ニ見エズ。却リテ第二期ニ多シ。即應神天皇ノ十年三紀元九百年ニ武内宿禰ト其ノ弟甘美内宿禰トヲシテ磯城川上ニ於テ探湯セシメラレタルト、允恭天皇ノ四年七紀元一千五年ニ、姓氏ノ錯亂ヲ糺ス爲ニ、諸姓ノ人ヲシテ沐浴齋戒シテ味樞丘ノ辭禍戸ノ岬ニ探湯致テ坐エテ探湯セシメラレタルトヲ以テ、其ノ最著キモノトス。日本書紀ニ、諸人各木線手綴ヲ着ケテ、釜ニ赴キ探湯ス。實ヲ得ル者ハ自全ク、實ヲ得ザル者ハ皆傷クトアリテ、註ニ、盟神探湯此ニ區珂陀智ト云フ。或ハ泥土ヲ釜ニ納レテ煮沸シ、手ヲ攘ケテ湯ノ泥土ヲ探リ、或ハ斧ヲ火色ニ燒キテ掌ニ置クトアリ。是レ近世ニ至ルマデ行ハレタル湯起請ノ起原ナリ。

湯起請ノ起原

皇太子ハ罰罪全族ニ及

皇太子ハ罰罪全族ニ及、允恭天皇二十四年、皇太子木梨輕皇子ノ同母妹輕大娘皇女ト姦セラレシヲ處分シ給ヒシ條ニ、皇太子ハ是儲君タリ。罪スルコトヲ得ズ。即輕大娘皇女ヲ伊豫ニ流ストアリ。罪全族ニ及、氏長罪アルトキハ其ノ全族ヲ連坐セシメタルコト、雄略天皇

物部刑ヲ執行ス

ノ七年二紀元千百年ニ、天皇ニ對スル不敬ノ罪ニ依リ、吉備下道臣前津屋并ニ族七十人ヲ誅殺シ、又其ノ三年ニ、阿閉臣國見カ湯人廣城部連武彦ヲ讒シテ袴幅皇女ヲ姦スト流說セシトキ、武彦ノ父枳莒噲禍ノ身ニ及バシコトヲ恐レテ武彦ヲ殺シシニテ知ルベシ。又磐井君葛子ハ父ノ誅ニ坐セラレシコトヲ恐レ、糟谷屯倉ヲ獻シテ死罪ヲ贖ハンコトヲ求メタリ。物部刑ヲ執行ス。雄略天皇十三年ノ紀ニ、物部ニ付シ野ニ刑セシムト云ヘルヲ見レバ、此ノ時既ニ物部ノ兵士ヲシテ刑罰ヲ執行セシメ給ヒシモノナリ。後世ニハ此ノ事物部兵士ノ事務トナレリ。

刑罰ノ種類

骨性剝奪ノ刑

刑罰ノ種類、刑名ニハ死罪ト流罪トアリシコト、既ニ上願ノ事實ヲ以テ之ヲ證スヘシ。又最注目スベキハ骨性剝奪ノ刑ナリ。即何ノ連又ハ使主ト云フガ如キ骨性ヲ剝奪シテ他氏ノ部曲ト爲シ、又ハ他人ノ奴隸ト爲スコト是ナリ。武内宿禰ノ弟ハ之ヲ紀伊直ノ祖ニ賜ヒテ奴トセラレタリ。雄略天皇ノ十四年ニ、根使主ノ大草香皇子ヲ讒シテ押木珠鬘ヲ取リタル罪發覺セシトキノ紀ニ、詔シタマハク根使主ハ今ヨリ以後子々孫々八十聯綿群臣ノ例ニ預ルコト

監面

贖罪ノ資ヲ  
露出ス

莫カレト。乃根使主ヲ斬ラントシタマフ。使主逃ケ匿レテ日根ニ至リ、稻城ヲ造  
 リテ抗戰シ、遂ニ官軍ノ爲ニ殺サル。天皇有志ニ命ヲテ子孫ヲ二分シ、一分ハ大  
 草香部ノ民ト爲シ、以テ皇后ニ封シ、一分ハ茅渟縣主ニ賜セ、負囊者ト爲サシメ  
 タマフトアリ。又清寧天皇元年百四十年紀ニ、狹々城山君韓併宿禰市邊皇  
 子ノ殺害ニ連類セシ故ヲ以テ、死刑ニ處セラレトセシ段ニ、言詞哀ヲ極ム。天  
 皇加戮ニ忍ビズ、陵戸ニ充テ、兼テ山ヲ守ラシメ、籍帳ヲ削除シテ、山部連ニ隸  
 シタマフトアリ。陵戸トハ天皇ノ陵ニ屬スル奴隸ヲ云フ。サレバ犯罪モ亦奴婢  
 ノ増加スル一原因ナリシナリ。  
 監面、雄略天皇十一年、鳥官ノ禽苑田人ノ狗ノ爲ニ啗マレテ死ス。天皇監面シ  
 テ鳥養部ト爲シ給フ。是蓋天皇ノ始メテ行ヒ給ヒシ刑ニシテ、舊慣ニ依リ給ヒ  
 シニハ非ザルベシ。  
 贖罪ノ資ヲ露示ス。雄略天皇十三年ノ紀ニ、狹穗彦ノ玄孫齒田根命罪アリ。天  
 皇齒田根命ヲ以テ物部目大連ニ收付シテ賣贖セシメタマフ。齒田根命馬八匹、太  
 刀八口ヲ以テ罪科ヲ祓除スト見ユ。是皇別ナルガ故ニ、猶免シテ祓除ノ資ヲ出

牢獄

ダサシメシモノナリ、祓除ハ神ヲ祭り罪ヲ祓フヲ云フ。而シテ、天皇齒田根命ヲ  
 シテ、資財ヲ餌香市邊ノ橋本ノ土ニ露シ置カシメタマフトアリ。斯ノ如ク、祓除  
 ノ資ヲ出ダサシメ、之ヲ路上ニ露スコトハ神代ヨリノ慣例ナリ。  
 牢獄、是ヨリ先第一期神功皇后ノ時、既ニ斐津彦ヲ歎キテ質テ本國ニ返シタ  
 ル新羅人ヲ檻中ニ囚ヘテ燒キ殺シタルコトアリ。第二期ニ至リテ清寧天皇四  
 年ノ紀ニ、天皇親囚徒ヲ錄シタマフトアリ。又仁賢天皇ノ四年百一十年的臣  
 岐島穗免君罪アリ、皆獄ニ下サレテ死ストアリ。此ヲ以テ當時既ニ牢獄ノ設ケ  
 アリシヲ知ルベシ。案スルニ是韓土ノ制ヲ傳ヘタルモノカ。



第廿一章 第二期ノ風俗

○一節 建築 第二期ニ至リテハ、三韓支那ト交通シテ、多ク其ノ文物ヲ納レタルニ因リ、我が邦ノ風俗ニ多少ノ變化ヲ來シタルコト言フマデモナシ。然リト雖此ノ變化ハ、主トシテ工藝ノ上ニ顯レ、社會交際上ノ事物ニ至リテハ、尙本邦固有ノ儘ニシテ進歩セル者多カリキ。

應神天皇攝津ノ難波ノ大偶島ニ高臺ヲ立テ廿二年紀元九百一十一年大偶島ニ幸シ、高臺ニ登リテ遠ク四方ヲ望ミ給ヘリ。本邦ニ於テ高臺ヲ造ルコト此ニ始マル。當持支那ヨリハ融通王、阿知使主、都加使主、歸化シ、又百濟ヨリハ奴理使主、モ來リテ奉仕セリ。恐ラクハ此等ノ人其ノ建築法ヲ傳ヘシナラン。阿知使主、都加使主ノ子孫ノ中ニ、後世木工ヲ以テ業ト爲ス者モアリキ。安康天皇樓ヲ皇宮穴種宮トシ、大和國ノ山邊ノ畔ニ建テ、三年紀元一千六百一十六年此ニ幸シ、肆宴シ給フ。本邦ニ於テ樓ヲ造ルコト此ニ始マル。雄略天皇十二年紀元一千八百一十八年木工岡雞、御田等ニ命ジテ、内裏ニ樓閣ヲ造ラシメ給フ。御田ハ猪名部ノ工人ニシテ、韓様建築ノ名匠ナリ。

高臺ヲ造リシ始メ

樓ヲ造リシ始メ

其ノ名天下ニ著ル。又其ノ身輕捷ニシテ、樓ノ梁上ニ在リテ疾ク四方ニ走ルコト、宛モ飛禽ノ如クナリキト云フ。又同天皇ノ時、宮側ニ大藏ヲ建テラレシコト、既ニ述ベタリ。是亦韓風ノ倉庫ナリシナラン。

蓋及刺瓜ヲ作ル

陶業漸起ル

○二節 工藝 雄略天皇織工蠶業ヲ獎勵シ給ヒシコトハ前ニ述ベタリ。同天皇ノ時、瓜工ハカミ連ト云フ者アリ。天皇之ニ紫ムラサキノ蓋カサ、紫ムラサキノ刺瓜カサヲ作ラシメテ御坐ノ飾トセラレタリ。七年、天皇盛ニ陶器ヲ造ル業ヲ興サント思ホス。時ニ人アリ。百濟ノ陶工商貴ト云フ者ヲ將テ還ル。天皇乃詔シテ河内ノ桃原ノ地ニ居ラシメ給フ。是ヨリ後百濟ノ陶法本邦ニ傳播シ、諸國ノ陶業漸起ル。十七年、天皇土師吾筥等ニ詔シテ、朝夕ノ御膳ニ供スベキ清器ヲ造リテ獻セシメ給フ。吾筥乃攝津ノ來狹々村ノ工人、山背ノ内村及俯見村ノ工人、伊勢ノ藤形村ノ工人、其ノ他丹波、但馬、因幡ニ於テ私ニ有スル工人ヲ獻シ、以テ供御ノ陶器ヲ造ラシム。之ヲ賢土師部トイフ。賢土師部トイヘルハ、天皇ノ御膳ニ供スル陶器ヲ製スルヲ以テナリ。仁邊ハ菜蔬ノ義ナリ。仁賢天皇、日鷹、吉士某ニ命ジテ、高麗ノ草工ヲ召サシメ給フ。是ノ歲日鷹、吉士某、高麗ノ草工須流、枳奴流、枳奴等ノ若干人ヲ

熱皮漸精巧  
ニ至ル

將テ歸ル。天皇之ヲシテ大和ノ山邊郡ノ額田邑ニ居ラシメ給ヘリ。高麗ノ熱皮  
師ハ即是ナリ。後世此ノ工人ノ子孫ヲ狛部トイフ。是ヨリ後革ヲ製スル者多  
ク高麗様ニ倣ヒ、熱皮漸精巧ニ至レリ。又革ヲ染メテ文ヲ成ス技巧モ此ニ始マ  
ル。(按ズルニ膠ヲ製スルコトモ亦此ノ際ニ起ル歟) 革ヲ染ムル工人ヲ後世  
狛染部ト云フ。子孫播殖シテ郡ヲ爲ス。故ニ此ノ稱アリ。其ノ子孫狛染部ヲ以テ  
姓ト爲ス。工藝志

○三節 船車

船舶ノ用ハ太古ヨリ之アリシカドモ、其ノ製造ノ頓ニ進歩セ  
シハ神功皇后ノ征韓以後ニ在リシコト固ヨリ明ナリ。仲哀天皇崩御ノ年元紀  
八百六十六年、皇后諸國ノ船舶ヲ鎮西ニ集メ、兵甲ヲ練リ給ヘリ。應神天皇ノ五年、元紀  
九百三十四年、伊豆國ニ科シテ、長サ十丈ノ船ヲ造ラシメ給フ。既ニシテ成ル。試ニ海ニ  
浮アルニ、輕ク泛ヒテ疾ク行クコト馳スルガ如シ。故ニ其ノ船ヲ名ヅケテ枯野  
ト曰フ。枯野トハ船ノ輕クシテ疾ク行ク稱ナリ。本邦ニ於テ船ニ名ヲ命ズルコ  
ト此ニ始マル。當時伊豆ノ人善ク船ヲ造ル。故ニ此ノ命アリ。伊豆ノ工人ハ後世  
ニ至ルマデ此ノ技ヲ傳フ。同三十一年、天皇諸國ニ詔シテ船ヲ造ラシメ給フ。

船ニ名ヲ命  
ズル始メ

新羅ノ造船  
法傳ハル

蓋調貢ノ運輸ニ便ニシ給ヒシナリ。諸國乃船ヲ造リテ獻マ、之ヲ攝津ノ武庫ノ  
港内ニ集ム。時ニ新羅ノ調使來リテ武庫ノ濱ニ宿シ、一日忽火ヲ失シ、集マルル  
船ニ延燒ス。是ニ由リテ朝廷新羅ノ調使ヲ責ム。新羅王之ヲ聞キテ大ニ驚懼シ、  
乃船ヲ造ル良工ヲ貢シ、以テ其ノ罪ヲ謝ス。天皇其ノ工人ヲ攝津ノ猪名ノ地ニ  
居ラシメ給フ。之ヲ猪名部ノ工人ト云フ。是ヨリ後新羅風ノ造船法本邦ニ傳播  
ス。今ニ傳アルモノ蓋是ナラン。按ズルニ本邦固有ノ造船法ハ巨材ヲ刳キテ  
造レルモノ多シ。而シテ又木板ヲ編縫シテ造ルコトアリシカドモ、新羅様ノ如  
キニハアラザリシナリ。仁徳天皇ノ六十二年元紀、遠江國司上言ス、大樹  
アリ。大井川ニ流レ來テ河曲ニ止マル。其ノ大サ十圍。本ハ一ニシテ末ハ兩ナリ。  
ト。天皇乃倭直吾子籠ヲシテ此ノ樹ヲ以テ船ヲ造ラシメ、南海ヨリ廻航シテ難  
波ノ津ニ致サシメ、以テ御船ニ充テ給ヘリ。倭直吾子籠ハ當時造船ノ名匠ナリ。  
履中天皇ノ三年元紀、天皇工人ニ命ヲテ兩枝船ヲ造ラシメテ、大和ノ磐余  
ノ池中ニ浮ヘ、以テ御船トシ給フ。兩枝船ハ兩枝ノ巨木ヲ穿チテ船ト爲シタル  
者ニテ、今謂ハユル丸木船ナリ。其ノ形狀ハ、艦ハ一ニシテ舳ハ兩岐ナリシナリ、

兩枝船

車ヲ乗載ノ  
川トセラレ  
シ始メ

當時仍巨木ヲ穿チテ船ヲ作ル製アリシコト以テ見ルベシ。  
車輿ノ用ノ歴史ニ見エタルハ第二期ヨリナリ。應神天皇ノ御輿ハ、久シク傳  
ヘテ内裏ニ在リシニ、承久元年紀元千八百九十九年燒失セリ。雄略天皇五年紀元千  
七百一十一年大和ノ葛城山ニ獵シ給フ段ニ、天皇ト皇后ト車ニ上リテ還幸シ給フコト見エ  
タリ。本邦ニ於テ車ヲ造リテ乗載ノ用トセシコト此ニ始ル。是ヨリ先崇神天  
皇ノ皇子豐城入彦命ノ八世ノ孫射狹トイフ者アリ。始メテ車ヲ造リ、又車ノ上  
ニ蓋ヲ造リ、以テ輿ヲ覆フ。是射狹ノ創意ニ出ヅ。雄略天皇及皇后ノ駕シ給ヒシ  
所即是ナリ。清寧天皇ノ三年紀元千四百四十二年億計王弘計王ヲ播磨ヨリ迎ヘ給フト  
キ、青蓋車ヲ用井ラレタリ。青蓋車ハ青キ蓋アル車ナリ。

○四醫術 允恭天皇ノ時、天皇御病アリシカバ、新羅ヨリ醫師ヲ召シ給ヘ

古代ノ治病  
法

リ。古代ハ病ヲ治スルニ、主トシテ禁厭祈禱ヲ用キキ。雄略天皇モ御病ノ時、筑紫  
ノ奇巫ト云フ者ヲ召シテ、祈禱セサセ給ヒシコトアリ。又塗藥服藥並ニ存  
シタリ。又諸國ノ温泉ニ浴シテ病ヲ治スルコトハ、太古ヨリ既ニ一般ニ流行  
セリ。日本史略

倭給師

外邦ノ影響  
ヲ被ラズシ  
テ發達セシ  
習慣

○五繪畫 雄略天皇ノ時、百濟ヨリ徵サレタル工人ノ中ニ、伊斯羅我トイ  
フ者アリ。畫ヲ善クス。同天皇ノ御宇ニ、魏ノ文帝ノ後裔ナル安貴公安貴公來レリ。其  
ノ子辰貴繪ニ巧ナリシカバ、武烈天皇之ヲ寵シ給ヒテ、姓ヲ大岡首ト賜ヘリ。其  
ノ子孫モ亦畫ヲ善クシ、天智天皇ノ時、倭畫師ノ姓ヲ賜ハリキ。

○六和歌 次ニ外邦ノ影響ヲ被ラスシテ發達セシ習慣ヲ記センニ、喜怒哀

王仁ノ歌

衣通姫ノ歌

哀樂ノ情ニ迫リシ時歌ヲ詠ミ出ヅルコトハ、今ニ始マリシニ非ズ、神代ヨリ有  
リシコトナガラ、此ノ時代ニ至リテハ、人ノ情動モ激シカリシ故ニヤ。上ハ至尊  
ヨリ、下ハ海人ニ至ルマデ、詠歌甚繁ク、中ニハ衣通姫ノ如キ、後世名人ト仰ガル  
ル者モ出ヅタリ。應神天皇ノ朝ニ來リシ王仁モ、異邦ノ人ニ似ズ歌ヲヨメリ。  
即大鷲尊ノ登位ヲ難波ニ避ケ給ヒシトキ、其ノ詠ミテ奉レル歌ニ曰ハク、  
「難波津に咲くやこの花梅ノ花、冬ごもり、今は春べとさくやこの花。」  
又衣通姫ハ、蛛ノ動作ニテ天皇ノ幸アラシコトヲトシ、  
「我がせこが來べきよひなり、さゝがねの枕枕ノくものおこなひ舉動ノこよひし  
るしも今夕キカナ。」

ト詠マレシハ、古今ノ名歌トシテ人口ニ膾炙セリ

雄略天皇モ專恣ノ御行アリシニ似ズ、歌ハ誠ニ優美ニシテ、同々天皇ナルベシトモ思ハレズ。正史ニモ多ク御製ヲ載セタリ。萬葉集ニ左ノ一首アリ。

「こもよ龍みこもち龍持シキふぐしもよ龍申コテノ類ナハ今コみふぐしもち龍持シテノ岳カにノ菜ヲます見ノ家ノらセノ家名ノらサねノ名ヲ告ソら見ツノ大和ノ國ハ押シなベテ一般ニ吾コそ居レ主コレシきなべテ通ロ吾コそまセ治ムコソのをこソ我ヲせどはのらめ夫ハメ家をも名をも一

蓋當時ノ風俗男女結婚ノ約ヲ爲ストキ、男子ヨリ女子ノ氏名ヲ問ヒ、女子モシ約諾スルトキハ、則之ヲ告グ、否ムトキハ告グザリシナリ。

○七歌垣 此ノ時代ニ最盛ニ行ハレタリト見ユルハ、歌垣ノ事ナリ。春花

秋月ノ頃、都ニテハ市ニ、鄙ニテハ野山ナドニ、若キ男女打チ集マリ、互ニ歌ヲ唱和シ、舞ヒ戯ムル、遊ヒアリキ。之ヲ歌垣トモ、歌カマヒトモ名ヅク。コレニハ貴人ノ立チ交リ給ヒシ例モアリ。此ノ折ニ男子ノ方ヨリ我が思フ女子ニ呼ビカケテ名ノリヲシ、婚姻ノ約ヲ結ブナリ。當陸國ニテハ筑波山ニ登リ、肥前國ニ

雄略天皇ノ御製

禮婚ノ約

テハ杵島山ニ登リ、攝津國ニハ歌垣山ト云フ山サヘアリキ。カク男子ノ方ヨリ呼ビカケテ、女子ノ意中ヲ問フニ、女子ハ必其ノ父兄ナドニ告グテ、許シテ受クルヲ例トセリ。父兄許諾スルトキハ、押木、珠鬘、女ノ髮飾ナドヲ贈リテ、儀契トセシ事アリ。又結婚ノ日ニハ大カタ女子ノ方ニテ、机代ノ物ヲ備ヘテ、禮物トセリ。机代ノ物トハ膳部ニ据ウル酒饌ノ類ナリ。日本文 武烈天皇皇太子ニ坐シシトキ、海石ハキ市ニテ歌垣ニ立チ、影姫ニ懸想シ、平群大臣ノ子鮪ト争ヒ給ヒシコト前ニ述ベタリ。

當時皇太子ノ影姫ニ贈リ給ヒシ歌、

「こどかみに等頭キあるかげひめ影居ルたまならば珠ハあがほるたまの音珠ノスルあわみしらたま珠也也

鮪ノ影姫ニ代リテ答ヘ奉リシ歌、

「おほきみの大君みあびのまづはた御帶ノむすびたれ結ヒたれやしひども、誰人あひおもはなくに相念ハズ

是即皇太子影姫ヲ眞珠ニ比シテ懸想ノ意ヲ示シ給ヘルニ、鮪固ヨリ二人ノ中

平群鮪影姫ニ代リテ答ヘ奉リシ歌

武烈天皇皇太子影姫ニ贈リ給ヒシ歌

ヲ絶タント思ハバ、姫ニ代リテ、皇太子倭文錦ノ帯ヲ結ヒタレテ其ノ様美麗ナ  
レドモ、妾ハ別ニ意中ノ人アリト答ヘ奉リシナリ。

○八惑信 第二期ニ於ケル人民信教上ノ習慣モ、亦全ク外部ノ影響ヲ被  
ラザリキ。獸蛇ヲ神トシテ信仰セシハ太古ヨリノコトナガラ、第二期ニ至リ

獸蛇ヲ神ト  
シ祭ル

益、甚シキヲ見ル。例ヘバ雄略天皇ノトキ、天皇三諸山ノ神形ヲ見ント思ホシ

シカバ、少子部、螺贏ハ七丈バカリノ大蛇ヲ捉ヘ來リテ天皇ヲ驚カシ奉レリ。

又同マ年代ニ、常陸國ノ麻多智ト云フ人、葦原ヲ開キテ新田ヲ墾リ居タリシニ、

夜刀神トイフ大蛇常ニ衆蛇ヲ伴ヒテ耕作ヲ妨ケシカバ、甲鎧ヲ着、兵器ヲ執リ、

夜刀神ヲ山上ニ逐ヒノボセ、山上ヲ神地トシ、山下ヲ人地ト定メ、其ノ塚ニ杭ヲ

タテ、神社ヲ造リ、自神主トナリテ、永代祭禮ノ約ヲ結ビシコトアリ。筑後ニ

神ヲ祭ルニ  
人ヲ犠牲ト  
スル習慣

モ人命、盡神ト云フ者アリテ、衆人ヲ惱マシ、ガ、又神ニ祀ラレタリ。常陸日本紀

肥後又此ノ時代ニハ、其ノ神ヲ祭ルニ人ヲ犠牲トスル惡習アリキ。美作國

ナル中參神ハ大猿ニテ、高野ノ神ハ大蛇ナリシニ、其ノ地ノ住民ハ、年々順番ヲ、  
以テ女子ヲ犠牲ニ供ヘタリ。又飛騨國ニモ大猿ヲ祭リテ犠牲ヲ供ヘシコトア

リ。今昔仁徳天皇ノ時、茨田ノ堤ヲ築カル、ニ當リ河伯ヲ祭ランカ爲ニ強頸袵  
子ノ二人ヲ撰ビ出ダサレシニ、強頸ハ悲シミナガラ沈メラレ、袵子ハ二個ノ瓠  
ヲ水中ニ投シ、河伯靈アラバ、先此ノ瓠ヲ沈メヨ。然ラズバ我イカアカ汝ノ爲ニ  
沈ムベキト呼ビシニ、瓠ハ唯水面ニ回轉シテ遂ニ沈マザリシカバ、河伯ニ靈驗  
ナシトヲ助カルコトヲ得タルコトアリ。又吉備國ノ川島河ニ大ナル虬住ミ  
テ、常ニ往來ノ人ヲ害セリ。然レドモ村民皆其ノ威力ヲ憚リテ、唯避ケテノミ居  
タリシニ、縣守トイフ人之ヲ憂ヘ、先三瓠ヲ投シテ神ノ眞偽ヲ試ミ、瓠ノ沈マザ  
ルヲ見テ、自劔ヲ拔キテ水中ニ躍リ入り、其ノ虬ヲ殺シ、猶處々ノ岩穴ヲ探リテ、  
大小ノ虬族ヲ殺シ、コトアリ。

### 第三期 佛法傳來ノ代

#### 第廿二章 大伴氏、物部氏、蘇我氏

佛法傳來ニ  
關シテ國民  
ノ觀念一變  
ス

○節一 前期復説 前期ニ於テハ、族制ニ基ク社會ノ秩序及國家ノ編制發達シテ堅固ナル國民ノ團結トナリ、其ノ團結ニ於テ氏族ノ主長ハ多ク土地人民ヲ管領シテ、或ハ朝廷ニ事ヘ、或ハ地方ヲ治メ、天皇ノ命令タリトモ、氏上ヲ經由セザルトキハ一般人民ニ及バザリキ。然リ而シテ仁德ヨリ雄略ノ朝ニ至ルマデハ、帝室ノ權威強勢ニシテ大氏ノ氏上モ以テ帝權ニ加フベキ隙ヲ見ザリシカド、久シク治平ノ世ヲ經テ、朝家ノ内部先亂レ、是ニ始メテ皇別大氏ノ總管タル平群大臣不軌ヲ企ツルコトアルニ至レリ。然レドモ神別諸氏ノ總管タル大伴、大連ノカヲ以テ其ノ亂ヲ平クルコトヲ得タリ。降リテ武烈以後ニ至リ、皇緒ハ頻ニ絶エナントシタレドモ、逆臣ノ起リテ其ノ隙ニ乘ズルコトナカリシハ尙天神ノ宗家ニシテ始メテ天位ニ居ルベシトノ觀念國民ノ腦裏ニ因襲固着シタルニ因ル。然ルニ佛教傳來ノ事アリテヨリ、此ノ關係忽然一變セリ。

第三期歴史ノ大要

即以前ニハ天神ヨリ外拜スベク崇フベキモノナシト思ヒタリシカドモ、今佛トイヘルモノアリテ冥々裏ニ人ノ禍福ヲ左右シ、痛苦ヲ醫シ富貴ヲ來タシ、萬事祈願ノマヽナリト聞キテハ、因襲固着ノ念モ之ガ爲ニ動カサレザルヲ得ンヤ。時ニ二三大氏ノ氏、上ハ富貴勢力殆皇室ニ比シ、更互權勢ヲ争ヒレヨリ、遂ニ私曲ニ流レ、爲ニ天位ノ危キコト累卵ノ如クナルニ至リヌ。是第三期歴史ノ大要ナリ然レドモ佛敎ト共ニ多クノ藝術ヲ傳ヘ、人ノ思想ヲシテ稍推理ニ傾クシメタルヲ以テ、佛敎ノ我が文化ニ及ボシタル影響モ亦決シテ少シトセザルナリ。從來歴史ヲ論ズル者、多ク保元平治以後ヲ以テ戰國ノ時ト爲セドモ、第三期ニ於テ大氏干戈ヲ動カシテ權力ヲ争ヒシ間ニ戰國ノ實ハ既ニ現レタリ。唯第四期ノ改新ニ因リ、一時中央ノ政權ヲ恢復セラレシノミ、故ニ第三期ハ、之ヲ戰國前期ト稱スルモ或ハ不可ナカラゾ。

戰國ノ前期

○節二 大伴氏 第二期ヨリ第三期ニ涉リテ大氏ノ相繼ギテ起リ、朝政ノ重キニ當レル者四アリ。曰ハク平群氏、曰ハク大伴氏、曰ハク物部氏、曰ハク蘇我氏、是ナリ。平群氏ハ皇別ニシテ、武烈天皇ノ時本系亡ビ、唯支流ノ家ノミ殘レリ、

大伴室屋ノ事蹟

大伴氏ハ道臣命ヨリ出デシコト前ニ述ベタルガ如シ、其五世ノ孫武日ハ日本武尊ニ從ヒテ東征シ、讚岐國ヲ賜ハリテ私領トス。武日ノ子武以持仲哀天皇ニ事ヘ、三韓征服ノ後、中臣、烏賊津等ト百僚ヲ領シテ宮ヲ守ル。武以ノ子室屋、雄略天皇ノ朝ニ大連トナル。天皇室屋及東漢、直掬ニ遺詔シテ星川皇子ノ暴ヲ制セシメ給ヘリ。其ノ時曰ハク、大連等、民部、廣大國ニ充盈ス。ト以テ其ノ實力ノ大ナリシヲ見ルベシ。此ノ時大伴、大連ハ既ニ執政ノ重職ニ在リシカドモ、宮門ノ守衛ハ尙其ノ專任ナリキ。室屋天皇ニ奏シテ曰ハク、衛門開閉ノ事ハ極メテ重職ト爲ス。一人ノ能ク堪フル所ニ非ズ、子談ト左右ニ分衛セント。天皇之ヲ許シ給フ。是ヨリ大伴氏分レテ大伴、佐伯ノ二氏トナリ、左右開閉ヲ掌ル。清寧天皇ヨリ後皇緒頻ニ絶ニ。弘計王天孫億計王天孫仁賢ヲ播磨ニ迎ヘ奉リシコト室屋與リテカアリ。室屋ノ子金村繼ギテ大連トナリ、仁賢天皇ニ事フ。天皇崩シ給フニ及ビテ、平群、真鳥及其ノ子鮪不軌ヲ圖ル。皇太子金村ニ宣ハク、天下將ニ亂レントス。希世ノ雄ニ非ザルヨリハ濟フコト能ハザルベシ。能ク之ヲ安メズル者ソ連レニ在ルカト。金村乃兵ヲ起シテ平群父子ヲ殺シ、皇太子ヲ奉マテ天皇ノ

大伴氏分レテ二氏トナル事蹟

金村ノ忠節

位ニ即カシメ奉ル。武烈天皇是ナリ。天皇金村ヲ以テ大連ト爲シ給フ。平群氏ハ皇別ナリ。大伴氏ハ神別ナリ。是即神別大氏ノ氏。上ヲシテ皇別大氏ノ氏。上ヲ誅セシメ給ヒシナリ。武烈天皇崩シ給ヒテ嗣子坐サズ。大連金村禍亂ノ其ノ機ニ乗ツテ起ランコトヲ憂ヘ。在朝ノ臣連ト譏シ。男大迹王ヲ三國前ニ迎ヘテ立ツ。之ヲ繼體天皇トス。是ノ時ニ當リテ天下ハ殆金村ノ掌中ニ在リ。而シテ彼曾ヲ野心ヲ其ノ間ニ挾マザリシハ忠ト謂フ可シ。時ニ百濟上奏シテ任那ノ四縣ヲ請フコトアリ。廟議之ヲ許與スルニ決ス。是ヨリ三韓ノ治益難シ。時人責ヲ金村ニ歸シ。或ハ其ノ百濟ノ賄賂ヲ受クタリシコトヲ疑フ。欽明天皇元年。難波ニ幸シ。群臣ニ問フニ新羅ヲ伐ツコトヲ以テシ給フ。大連物部尾與曰ハク。新羅怨ヲ蓄フルコト。實ニ任那ノ四縣ヲ百濟ニ與ヘタルニ由レリ。是大連金村ノ失策ナリト。金村慙懼ニ堪ヘズ。乃住吉ニ歸リ。疾ト稱シテ朝セズ。天皇人ヲ遣シテ慰問シ給フ。金村謝シテ曰ハク。臣ノ病ム所他ニ非ズ。諸臣皆任那ヲ喪フコト戰トシテ臣ニ由ルト謂ヘリ。故ニ恐懼シテ朝セザルナリト。天皇金村ニ詔シ給ハク。卿久シク忠誠ヲ竭セリ。衆口ヲ愠フルコト莫カレト。益之ヲ優寵シ給ヘリ。然レ

金村ノ失策

大伴氏ノ勢衰フ

トモ大伴氏ノ勢力是ノ時ヨリシテ振ハズ。子孫復大連タルモノナカリキ。

○三節 物部氏 物部氏モ亦強大ナル氏族ニシテ。遠ク饒速日命ヨリ出ヅシ

物部氏神別  
諸氏ノ棟梁  
トナル

コト前ニ述ベタルガ如シ。饒速日命ノ子ニ可美真手命アリ。其ノ三代ノ孫ニ大矢口アリ。大矢口ノ子ニ大綜麻杵アリ。大綜麻杵ノ子ニ伊香色雄アリ。伊香色雄ノ子ニ十千根アリ。十千根垂仁天皇ノ朝ニ國政ニ與ル。十千根ノ子勝昨ハ仲哀天皇ノ朝ニ大夫タリ。勝昨ノ孫伊菖佛ハ屢中天皇ノ朝ニ執政タリ。伊菖佛ノ子雄略天皇ノ朝ニ始メテ大連ト爲ル。是ニ於テ物部氏ハ大伴氏ト相並ヒテ神別諸氏ノ棟梁タリ。伊菖佛ノ子ニ目大連アリ。其ノ子ヲ荒山ト云ヒ荒山ノ子ヲ尾與。大連トス。尾與ノ子ハ即守屋ナリ。又伊菖佛ノ子ニ布都久留アリ。其ノ子ニ木蓮子アリ。木蓮子ノ子ヲ麻佐良ト云フ。麻佐良ノ子ハ即靈鹿火ナリ。靈鹿火智勇アリ。仁賢。武烈繼體。安閑宣化ノ五朝ニ歷仕シテ大連トナリ。巖井ノ叛亂ヲ平ケテ勳功顯著ナリ。尾與ハ欽明天皇ノ朝ニ至リテ大連トナリ。排佛ヲ以テ蘇我氏ニ反對シ。天皇ニ勸メテ佛像ヲ捨テシム。尾與ノ子守屋父ニ繼ギテ大連トナリ。亦佛法ヲ排斥シ。終ニ蘇我大臣馬子ノ爲ニ滅ボサル。其ノ亡アルニ當

物部氏ノ二流

物部守屋亡



守屋ノ所領  
ノ財産ヲ沒  
收セラレ

(三四)

リテ沒收セラレシ財産ノ多キハ以テ大連ノ富豪ヲ見ルニ足レリ。太子傳ニ  
曰ハク、川勝大連ノ頸ヲ斬ル。三タリノ小將軍直ニ大連ガ家ニ入リテ、子孫資財  
田宅皆寺分ト爲ス。ト。同書ノ注ニ曰ハク、本願緣起ニ云フ、子孫從類二百七十  
八ノ寺ノ永キ奴婢ト爲シ、所領田園十八萬六千八百九十代ヲ沒官シテ寺ノ永  
財ト定メ畢ンヌ。河内國ニ弓削鞍作祖、父間衣摺、蚶岬足代、御立、葦原等ノ八箇所  
ノ地都集シテ十二萬八千六百四十代、攝津國ニ於勢、模江、鴫田、熊凝等ノ散地都  
集シテ五萬八千二百五十代、居宅三箇所并ニ資財等悉寺ノ分ニ計ヘ納ル云云。  
唯大連ガ私田萬頃ヲ以テ跡見、赤梅等ニ賜フ。玉造岸上ニ於テ始メテ四天王寺  
ヲ基ツ。又大和ノ飛鳥地ニ於テ法興寺ヲ立ツ云云。ト。守屋ノ系統ハ亡ビタレ  
ドモ、麴鹿火ノ系統ハ依然存續シタリ。唯大連ノ重職ニ當ル者ヲ出ダサマリ  
ノミ。

麴鹿火ノ系  
統存續ス

蘇我稻目ノ  
崇佛

○四蘇我氏 蘇我氏ハ武内宿禰ヨリ出テ、平群氏滅亡ノ後、皇、別、諸、氏、中、最、權  
勢アリシユト、第十五章ニ述ベタルガ如シ。武内宿禰ノ子石川宿禰ノ玄孫ニ  
稻目アリ、宣化天皇ノ元年ニ大臣ト爲ル。百濟佛像ヲ獻ズルニ當リ、稻目率先

蘇我氏ノ佛  
法ヲ奉シタ  
ル所以

物部氏亡後  
朝政ニ參與  
セシ臣連

シテ之ヲ贊美拜崇シタルハ、其ノ具ニ佛徳ニ感ザタルニ因ルカ、將他ニ謀ル所  
アリシニ因ルカ、是歴史上一疑問ナリ。案ズルニ平群氏滅亡ヨリ以後、大臣  
ノ權力ハ常ニ大連ニ及バズ。然レドモ皇別ハ大氏ノ棟梁、理ニ於テ神別大氏ノ  
棟梁ノ下ニ居ルベキニ非ズ。加之平群大臣ノ滅亡ハ、其ノ逆心ニ因ルト雖、亦之  
ヲ滅ボス用ヲ爲シタルモノハ神別諸氏ナリ。故ニ蘇我大臣ハ皇別大氏ノ棟梁  
トシテ恢復ノ意ナキコト能ハズ。則先佛法ニ依リテ人望ヲ收メ、而シテ後事ヲ  
舉ゲント計リシニ非ザルカ。蘇我氏ハ皇別ナリ。皇別氏族ノ權勢イカニ大ナ  
リトモ、以テ帝室ニ加フ可カラザルコト固ヨリ論ナシ。而シテ帝室ノ尊キ所以  
ハ、其ノ天神ノ正嫡ニ坐スニ在リ。是ヲ以テ先天下ヲシテ天神ノ外ニ猶欽崇ス  
ベキモノアルヲ信ゼシメ、而ル後其ノ不軌ノ志ヲ逞クセント欲ス。是馬子ノ子  
蝦夷、及蝦夷ノ子入鹿ノ佛法ヲ奉マタル所以ナルベシ。蝦夷ノ系統ハ入鹿ニ  
至リテ亡ビタレドモ、弟倉麻呂ノ系統ハ尙繁榮シテ、其ノ子石川麻呂ハ孝德天  
皇ノ朝ニ右大臣トナリ、赤兄ハ天智天皇ノ朝ニ左大臣トナレリ。

○五自餘諸大氏上

物部氏亡ビ、蘇我氏獨權勢ヲ振フニ至リテ、朝廷ニ

ハ他ニ如何ナル臣連アリテ政治ニ參與シタリシカト云フニ推古天皇三十一年ノ紀ニ大兵ヲ發シテ新羅ヲ伐タントスルトキ、境部臣雄摩侶ト中臣連國トヲ以テ大將軍トシ、河邊臣彌受ト、物部依網連乙等ト、波多臣廣庭ト、近江脚身臣飯蓋ト、平群臣宇志ト、大伴連某ト、大宅臣軍トヲ以テ副將軍トストアリ。即武事ニハ、此等ノ氏上ニ於テ其ノ職ニ當リシナリ。又推古天皇崩御ノ後、蘇我大臣ノ饗宴ニ會シテ圖ヲ定ムル議ニ與リタリシハ、阿倍麻呂臣、大伴鯨連、采女臣摩禮志高向、臣字摩、中臣連彌氣、難波吉士ニ吉士ハ元任那國司ノ稱、牟刺巨勢臣大摩呂、佐伯連、大伴、東人、紀、臣鹽手等ナリ。而シテ是ノ時唯蘇我臣倉摩呂又云ノミ推問ニ應シテ意見ヲ述ベザリシハ、蓋其ノ氏上、蘇我ノ意中ヲ知り得ザリシカ、又ハ之ヲ知リテ違ハノコトヲ欲セザリレニ因ル。即皇別ニハ阿倍、境部、河邊、波多、脚身、平群、大宅、采女、高向、許勢、紀ノ諸氏アリシカドモ、神別ニハ中臣、物部、大伴、佐伯等アルノミナリキ。是殆皇別諸氏ノ天下ト謂フ可キナリ。

皇別諸氏ノ勢力

### 第廿三章 佛教傳來

欽明天皇

百濟ヨリ佛及經論等ヲ獻ス

○節 百濟上表 紀元千二百年、欽明天皇位ニ即キ給フ。繼體天皇ノ嫡子ナリ。物部尾與大連ト爲リ、蘇我稻目大臣タルコト故ノ如シ。三韓ノ政治尙困難ヲ極ムレドモ、百濟ハ常ニ我が命ヲ奉マ、力ヲ任那ノ再興ニ盡シタリ。而シテ高麗我ニ背キ、新羅ニ至リテハ反服極マリ無カリキ。是ヨリ先繼體天皇ノ朝ニ韓人佛像ヲ傳ヘタリシカドモ、我が邦人之ヲ韓土神ト稱シテ信崇セス。獨南梁ノ人司馬達等、大和國阪田原ニ居テ佛法ヲ奉マタリ。欽明天皇ノ十三年、千紀元二十年十月、百濟ノ聖明王、西部姬氏達卒、怒利斯致契等ヲ遣シテ、釋迦佛ノ金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷ヲ獻シ、又表ヲ上リテ、其ノ傳來、禮拜、功德ヲ讚シテ、曰ハク、是ノ法ハ諸法中ニ於テ最殊勝ト爲ス。解シ難ク入リ難シ。周公孔子モ尙知ルコト能ハズ。此ノ法能ク無量無邊ノ福徳果報ヲ生マテ、乃無上菩提ヲ成シ辨アルニ至ル。譬ヘバ人ノ隨意ノ寶ヲ懷キ、須用スル所ニ逐ヒテ盡情ノマ、ナルガ如シ。此ノ妙法ノ寶モ亦然リ。祈願スルトキハ、情ノマ、ニ乏シキ所無シ。且夫

遼ク天竺ヨリ爰ニ三韓ニ洎<sup>ト</sup>テ。教ノマヽニ奉持シ尊敬セザルハナシ。是ニ由リ百濟王臣明譚ミテ陪臣怒喇斯致テ遣シ、帝國ニ傳ヘ奉リ、畿内ニ流通ス。佛ノ記<sup>キ</sup>ヲ所我が法ハ東流セントノ意ヲ果スナリト。

(二四六)

○二 佛法畧歴 案ズルニ佛法ハ始終同一ナル者ナラズ。國ニ依リ時ニ從

佛法南北二派ニ分ル

ヒテ大ニ變遷シタルモノナリ。故ニ當時百濟ヨリ傳來シタル佛法ハ、果シテ如何ナル種類ノモノナリシカヲ講究セザル可カラズ。近代學者ノ鑿索ニ依リテ之ヲ見ルニ、佛法ハ元印度ニ起ルト雖、後ニ分レテ南北ノ二派ト爲レリ。釋迦ノ始メテ其ノ法ヲ説キシハ、印度ノ北部ナル今ノカシミヤ地方ニシテ、其ノ地ヨリ今ノチベット即後藏、前藏ニ傳ヘタリ。而シテ支那ノ南北朝ノ比、之ヲ北魏ニ傳ヘ、北魏ヨリ之ヲ其ノ附庸國タリシ朝鮮諸邦ニ傳ヘ、其ノ一ナル百濟ヨリ日本ニ傳ヘタリ。是即北方ノ佛法ナリ。然ルニ釋迦滅後數百年ニシテ印度ノ南島セ<sup>イ</sup>ロンニ於テ、新派ノ佛法盛ニ起リ、其ノ大知嚮ノ一ナル達磨大師南海ヲ渡リテ、之ヲ支那ノ南部ニ傳ヘタルハ、即隋ノ煬帝ノ時ナリ。而シテ隋ヨリ之ヲ唐ニ傳ヘ、日本ノ僧空海、最澄等入唐シテ之ヲ本部ニ傳ヘタリ。是即南方ノ佛法

北方ノ佛法

南方ノ佛法

佛法渡來ノ當時學者ノ思想

ナリ。南北兩派トモニ佛法タルニ於テハ一ナリト雖、亦稍、相異ナルモノアリ。即北方ヨリ來リシモノハ、重ニ戒律ヲ修シ、又有形ハ、福善ヲ祈レリ。而シテ南方ヨリ來リシモノハ、概禪定ヲ事トシ、無形ノ福善トシテ解脱ヲ求ムルニ汲々タリ。又其ノ尊奉スル所ニ至リテモ、多少ノ増減アリト云フ。例ヘバ阿彌陀佛ハ北方ニ有リテ南方ニナク、觀音ハ南方ニ在リテ北方ニ無キ類是ナリ。日本ニ於テハ、現ニ南北ノ元素ヲ合存シテ各教宗ニ分レタレドモ、要スルニ當初百濟ヨリ傳ヘタル佛法ハ有形的ノ元素ニ富ミ、無形的ノ元素ハ稍、乏シカリシナリ。

### ○三 三教相關

佛法ノ始メテ我が國ニ入リシトキ、當時ノ學識アル人ハ佛法ハ神道、儒教ニ對シテ如何ナル關係ニ立ツモノト思ヒシカニ付キ、太子傳補注ニ面白キ一段ヲ載セタリ。曰ハク、

「二月、天皇詔シテ曰ハク、汝太子聖德生年幼稚ト雖、業慮百歳ノ如シ。朕思念スル所アリ。當ニ問フベシ。汝焉ヲ答ヘヨ。今佛法來リ、儒文又至ル。朕取テ異國ノ他經ヲ信ゼズ。吾ガ國神代ノ儀ニ異ナルヲ以テナリ。汝ガ意如何。王子答ヘテ曰ハク、天皇一理ヲ知リテ、未其ノ百處ヲ盡シ玉ハズ。臣幼昧ナリト雖、熟、儒釋

及神史ノ文ヲ見ルニ、大方分明ニシテ、之ヲ疑フ可キ所無シ。神道ハ神ノ根本  
 天地ト與ニ發リ、以テ人ノ始道ヲ説ク。儒道ハ道ノ枝葉、生黎ト與ニ發リ、人ノ  
 中道ヲ説ク。佛道ハ道ノ華實、人智熟シテ後發リ、人ノ終道ヲ説ク。強ヒテ之ヲ  
 好ミ之ヲ惡ムハ、是レ私情ナリ。理ニ隨フハ、是天ナリ。私ハ天ニ勝タズ。其ノ勝  
 タザルヲ知リテ、而シテ尙私ヲ用フ。是ハ斯惡情ナリ。智賢ノ性ニ非ズ、然リト  
 雖天ノ與スヲ試ミント欲セバ、左右情ニ任ゼン。廢セント欲セバ之ヲ廢シ玉  
 へ。然ラバ一朝遲ク與ラン。立ラント欲セバ之ヲ立テ玉へ。然ラバ一朝速ク與  
 ラン。一朝ノ遲速ハ天ノ爲ニ須臾ナリ。天ハ是永ク、朝王ハ是一朝。天ハ是偏ク、  
 地王ハ是一界。王惡ソツ天ノ時ニ勝タソ。天惡ソツ。且時ヲ傷マソ。天皇之ヲ聞  
 キテ押廢スルコトヲ得ズ云云ト。  
 右恐ラクハ後人ノ僞作ナラン。然レドモ善ク三教ノ關係ヲ説ケルモノト謂フ  
 ベシ。神道ハ鞏國ヲ説キテ現世未來トヲ説カズ之ヲ説クハ神道ノ本色ニ非  
 ズ。儒道ニ於テモ亦然リ。唯現世ヲ説クノミ。過去ト未來トヲ言ハズ。未來ヲ説ク  
 者ハ獨佛法アルノミ。而シテ一身ハ現世ヲ以テ了ルトハ誰シモ信ズルコト能

ハザル所ナルガ故ニ、來世ヲ思フ念ヨリ佛ニ歸依スル者多カリシハ、亦已ムヲ  
 得ザルコト、謂フ可シ。過去現在ハ事實ノ境界ナリ。事實ハ信ゼズシテ知ルハ  
 シ。獨未來ヲ説クモノニシテ、始メテ信教ノ義ニ當レリ。

○四節 朝廷兩議

百濟ノ表至レルトキ、天皇之ヲ朝ニ讀釋セシメ、聞キ已ヘ

テ歡喜踴躍シ、使者ニ詔シ給ハク、朕未曾テ是ノ如キ微妙ノ法ヲ聞キ得ズ。然レ  
 ドモ、朕自決セズ。先群臣ニ歷問セント。乃群臣ニ問ヒ給ハク、西蕃佛ヲ獻ズ。相貌  
 端嚴、全ク未看ザル所ナリ。禮スベキカ否ト。蘇我大臣稻目ハ崇佛論者ナリ。奏  
 シテ曰ハク、西蕃諸國、一ニ皆之ヲ禮ス。豊秋津日本、豈獨背カンヤト。然ルニ物部  
 大連尾與、中臣連鎌子ハ排佛論者ナリ。奏シテ曰ハク、我が國家ノ天下ニ玉タル  
 ハ、恒ニ天地社稷ノ百八十神ヲ以テ、春夏秋冬祭拜ヲ事ト爲ス。方ニ今改メテ蕃  
 佛ヲ拜セバ、恐ラクハ國神ノ怒ヲ致サント。天皇宜ハク、宜シク情願人稻目宿  
 禰ニ付テ、試ニ禮拜セシムベシト。大臣跪キテ受テ、忻悅シテ小墾田ノ家ニ安置  
 シ、向原ノ家ヲ淨捨シテ寺ト爲ス。其ノ後國中疫氣アリ。民多ク天死シ、久クシ  
 テ治療スルコトヲ得ズ。物部大連尾與、中臣連鎌子ト同ク奏シテ曰ハク、往日

佛像ヲ難波ノ  
堀江ニ棄ツ

臣等ノ計ヲ須井給ハズシテ、此ノ病死ヲ致ス。宜シク早く佛像ヲ投棄セシムベシト。天皇之ニ從ヒ給フ。乃有司ニ命マ、佛像ヲ難波ノ堀江ニ流棄セシメ、後火ヲ伽藍ニ縱チ、燒燼更ニ餘スコトナカリキ。  
欽明天皇三十一年、蘇我大臣稻目薨ズ、而シテ物部大連尾與モ亦天皇ノ晩年ニ薨シ、子弓削守屋繼ギテ大連トナレリ。三十二年天皇崩御ス。

(三五〇)

### 第廿四章 物部氏、蘇我氏軋轢

崇佛排佛ノ  
二黨相争フ  
ナル

百濟ヨリ經  
論及僧尼工  
ハチ獻ス

○一 敏達天皇 紀元千二百三十二年、敏達天皇位ニ即キ給フ。欽明天皇ノ第二子ナリ。物部弓削守屋大連タルコト故ノ如シ。蘇我稻目ノ子、馬子、宿禰ヲ以テ大臣トス。天皇文史ヲ愛シテ佛法ヲ信シ給ハズ。大連、大臣ノ朝權ヲ争フコト日一日ヨリモ甚シク、是ノ時ヨリ崇佛排佛ノ二黨ハ、轉マテ朝權ヲ争フニ黨トナレリ。天皇ノ時三韓ノ紛亂尙解ケズ。紀國造押勝、吉備海部直羽島等ヲ用テ百濟ニ至リ任那ノ恢復ヲ計ラシメラレシカドモ、果サズシテ息ミタリ。  
○二 佛法再熾ナリ 六年五月、大別王及小黒吉士ヲシテ百濟ニ使ヒシム。歸ルニ及ビテ、百濟王大別王等ニ付シテ經論數卷ト、律師、禪師、比丘尼、咒禁師、造佛工、造寺工六人ヲ獻ズ。遂ニ難波ノ大別王ノ寺ニ安置ス。ト日本書紀ニ見エタリ。然レドモ大別王ノ離人タルコト未詳ナラズ。十三年蘇我馬子、大臣父ノ志ヲ繼ギ、佛法ヲ修セントス。然レドモ佛像ナキヲ以テ、鹿深臣某ノ百濟ヨリ持チ歸リシ彌勒ノ右像一軀、及佐伯連某ノ持テ歸リシ佛像一軀ヲ贈ヒ受ケ、前ニ述

蘇我馬子佛  
ヲ奉ス

馬子尼度  
セシム

佛法再熾ナ  
リ

(1151)

ベタル司馬達等ノ當時鞍部村主タリシヲ召シ、又池邊直氷田ト云フ者ヲ召シテ四方ニ使シ、修行者ヲ訪ヒ覓メシメ、播磨國ニ於テ還俗ノ僧高麗、惠便ヲ得タリ。馬子乃惠便ヲ以テ師ト爲シ、司馬達等ノ女島ヲ度セシム。之ヲ善信尼ト云フ。又善信尼ノ弟子トシテ二女ヲ度セシム。其ノ一ハ漢人夜菩ノ女豊女ニシテ、神藏尼ト曰ヒ、其ノ一ハ錦織壺ノ女石女ニシテ、惠善尼ト曰フ。大臣此ノ三尼ヲ以テ司馬達等ト氷田直トニ付シテ供養セシメ、佛殿ヲ宅ノ東方ニ經營シテ彌勒ノ石像ヲ安置シ、三尼ヲ請シテ大齋會ヲ設ク。此ノ時司馬達等佛舍利ヲ齋食ノ上ニ得、以テ馬子ニ獻ズ。馬子試ニ佛舍利ヲ以テ鐵質ノ中ニ置キ、鐵鎚ヲ振ヒテ之ヲ打ツニ、質ハ鎚ト與ニ摧壞シタレドモ、佛舍利ハ摧壞スベカラズ。又之ヲ水ニ投ズルニ、心ノ願フ所ニ隨ヒテ浮沈セリ。是ニ由リテ馬子及池邊直氷田、司馬達等佛法ヲ信奉スルコト益、厚ク、修行懈ラズ。翌年馬子、大臣石川ノ宅ニ於テ佛殿ヲ修治セリ。佛法是ヨリ再熾ナリ。

○三再佛法ヲ禁ズ 十四年、國人大ニ疫ス。物部、弓削、守屋、大連、中臣、勝海、大夫共ニ連等奏シテ曰ハク、陛下何故ニ臣ガ言ヲ用キタマハザルカ。先帝ヨリ陸

物部守屋佛  
像ヲ燒  
キ棄ツ

尼ヲ禁斷ス

物部守屋蘇  
我馬子漸不  
和ナリ

下ニ及ビテ疫疾流行シ、國民絕エナントス。豈專蘇我、臣ノ佛法ヲ興行スルニ由ルニ非ザランヤト。天皇詔シ給ハク、灼然ナリ。宜シク佛法ヲ斷ムベシト。是ニ於テ守屋、大連、自寺ニ詣リ、胡床ニ踞坐シ、其ノ塔ヲ斫リ倒シ、火ヲ縱テ之ヲ燔キ、并セテ佛像ト佛殿トヲ燒ク。又燒餘セル佛像ヲ取リテ難波ノ堀江ニ棄テシム。是ノ日雲ナキニ風フキ雨フル。大連雨衣ヲ被レリ。乃佐伯、造御室ヲ遣シテ馬子ガ供養セル善信尼等ヲ召喚ス。馬子敢テ命ニ違ハズ、側愴啼泣シテ尼等ヲ喚ビ出ダシ、以テ御室ニ付ス。有司便尼等ノ三衣ヲ奪ヒ、禁錮シテ海石、市ノ亭ニ楚撻シタリ。

○四佛法三たび起ル 是ノ如キハ物部、大連ノ斷然蘇我、大臣ヲ毀辱セントシタルモノナリ。是ヨリ大連、大臣漸不和ナリ。而シテ蘇我、大臣モ亦當時ノ豪族ナレバ、容易ニ屈服スベキニ非ズ。時ニ瘡患流行シ、死スル者國中ニ充ツ。其ノ患ニ罹ル者ハ、身燒カレ打タレ摧カル、ガ如シ。而シテ天皇及大連モ亦此ノ患アリ。人竊ニ相語リテ曰ハク、是佛像ヲ燒キシ罪ナラシカト。六月、馬子、大臣奏シテ曰ハク、臣ノ疾病今ニ至リテ未癒エズ。三寶ノカヲ蒙ラズバ救治シ難

尼子馬子ニ  
還附セラル

物部守屋  
蘇我馬子ト  
ノ軋

用明天皇

カラント。天皇馬子大臣ニ詔レ給ハク、汝獨佛法ヲ行フヘシ。宜シク餘人ヲ斷ム  
ベシト。乃三尼ヲ以テ馬子ニ還付シ給フ。馬子歡悅シテ措カズ。三尼ヲ頂禮シテ  
新ニ精舍ヲ營ミ、迎ヘ入レテ供養セリ。

○五 大連大臣始メテ隙アリ 同年八月、天皇病彌重ク、遂ニ崩ヲ給ヘ  
リ。是ノ時、廣瀨ノ殯宮ニ於テ、馬子ト守屋ト互ニ相嘲弄セシコトアリ。馬子、大臣  
長刀ヲ帶ビテ靈前ニ出テタルニ、守屋、大連、所然トシテ笑ヒテ曰ハク、獵箭ノ雀  
鳥ニ中リタルガ如シト。次ニ守屋、大連、靈前ニ出ザルニ、當リ、手脚搖震セシカバ、  
馬子、大臣笑ヒテ曰ハク、鈴ヲ懸クベシト。二大氏上ノ相容レザルコト既ニ此ノ  
如シ。豈永ク和平ナルヲ得ベクンヤ。是ノ時ニ當リ、皇嗣未定ラズ。炊屋姫、皇后ト  
蘇我、大臣トハ大兄、皇子ヲ立テント欲シ。物部、大連ハ同シ。飲明天皇ノ皇子、穴穗  
部、皇子ヲ立テント欲ス。而シテ空穗部、皇子モ亦異志アリ。カクテ次ニ立テ給  
ヘル用明天皇ハ、先帝ニ反シテ佛法ヲ信マ給ヒシヲ以テ、蘇我、大臣ヲシテ大ニ  
前年ノ衰權ヲ回復スル便ヲ得シメ給ヘリ。

○六 用明天皇 紀元千二百三十二年大兄、皇子位ニ即キ給フ。用明天皇是

(三五四)

穴穗部皇子

ナリ。飲明天皇ノ第四子ニ坐シテ、母堅鹽媛ハ蘇我、大臣稻目ノ女ナリ。蘇我、馬子、  
宿禰大臣タリ。物部、弓削、守屋、連大連タルコト並ニ故ノ如シ。三輪、君逆、先帝ノ  
時ヨリ寵任セラレ、炊屋姫、皇后ニ事ヘテ内外ノ事ヲ執ル。元年五月、穴穗部、皇  
子強ヒテ炊屋姫、皇后ノマシマス殯宮ニ入ラントス。三輪、君逆其ノ意中ヲ知り、  
拒ミテ入レズ。兵衛ヲ呼ビテ宮門ヲ重瓊ス。穴穗部、皇子問ヒテ曰ハク、何人カ此  
ニ在ル。兵衛答ヘテ曰ハク、三輪、君逆ナリト。七タヒ門ヲ開クト呼ベドモ遂ニ入  
レズ。是ニ於テ穴穗部、皇子大臣ト大連トニ謂ヒテ曰ハク、逆順ニ無禮ナリ。其ノ  
殯庭ニ於テ誅シ奉レル語ニ、朝廷ヲ荒サズ、淨キコト鏡面ノ如ク、臣治メ平ク仕  
ヘ奉ラント曰ヘリ。即は無禮ナリ。方今天皇ノ子弟多ク在シ、兩大臣侍ルニ、誰カ  
情ヲ恣ニシテ專奉仕スト言フコトヲ得ン、又余殯内ヲ觀ントスルニ、逆拒キテ  
入レズ。呼フコト七廻ナレドモ應ゼズ。願ハクハ之ヲ斬ラント欲スト。大臣、大連  
曰ハク、命ニ隨ハント。蓋皇子陰ニ天位ヲ望ミ、先詐リテ逆、君ヲ除カントセラレ  
シナリ。遂ニ物部、守屋、大連ト兵ヲ率井テ磐余ノ池邊ヲ圍繞ス。逆、君之ヲ知リテ  
三諸岳ニ隱レ、夜半潛ニ山ヨリ出テ、後宮ニ隱ル。人アリ、逆、君ノ在處ヲ告グ。穴

物部守屋三輪逆ヲ殺ス

排佛崇佛ノ專ニ政權ヲ握セシメトス

二五〇  
穗部皇子大連守屋ニ命ヲテ曰ハク、汝應ニ往キテ逆并ニ其ノ二子ヲ討スベシト。大連遂ニ兵ヲ率テ赴ク。大臣馬子斯ノ計ヲ聞キ、穴穗部皇子ノ所ニ詣ラントシテ其ノ門庭ニ逢ヒ、乃諫メテ曰ハク、王者ハ刑人ニ近カズ。自往クコト勿レト。皇子聽カズシテ行ク。大臣馬子便隨ヒ往キ、磐余ニ到リテ更ニ切諫ス。皇子之ニ從ヒ、胡床ニ踞坐シテ大連ヲ待ツ。大連ヤ、久シクシテ衆ヲ率テ至リ、報命シテ曰ハク、逆等ヲ斬リ訖ヘヌト。大臣馬子惻然頽歎シテ曰ハク、天下ノ亂レムコト久シカラマト。大連曰ハク、汝小臣ノ議ラザル所ナリト。由是觀之、當時朝廷ハ既ニ二黨ニ分レ、一方ニハ、竊ニ望テ帝位ニ屬スル穴穗部皇子ト、排佛ヲ以テ主義トシ實ハ蘇我氏ヲ斃シテ政權ヲ專握セントスル物部、大連トアリ、他ノ一方ニハ炊屋姫皇后ト、三輪君逆ト、既ニ成人セル庶子、皇子トアリテ崇佛ヲ主義トシ物部氏ヲ斃シテ政權ヲ專握セントスル蘇我、大臣之ヲ翼賛シタリシナリ。而シテ用明天皇ハ在位二年ニシテ崩御シ給ヒシニ因リ、二黨ノ分裂ハ復救治スベカラザルニ至レリ。

○七物部大臣ノ滅亡 二年、天皇瘡ヲ病ミ、日ニ篤キヲ加ヘ給フ。群臣ニ

守屋馬子ノ守論

守屋穴穗部皇子ヲ立テシム  
馬子穴穗部皇子ヲ殺サシム

詔シ給ハク、朕三寶ニ歸セント思フ。卿等之ヲ議セヨト。群臣朝ニ入りテ議シ、大臣大連ノ爭論再熾ナリ。大連曰ハク、何ソ國神ニ背キテ他神ヲ敬セム。由來斯ノ如キ事ヲ知ラズト。大臣曰ハク、詔ニ隨ヒ奉ルベシ。誰カ異計ヲ生ゼント。穴穗部皇子豐國法師ヲ引キテ内裏ニ入ル。物部、大連睨ミ視テ大ニ怒ル。人アリ、大連ニ告ゲテ曰ハク、今群臣卿ヲ圍リ、將ニ路ニ要セントスト。守屋乃退キテ阿都ノ別業ニ居リ、兵ヲ聚メテ自衛ル。中臣勝海、連常ニ大連ニ與シテ排佛ヲ論ズ。是ニ至リ兵ヲ聚メテ大連ニ應ゼントシ、舍人迹見、首赤檮ノ爲ニ殺サル。大連守屋、物部八坂太市、造小坂ト漆部、造兄トヲシテ馬子ニ謂ハシメテ曰ハク、吾聞ク群臣我ヲ謀ルト。我故ニ退クナリト。馬子土師八島、連ヲ大伴、毘羅夫、連ノ所ニ使シ大連ノ語ヲ述ベシム。毘羅夫、連乃弓箭皮楯ヲ執リテ大臣ノ槻曲ノ家ヲ警衛ス。二年四月、天皇崩御ス。是ニ於テ物部、大連軍衆ヲ動カシ餘ノ皇子等ヲ除キ穴穗部皇子ヲ立テ、天皇ト爲サント欲ス。因リテ皇子ト淡路ニ獵スト詐リ、陰ニ替立ヲ圖ル。謀泄ル。六月蘇我大臣炊屋姫皇后ヲ奉テ、佐伯連丹經手等ニ命シ穴穗部皇子ノ宮ヲ圍ミテ之ヲ殺サシム。七月蘇我大臣諸皇子ト群臣トニ



馬子守屋  
ト戦フ

守屋ノ軍敗  
ル

勸メテ、物部守屋、大連ヲ滅サノコトヲ計ル。泊瀬部皇子、竹田皇子、麻戸皇子、難波皇子、春日皇子、紀臣男麻呂、巨勢臣比良夫、膳臣賀揭夫、葛城臣烏那羅、大臣ニカヲ合セ、軍旅ヲ率テ進ミ、大連ヲ討ツ。大伴連嚙阿部、臣人平群、臣神手坂本、臣糠手、春日、臣某モ大臣ニ應ジ、兵ヲ率テ志城郡ヨリ進ミ、大連ノ澁河ノ家ニ迫ル。大連躬子弟ト奴軍トヲ率テ、稻城ヲ築キテ防ギ戰フ。大連榎木ニ登リ、枝間ヨリ臨ミ射ルコト雨ノ如シ。其ノ軍強盛ニシテ、家ニ填テ野ニ溢ル。皇子等ノ軍ト群臣ノ衆ト怯懦恐怖シテ三タヒ却ク。是ノ時、麻戸皇子年十六歳、額ニ束髮シテ、軍後ニ隨ヒ、自料リテ曰ハク、我が軍或ハ敗レントス。所願ニ非ズバ成リ難カルベシト。乃白膠木ヲ斫リ取リテ疾ク四天王ノ像ヲ作り、之ヲ頂髮ニ置キテ、誓ヒテ曰ハク、今若我ヲシテ敵ニ勝タシメバ、必當ニ護世四王ノ爲ニ寺塔ヲ起立スベシト。蘇我馬子、大臣モ誓言ヲ發スラク、凡諸天王大神王等我ヲ助衛シテ利益ヲ獲シメ給ハハ、願ハクハ當ニ諸天王ト大神王トノ爲ニ寺塔ヲ起立シ、三寶ヲ流通セシムベシト。誓已ヘテ兵ヲ嚴ニシテ進ミ討ツ。迹見、首赤禰、大連ヲ枝下ニ射墮シ、大連并ニ其子等ヲ誅ス。是ニ由リ大連ノ軍忽敗レ、全軍悉息衣ヲ被リ、廣瀬

四天王寺ヲ  
造ル

法興寺ヲ起  
ス

崇峻天皇

百濟佛舍利  
ヲ獻ス

ノ勾原ニ馳獵スルマテシテ散ゼリ。是ノ役ニ大連ノ兒息眷屬或ハ葦原ニ逃グ匿レテ姓ヲ改メ名ヲ換フル者アリ、或ハ逃亡シテ向フ所ヲ知ラザル者アリキ。亂平キテ後、攝津ノ國ニ於テ四天王寺ヲ造リ、大連ノ奴半ト宅トヲ分チテ大寺ノ奴及田莊ト爲シ、田一萬頃ヲ以テ迹見、首赤禰ニ賜フ。蘇我大臣モ亦本願ニ依リ、飛鳥ノ地ニ法興寺ヲ起ツ。  
○崇峻天皇 是ニ於テ欽明天皇ノ第十二子泊瀬部皇子位ニ即キ給フ。之ヲ崇峻天皇トス。母小姉姫ハ蘇我大臣稻目ノ女ナリ。蘇我馬子大臣タルコト故ノ如シ。而シテ復大連ヲ立テズ。用明天皇御病篤カリシトキ、僧ヲ百濟ニ召サレキ。崇峻天皇ノ元年ニ至リ、百濟國使并ニ僧惠德、令斤、惠寔等ヲ遣シテ佛舍利ヲ獻フ。又使ヲ遣シテ佛舍利及僧照、律師令威、惠衆、惠宿、道嚴、令開等、寺工太良未太、文買古子、鏡盤、博士將德、白味淳、瓦、博士麻奈、父奴、場貴文、陵貴文、昔麻帝彌、番工白加ヲ獻ズ。照照ハ三藏ノ大師ニシテ、令威等五僧ハ律師ナリ。鏡盤、博士トハ鑄物ノ匠工ナリ。當時百濟ノ上表ニ曰ハク、本國ノ王傳奏ス、承ルニ陛下用明天皇、基ヲ紹ギ、祚ヲ踐ミ、羣メテ佛道ヲ興ス。漢帝東流ノ夢、法王西來ノ猷、

尼サマテ百  
シニ留學セ

今ニ於テ驗アリ。傳燈ノ聖皇復附神ノ下神國タル日本ヲ指ニ生マレ、立幢ノ眞人重ヲテ馬臺和ノ前ニ出ゾ至喜ニ勝ヘズ。三藏大師律學比丘ヲ貢渡ス。請フ陛下佛日ヲ若木ノ郷ニ照シ、慈雲ヲ扶桑ノ邑ニ掩ヒタマヘ云云。ト蘇我大臣馬子百濟ノ僧等ヲ請マテ受戒ノ法ヲ問フ。又善信尼等ヲ以テ百濟ノ使ニ付シ、其ノ國ニ留學セシム。又飛鳥衣縫、造ノ祖、樹葉ノ家ヲ壞チテ法興寺ヲ作り、此ノ地ヲ稱シテ飛鳥ノ眞神原ト云フ。三年、善信尼等百濟ヨリ歸リ、櫻井寺ニ住シ、大伴、狹手彦ノ女及新羅百濟ヨリ歸化セル婦人ヲ度シテ尼ト爲ス。今年、漢人善聰等八人出家セリ。

○蘇我馬子大逆ヲ行フ 水鏡崇峻天皇ノ條ニ曰ハシ、位に即き給ひて、明る年の冬、御門聖德太子を呼びたてまつりて、汝善く人を相す。朕を相し給へどのたまひしかば、太子ゆでたくおはします。但よこさまに御命のあやぶみなん見えさせおはします。心まらざらん人を宮の中へ入れさせ給ふまじきなりと申し給ひしかば、御門いかなる所を見てのたまふぞと仰せられしに、太子、赤き筋御眼を貫けり。これは傷害の相なりと申し給ひしかば、御門御鏡にて見

(1160)

給ひしに、申し給ふ如くにおはしまし、かば、大きに驚き怖りおはしましき。かくて太子人々に御門の御相は前の世の御事なれば、變はるべき御事にあらざどそのたまひし。三年と申し、十一月に、太子御年十九にて元服し給ひき。五年と申し、二月に、御門志のびやかに太子にのたまはく、蘇我の大臣内には私を恣にし、外には偽を飾り、佛法を崇むるやうなれども、心正しからず。如何すべきとのたまひしかば、太子たゞ此の事を忍び給ふべしと申し給ひしほどに、十月に人の猪を奉りたりしを御門御覽じて、いつか猪の首をきるがごとくに、我が嫌ふ所の人を絶ち失なふべきとのたまはせしかば、太子大きに驚き給ひて、世の中の大事此の御詞に因りてぞ出でくべきとて、俄に内宴を行ひて、人々に祿たまはせなどして、今日御門ののたまはせつることゆめ／＼ちらすなどかたらひ給ひしを、誰れかいひけん、蘇我の大臣に、御門かゝる事をなんのたまひつるとかたりければ、我が身をのたまふにこそと思ひて、御門を失ひたてまつらんと謀りて、東漢駒トウマンクマといふ人をかたらひて、十一月三日御門を失ひたてまつりき。宮の中の人驚き騒ぎしを蘇我の大臣その人を捕へさせしかば、人々此の大

臣のまわざにこそ知りて、どかく物いふ人なかりき。大臣、駒を貸して様々の物を賜はせて我が家の中に、女房などの中にも憚りなく出入り、心にまかせてせさせし程に、大臣の娘を忍びて奸しき。大臣、此の事を聞きて、大に怒りて髪を取りにて木に掛けて、自之を射き、汝おろかなる心を以ちて御門を失ひたてまつると云ひて、矢を放ちしかば、駒叫びて、吾其の時に大臣の事を知れりき。御門と云ふ事を知りたてまつらずと言ひしかば、大臣此の時いよゝ怒りて、劔を執りて腹をさき、頭を断りてき。大臣の心悪しきこと、彌世の中にひろまりしなり。

第廿五章 推古天皇及聖德太子攝政

推古天皇

女帝ノ始メ

麻戸皇子皇太子トナリ給フ

○節一 聖德太子 紀元千二百五十三年崇峻天皇遭害ノ後蘇我大臣馬子ノ策ニ依リ、欽明天皇ノ皇女ニシテ敏達天皇ノ皇后ニ坐シ、豊御食炊屋姫ヲ立テ、天皇トス。之ヲ推古天皇トス。母ハ蘇我、稻目ノ女ナレバ、蘇我、馬子ハ實ニ天皇ノ舅ナリ。敏達天皇崩ヲ給フニ及ビテ、天皇蘇我、大臣馬子ト議リテ、大兄皇子用明ヲ立テ給ヘリ。而シテ用明天皇崩御シ、穴穗部皇子ト物部守屋ト亂ヲ起スニ及ビ蘇我、大臣ニ追討ノ命ヲ下シ給ヒシモ亦天皇ナリ。天皇更ニ蘇我、大臣馬子ト議シテ崇峻天皇ヲ立テ、遂ニ親位ニ即キ給ヘリ。本朝ニ於テ皇女ノ帝位ニ登リ給ヒシコト、建國ヨリ以來未曾テ有ラザル所ナリ。水鏡ニ、位に即き給ひて明くる年の四月に、御門我が身は女人なり。心に物を覺らざ、世の政は聖德太子に爲し給へと申し給ひしかば世の人喜を爲して云云トアリ。日本書紀ニハ、麻戸、豊聰耳皇子ヲ立テ、皇太子ト爲シ、仍リテ政ヲ録攝セシメ、萬機ヲ以テ悉委テタマフトアリ。同書ニ又曰ハク、太子生レテ能ク言フ。聖智アリ。壯ナル

ニ及ビテ一タビニシテ十人ノ訴ヲ聞キ、以テ失フコト無ク能ク辨ズ。兼テ未  
 然ヲ知り、且内經ヲ高麗ノ僧惠慈ニ習ヒ、外典ヲ博士覺荷ニ學ビ、兼テ悉達ス。  
 父ノ天皇之ヲ愛シ、令シテ宮南ノ上殿ニ居ラシメタマフ。故ニ其ノ名ヲ稱シテ  
 上宮廐戸豐聰耳太子ト曰フ。蓋太子ハ當時ニ於テ非凡ノ學者タリシコト疑  
 ナ容レズ。然リト雖、其ノ全體ノ經歷ニ就キテ之ヲ論ズルトキハ、我が國歴史中  
 ノ人物ニレテ是非ヲ評スルコトノ難キ、聖德太子ノ如キハ有ラザルナリ。先  
 帝ヲ殺シ奉リシ逆賊蘇我大臣ト共ニ朝政ヲ執リテ、敢テ其ノ罪ヲ糺サントセ  
 ラレザリシハ、之ヲ不忠不孝ト謂フベシ。然レドモ又當時ノ事情ヨリ見ルトキ  
 ハ勢ノ已ムテ得ザルモノアリシナラン。即族長政治ノ弊其ノ極度ニ至レルコ  
 ト是ナリ。而シテ蘇我大臣ノ威權ハ多ク佛法ノ助ニ依リテ立チ、而シテ佛法ハ  
 元來惡シキモノニ非ザルガ故ニ、其ノ勢力ヲ擴張シテ、以テ朝綱ヲ一變セント  
 セラレタルコト、是太子ノ事業ニシテ、又太子ノ失敗シ、終ニ天地ノ間身ヲ置ク  
 處無ク、躬命ヲ絶ツニ至リ給ヒシ原因ナルベシ。サレバ太子ノ企ハ決シテ德ニ  
 背ケルニ非ズ。敢テ私利ヲ思ハズ、國家ノ爲ニ刻苦經營セラシメハ疑ヒ無キ所

太子ノ馬子  
ノ罪ヲ正サ  
レザリシ理  
由

太子失敗ノ  
原因

ナレドモ、其ノ志ヲ遂クル方便ニ至リテハ、拙ト謂フベキナリ。日本ノ政體ハ、豈  
 佛法ニ依リテ改革スベキモノナランヤ。太子ノ方策ニシテ若行ハレタランニ  
 ハ、日本ハ印度西藏ノ如キ國體ト爲リテ、教長ト君主ト其ノ人ヲ同マクスルニ  
 至ラズバ止マザラン。即連綿皇統ヲ以テ國民ノ團結ヲ保ツトハ、全ク反對セル  
 結果ヲ生ゼンノミ。此ノ時太子ノ企テ給ヒシ佛法ニ基ク改制ノ成ラズシテ、後  
 ニ鎌足ノ企テシ儒道ニ基ク改制ノ成リシコト、偶然ニ非ザルナリ。

太子モ蘇我氏等ガ權柄ノ制シ難キヲ見、其ノ根本ハ日本古來ノ習慣ニ於テ氏  
 上ヲシテ其ノ氏族ヲ管領セシメ、大氏ノ氏、上ヲシテ部下ノ諸小氏ノ氏、上ヲ統  
 管セシメタルニ在ルコトヲ悟リテ、此ノ弊ヲ改メンガ爲ニ、血統上ノ威權ニ變  
 フルニ、信教上ノ威權ヲ以テセントセラレシモノナリ。即佛教ニ於テ命ズル所  
 ノ道徳ヲ以テ國家編制ノ基本トセントセラレシコト是ナリ。此ノ事ノ證ト  
 スベキモノハ、太子ノ自編述シ給ヒシ十七憲法ニ在リ。

○**節十七憲法** 十七憲法ノ由來ニ就キテハ、佛家ニ種々ノ說話アレドモ、  
 正史ニ驗證ナシ。今日本書記ニ載セテ世ニ傳フル所ハ、左ノ十七句ニ注釋ヲ

太子ノ政體  
改革

付シタルモノナリ

- 一ニ曰ハク、和ヲ以テ貴ト爲シ、忤ルコト無キヲ宗トセヨ。
- 二ニ曰ハク、篤ク三寶ヲ敬セヨ。
- 三ニ曰ハク、詔ヲ受クテハ必謹メ。
- 四ニ曰ハク、群卿百僚禮ヲ以テ本トセヨ。
- 五ニ曰ハク、發ヲ絶チ欲テ棄テ、訴訟ヲ明辨セヨ。
- 六ニ曰ハク、惡ヲ懲シ善ヲ勸メヨ。
- 七ニ曰ハク、人各任アリ、掌ルコト宜シク濫レザルヘシ。
- 八ニ曰ハク、群卿百僚早く朝シ晏ク退ク。
- 九ニ曰ハク、信ハ是義ノ本ナリ、每事信アレ。
- 十ニ曰ハク、忿ヲ絶チ瞋ヲ棄テ人ノ違フヲ怒ラザレ。
- 十一ニ曰ハク、功過ヲ明察シ、賞罰必當ヲヨ。
- 十二ニ曰ハク、國司國造百姓ニ歛スルコト勿レ。
- 十三ニ曰ハク、諸官ニ任ズル者同マク職業ヲ知レ。

僧祖父子殿

- 十四ニ曰ハク、群卿百僚嫉妬アルコト勿レ。
  - 十五ニ曰ハク、私ニ背キ公ニ向ヘ。
  - 十六ニ曰ハク、民ヲ使フニ時ヲ以テセヨ。
  - 十七ニ曰ハク、大事ハ獨斷スベカラズ、必衆ト論ズベシト。
- 逐條ノ原注及義解ハ、別ニ著ス所ノ古代法釋義ニ之ヲ載セ、併セテ評論ヲ付シタリ。就キテ見ルベシ。

○三僧侶ノ起原

サレバ此ノ時ヨリ佛徒ハ社會ノ一大勢力トナレリ。而シテ茲ニ注意スベキハ、佛徒ハ出家トテ、國家政治ノ外ニ立チテ、別ニ一境界ヲ爲シ、普通法律ヲ以テ之ヲ制督シ難キモノト爲シタルヨリ、終ニ更ニ僧官ヲ置キテ、佛徒ニ關スル行政及司法事務ヲ監督セシムルニ至リシ事是ナリ。推古天皇ノ三十二年四月、一僧アリ、斧ヲ執リテ祖父ヲ毆ツ。天皇悉諸寺ノ僧尼ヲ聚メテ之ヲ推問シ、事實ナラバ重ク罪シタマハントス。百濟ノ僧觀勒之ヲ聞キテ表ヲ上リ、惡逆ノ者ヲ除キ、其ノ他ノ僧ハ悉赦シテ罪スルコト勿ラシコトヲ請フ。天皇之ヲ聽シ、詔シ給ハク、夫道人ニシテ尙法ヲ犯サバ、何ヲ以テ俗人ヲ誨ヘ

任正僧都ヲ  
檢校セシム

寺院及僧尼  
ノ數

美術ノ盛大  
ニ至リシ原因

畫師

佛師

故ニ自今已後僧正僧都ヲ任マ僧尼ヲ檢校セシメント即觀勒ヲ僧正トシ、  
部、德積ヲ僧部トシ、即日阿曇連ヲ法頭ト爲シ給ヘリ、法頭ナリ時同年九月寺及僧  
尼ヲ校シ、具ニ其ノ寺ノ緣起及僧尼入道ノ由來及得度ノ年月日等ヲ錄セシム。  
是ノ時ニ當リテ寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人、併セテ一千三百八  
十五人アリキト云フ。

○四 美術ノ獎勵

我が國ノ美術ハ上古ヨリ之アリシカドモ、其ノ盛大ニ  
至リシハ、亦太子ノ佛法ヲ保護セラレシ結果ナリト云フベシ。日本美術ノ一般  
ノ基本ト爲レルハ繪畫ナリ。而シテ日本畫法ノ始メテ定形ヲ得タルハ、太子ガ  
諸方ニ畫師ノ職ヲ置キテ寺院ノ佛像ノ莊嚴ヲ繪カシメラレシ時ニ在リトス。  
其ノ黃文畫師、山背畫師、實秦畫師、河内畫師、檜郡畫師等ノ名ハ後世ニモ傳ハレ  
リ。又佛像ヲ造ルヲ職トスル佛師トイヘルモノ、起リシモ同マ時ナリ。例ヘバ  
鳥佛師ノ如シ。當時造佛ノ材料トセシ黃金ハ、高麗ヨリ之ヲ獻ワタルコト日  
本書紀ニ見ユ。同書崇峻天皇元年ノ條ニ、百濟ヨリ畫工白加ヲ獻ズトアリ。又  
推古天皇ノ十八年ニ、高麗ヨリ貢上セシ僧曇徴トイヘル者モ畫ノ名人ニテ、且

僧曇徴

建築術ノ進  
歩

重大ノ結果  
ヲ後ノ歴史  
ニ存シタル  
モノ

小野臣妹子  
ヲ隋ニ遣ス

彩色及紙墨ヲ作ル術ヲ本朝ニ傳ヘタリ。又百濟ヨリ歸化シタル阿佐太子ガ  
畫クル聖德太子ノ像ハ、今尙處處ニ其ノ模本アリテ、本朝ノ最古キ畫方ノ模型  
ナリ。又難波ノ四天王寺ヲ始メトシテ、多ク寺院ヲ建築セシニ依リ、建築術大  
ニ進歩シテ、美術ノ一トナレリ。

○五 隋唐ノ交通

當時ノ事ニシテ、太子ノ十七憲法ヨリモ遙ニ重大ナル  
結果ヲ後ノ歷史上ニ存シタル者ハ、即隋唐ト直接ニ交通ヲ開キシコト是ナリ。  
從前韓土ノ諸國ト交通セシカドモ、三韓ハ支那帝國ノ中央ヨリ言フトキハ邊  
陲ニシテ、開化ノ度殆日本ト異ナラズ、然ルニ太子深ク佛法ヲ尊重シ、三韓ヲ經  
テ間接ニ佛經佛僧等ヲ得ルニ満足セズ、直ニ使ヲ支那ノ帝都ニ遣シテ經典ヲ  
求メシメントセラレシヨリ是マテ只傳聞スルノミナリシ支那ノ風土文物ヲ  
實地ニ目撃スルニ至リ、終ニ大化以後唐制模倣ノ大根原ヲ開キタリ。  
推古天皇十五年七月、小野臣妹子ヲシテ隋ニ使セシメ、鞍作福利ヲ以テ通事ト  
爲ス。扶桑零記ニモ水鏡ニモ、是佛經ヲ持チ來サシムル爲ナリト言ヘリ。北史ニ  
「大業三年其ノ主多利思比孤舒明天皇ノ從弟長足日使ヲ遣シテ朝貢ス。使者曰

隋使裴世清  
來ル

(170)

ハク、聞ク海西ノ菩薩天子佛法ヲ重興ス、故ニ朝拜セシムト。兼テ沙門數十人  
來リテ佛法ヲ學ブ云云トアリ。十六年四月、妹子隋ヨリ歸ル、隋使裴世清之ニ  
從ヒ來ル。妹子百濟ヲ經過スル時、隋帝ノ書ヲ掠取セラル、罪流刑ニ當レドモ、隋  
使ノ聞キ知ラントテ避クル爲ニ、特ニ勅シテ之ヲ赦シ給ヘリ。隋書東夷傳  
ニ曰ハク、明年大業四上、文林郎裴清ヲ遣シテ倭國ニ使セシム。百濟ヲ度リ、行キ  
テ竹島ニ至ル。南船羅ノ國ヲ望ミ、都斯麻ノ國ヲ經テ、迤ニ大海ノ中ニ在リ。又東  
一支ノ國ニ至リ、又竹斯ノ國ニ至ル。又東秦王ノ國ニ至ル。其人華夏ニ同シ、以テ  
夷洲ト爲ス。ハ疑フヲクハ、明ナルコト能ハザルナリ。又十餘國ヲ經テ海岸ニ達  
ス。竹斯ノ國ヨリ以東、皆倭ニ附庸ス。倭王小德阿盤臺ヲ遣シ、數百人ヲ從ヘ、儀仗  
ヲ設ケ、鼓角ヲ鳴シ來リ迎フ。略其ノ王、清ト相見テ大ニ悅ビテ曰ハク、我聞ク海  
西ニ大隋アリ、禮義ノ國ト。故ニ朝貢セシム。我ハ夷人、海隅ニ僻在シ、禮義ヲ聞カ  
ズ。是ヲ以テ境内ニ營留シ、即相見ズ。今故ニ道ヲ清メ、館ヲ飾リ、以テ大使ヲ待ツ。  
冀ハクハ大國惟新ノ化ヲ聞カント。清答ヘテ曰ハク、皇帝德二儀ニ並ビ、澤四海  
ニ流ル。王ノ化ヲ慕フヲ以テ、故ニ行人ヲ遣シ、來リテ此ニ宣諭セシムト。八月、隋

附ニ留學生  
ヲ派ス

隋唐ノ文物  
我邦ニ入ル  
發端

使ヲ朝ニ饗シ。九月、其ノ歸ルニ及ビテ、再妹子ヲ大使トシ、吉士雄成ヲ小使トシ  
テ、隋使ト共ニ行カシム。又同時ニ學生倭直福因、奈羅譯、惠明、高向漢人、玄理、新  
漢人、大國學問僧新漢人、曼、南淵漢人、薛、安志賀、漢人、惠隱、漢人、廣齊等八人ヲ隋ニ  
留學セシム。是即隋唐文物ヲ我が邦ニ輸入セル發端ナリ。特ニ玄理ト僧曼トハ  
大化改新ノ時ニ至リ、顧問トナリテ偉功アリシ事後ニ記スルガ如シ。此等ノ  
八人ハ日本人ナレドモ、漢風ノ名ヲ付シタルニ因リテ之ヲ考フルトキハ、往時  
漢土ヨリ歸化シタル者ノ子孫ナルモアリ、亦然ラザルモ、善ク支那ノ文學ニ通  
シタルガ故ニ、特ニ選拔セラレタルモノナルベシ。小野妹子ハ十七年九月ニ  
歸朝シタルドモ、學生等ハ尙留レリ。三十一年此ノ年隋亡ル唐ノ世トナルヒテニ至リテ、福因ノ  
ミ新羅ノ使ト共ニ歸朝シ、奏シツ、ク曰ハク、唐國ニ留リ學ブ者皆業成レリ。應  
ニ喚ブベシ。且ソレ大唐國ハ法式備定ス。珍國ナリ、常ニ達スベシト。僧曼ハ尙  
明天皇ノ四年、唐使高表仁ノ來リシトキ從ヒ歸レリ。

○六節 冠位ヲ定ム 是ヨリ先天皇ノ十一年ニ、太子始メテ冠位ヲ制定シ、翌  
年元旦ニ之ヲ諸臣ニ賜ヒテ着用セシム。凡十二階アリ。當色ノ繩ヲ以テ之ヲ縫

唯元旦ニハ髻華ヲ着ク其ノ名稱左ノ如シ

(二七二)

(一)大德

(二)小德

(三)大仁

(四)小仁

(五)大禮

(六)小禮

(七)大信

(八)小信

(九)大義

(十)小義

(十一)大智

(十二)小智

○七 節 舊紀ヲ修ス

日本書紀ニ二十八年皇太子島ノ大臣馬ト共議シ天皇紀及國紀臣連伴造國造百八十部公民等ノ本紀ヲ作ルトアリ。舊事秘説ハ深ク信ヲ置クニ足ラザル書ナレドモ其ノ傳フル所ニ依レバ皇太子躬奏シテ始メ

ヲ紀ヲ造ル馬子大臣ト中臣御食子トコ命シ家々ノ古紀ヲ集メシメ秦ノ大連案ヲ書シ而シテ島大臣ト大史御食子トテシテ舊事ノ委曲ヲ撰バシメ秦ノ大連ト博士學智トヲシテ文章ヲ潤色セシム。錄スル所ハ天皇ノ紀及天皇ノ國紀諸姓ノ臣連伴造國造百八十部公民ノ本紀ナリ。島大臣奏シテ曰ハク家々ノ紀紛々タルヲ以テ還リテ後世ヲ迷ハサン之ヲ燒キテ迷ヲ消スベシト皇太子曰ハク不可ナリ宜シク後葉ニ任ズベシト之ニ依リ燒カズシテ其ノ家ニ返スト此ノ時編纂セシハ今傳ハラズ今日ニ存スル國造本紀ハ當時撰修シタリシ所

ノ一部ナリト云フ説アレドモ是亦確證アルニ非ズ。

○八 節 曆數ヲ制ス 推古天皇十年ノ紀ニ冬十月百濟ノ僧觀勒來ル仍リテ

曆本及天文地理並ニ通甲方術ノ書ヲ貢ス。是ノ時書生三四人ヲ選ミ以テ觀勒ニ學習セシム。陽胡史ノ祖王陳曆法ヲ習ヒ大友村主高聰天文通甲ヲ學ヒ山背臣日並方術ヲ學ブ。皆學ビ以テ業ヲ成ストアリ。蓋本邦ノ曆法アルコト既ニ久シク現ニ日本書紀ニ見エタル所ヲ以テスルモ漢韓ノ曆法トハ異ナルモノヲ用非タリシコト明ナリ。又干支ヲ以テ年ヲ紀スルコト欽明天皇ノ時ヨリ始マリシニ此ノ時ニ至リテ終ニ朝鮮ノ曆法ヲ傳ヘ爾來專之ニ依ルコトナレリ。

○九 節 太子入滅 二十九年二月太子斑鳩宮ニ在リ妃ニ命マテ沐浴セシメ

太子モ亦沐浴シテ新潔ノ衣袴ヲ服シ妃ニ謂ヒテ曰ハク吾今夕遷化スベシ子モ共ニ去ルベシト妃亦新潔ノ衣裳ヲ服シ太子ノ副床ニ臥ス。明旦太子並ニ妃久クシテ起キズ。左右殿戸ヲ開キ乃遷化ヲ知ル。是ノ時大臣已下群臣百官天下ノ衆生悉父母ヲ亡フガ如シ哭泣ノ聲行路ニ滿テリ。天皇之ヲ聞キ昔ヲ舉ゲテ



大哭シ、車駕宮ニ臨ミテ失聲叫囂シタマフ。大臣以下復大ニ擗踊シ、相謂ヒテ曰ハク、日月モ輝テ失ヒ、天地既ニ没スト。是太子傳ノ錄スル所ナリ。太子薨ズル時、歲四十一ナリ。

(二七四)

### 第廿六章 蘇我大臣惡逆

馬子葛城縣  
ヲ名フ

○節一 蘇我馬子專橫 推古天皇ノ三十二年、蘇我大臣天皇ニ奏セシメテ曰ハク、葛城縣ハ元臣ノ本居ナリ。故ニ其ノ縣ニ因リテ姓名ト爲ス。竊ハクハ其ノ縣ヲ得、以テ臣ガ封縣ト爲サント欲スト。是ノ時天皇ノ大臣ニ答ヘ給ヒシ詔旨ハ、以テ大臣ノ權勢ヲ見ルニ足レリ。曰ハク、今朕ハ則蘇我ヨリ出テ、大臣ハ亦朕ガ舅ナリ。大臣ノ言ハ、夜ニ言ハ、夜モ明サズ日ニ言ハ、日モ晚サズ。何ノ辭カ用井ザラン。然レドモ今朕ノ世ニ當リテ、頓ニ此ノ縣ヲ失ハ、後ニ君タル者言ハ、ン。愚痴ナル婦人天下ニ臨ミテ、以テ頓ニ其ノ縣ヲ亡ヘリト。豈獨朕ノ不賢ナルノミナランヤ。大臣モ亦不忠ナルハ、是後葉ノ惡名ナラント。則聽サレザリキ。三十四年、大臣馬子薨ズ。抑崇峻天皇ハ馬子ノ妹ノ出ニシテ、天皇ノ位ニ坐セリ。而シテ馬子之ヲ殺シ奉リ、其ノ罪天地ノ容レザル所ナレドモ、彼依然朝ニ立チテ政權ヲ執リ、平安ニ命ヲ卒フルコトヲ得タリシハ、奇怪ト謂ハ、ノミ。亦以テ當時族制政治ノ弊、其ノ極點ニ達シタリシヲ知ル可シ。

馬子薨ズ

蘇我蝦夷大臣トナル

始メテ天皇ノ哀禮ヲ起ス

舒明天皇

馬子ノ子蘇我蝦夷繼ギテ大臣ト爲リ、權勢益大ニ專横愈甚シ。推古天皇在位三十六年ニシテ崩御ス。聖算七十五歳ナリ。始メテ天皇ノ哀禮ヲ起シ群臣各殯宮ニ誅ス。

○二舒明天皇及皇極天皇 舒明天皇ハ始メ田村皇子ト申ス。敏達天皇

境部臣山背王ヲ立テラントス

蝦夷田村皇子ヲ立テラントス

ノ皇孫ニシテ彦人大兄皇子ノ御子ナリ。推古天皇皇子ヲ病床ニ召シ、教フルニ鴻業經綸ノ難キヲ以テ給フ。而シテ蘇我大臣蝦夷固ヨリ此ノ皇子ヲ立ツル意アリ。時ニ聖德太子ノ子ニ山背大兄王アリ。父ハ天位ニ登ラズシテ堯セラレタレドモ、亦仲哀天皇ノ先例ナキニ非ザルヲ以テ、蝦夷大臣ノ弟境部臣麻理勢ハ山背大兄王ヲ立テントシ、群臣中之ニ左祖スル者アリ。而シテ山背大兄王モ亦推古天皇ノ遺勅アリト唱論ス。大臣蝦夷群臣ニ歷問スルニ、或ハ田村皇子ト答へ、或ハ山背大兄王ト答へ、或ハ敢テ答へズ。遂ニ全朝ノ大問題ト爲リ、連月決セズ。山背大兄王、天下ノ己ノ爲ニ亂レントスルヲ憂ヒ、境部臣ヲ慰諭シテ大臣蝦夷ニ從ハシメ、トセラレシカドモ果サズ。因リテ大臣蝦夷軍ヲ興シテ境部臣ヲ殺シ、田村皇子ヲシテ天皇ノ位ニ即カシム。

皇極天皇

蘇我入鹿自大臣トナル

蘇我ノ隆盛

○三蘇我蝦夷專權 大臣蝦夷擁立ノ功ヲ特ミ、專横日ニ加ハル。蝦夷豊浦ニ邸ス。時ニ群臣皆大臣ノ邸ニ參赴シ、天皇ニ朝スル者ナシ。大派王ノヲ憂ヒ、豊浦本臣ニ謂ヒテ曰ハク、群卿百僚ノ朝參已ニ懈レリ。自今以後卯ノ始ニ朝シ已ノ後ニ退リ、因リテ鐘ヲ以テ節ト爲サント。然レドモ大臣從ハズ。舒明天皇在位十三年ノ間、國政ハ一ニ大臣蝦夷ヨリ出ツ。天皇崩御ノ後、其ノ皇后ヲ立テ、天皇トス。之ヲ皇極天皇ト云フ。蘇我蝦夷大臣タルコト故ノ如シ。皇極天皇ノ元年ニ、蝦夷ノ子入鹿、自大臣トナル。紀ニ曰ハク、大臣ノ見入鹿ト云フ。自國政ヲ執リテ、威父ニ勝レリ。此ニ由リテ盜賊恐懼シ、途遺ヲ拾ハズト。又曰ハク、是ノ歲蘇我大臣蝦夷己ガ祖廟ヲ葛城ノ高宮ニ立テ、八僧ノ舞ヲ爲ス。又、蘇國ノ民並ニ百八十ノ部曲ヲ發シ、預双墓ヲ今來ニ造ル。一ヲ大陵ト曰ヒ、大臣ノ墓ト爲ス。一ヲ小陵ト曰ヒ、入鹿臣ノ墓ト爲ス。死後人ヲ勞セシムル勿ラマツテ望ム。更ニ悉上宮ノ乳部ノ民ヲ聚メテ、螢兆所ニ使役ス。是ニ於テ上宮ノ大娘姫王、蘇太子憤ヲ發シ、歎テ曰ハク、蘇我臣國政ヲ專擅シ、多ク無禮ヲ行フ。天ニ無ク國ニ王無シ。何ニ由リテカ意ノ任ニ悉封民ヲ役セント。是ヨリ蘇我氏ト上宮

蘇我氏上宮  
太子ノ親族  
ト云アリ

太子ノ親族ト隙アリ。遂ニ太子ノ子孫ハ悉滅ボサル、ニ至レリ。

○四節 太子ノ遺族ヲ滅ス。皇極天皇ノ二年、大臣蝦夷病ニ緣リテ朝セズ、

私ニ紫冠ヲ子入鹿ニ授ケ、大臣ノ位ニ擬ス。復其ノ弟ヲ呼ビテ物部、大臣ト曰フ。

蓋大臣ノ祖母ハ物部弓削、大連ノ妹ナリシガ故ニ物部氏滅亡ノ後、母家ノ財ヲ

收メ、今又大臣ノ稱ヲ以テ大連ノ後ヲ繼ガシメントシタルモノナリ。皇子古

人大兄ノ母ハ蘇我大臣ノ女ナリ。故ニ入鹿之ヲ立テ、天皇ト爲サント欲シ上

宮ノ王等ヲ廢セント謀ル。十一月、遂ニ巨勢、德太、臣等ヲシテ聖德太子ノ子山背

大兄、王等ヲ襲ハシム。山背、大兄、皇子馬骨ヲ取りテ内藏ニ置キ、其ノ妃并ニ子弟

等ヲ率テ逃レ出ヅ。巨勢、臣等班鳩宮ヲ燒キ、灰中ニ骨ヲ見、誤リテ謂ヘラク、王

死スト。乃圍ヲ解キテ退ク。三輪、文屋、君皇子ニ勸メテ曰ハク、深草ノ屯田ニ赴キ、

馬ニ乘リテ東國ニ詣リ、乳部ヲ以テ本ト爲シ、師ヲ興シテ還リ戰ハ、其ノ勝必

セリト。皇子曰ハク、一身ノ故ヲ以テ豈萬民ヲ煩ハサソヤト。山ニ隱ル、コト四

五日ニシテ、還リテ班鳩寺ニ入ル。蘇我氏ノ軍寺ヲ圍ム。山背、大兄、皇子之ニ言ハ

シメテ曰ハク、吾兵ヲ起シテ入鹿ヲ伐タバ、其ノ勝定マレリ。然レドモ一身ノ故

入鹿山背大  
兄王ヲ襲ハ  
シム

山背大兄王  
子自強ス

ヲ以テ百姓ヲ傷殘スルニ忍ビズ。今吾ガ一身ヲ入鹿ニ賜ハント。遂ニ子弟妃妾  
ト自頸シテ薨ズ。太子傳ニハ、入鹿、輕王等六人惡逆ヲ發シ、太子ノ子孫ヲ計ル。男

女二十三人ノ王、罪無クシテ害セラルト見エタリ。

○五節 蘇我入鹿僭擬。同天皇三年十一月ノ紀ニ曰ハク、入鹿家ヲ甘檮岡ニ

雙ベ起ツ、大臣ノ家ヲ稱シテ宮門ト曰ヒ、入鹿ノ家ヲ谷ノ宮門ト曰フ。男女ヲ稱

シテ王子ト曰ヒ、家ノ外ニ城柵ヲ作り、門ノ傍ニ兵庫ヲ作り、門毎ニ水ヲ盛ル舟

ヲ置キ、以テ火災ニ備フ。恒ニ力人ヲシテ兵ヲ持テテ家ヲ守ラシム。更ニ家ヲ畝

傍山ノ東ニ起テ、池ヲ穿テ、城ヲ爲リ、庫ヲ起テ、箭ヲ儲フ。恒ニ五十ノ兵士ヲ

將井テ、出入ニ身ヲ繞ラシム。健人ヲ名ケテ東方、儼從者ト曰フ。氏々ノ人等入り

テ、其ノ門ニ侍セルヲ名ケテ祖子孺者ト曰フ。漢直等全族ヲ率井テ二門ニ侍セ

リト。此ニ至リテ入鹿僭擬ノ形跡既ニ明ナリ。

○六節 中臣鎌子勤王。時ニ天兒屋根命二十二世ノ孫ニ中臣連御食子トイ

フ者アリ。世、天神祭祀ノ事ヲ掌ルヲ以テ、常ニ蘇我大臣ノ崇佛ヲ惡ム。御食子ノ

長子ヲ鎌子又曰ト云フ。其ノ位品ヨリ言フトキハ、速ニ過ギズト雖モ一世ノ人

入鹿僭擬ノ  
形跡明ナリ

鎌足中大兄  
皇子ト結テ

傑ナリ性仁孝ニシテ深慮アリ博學立鑑風姿挺特ナリ紀ニ鎌子周孔ノ教ヲ南  
淵先生ニ學ブト見ニ南淵ハ即前ニ妹子ニ從ヒテ隋ニ留學シタル南淵漢人  
安カ又ハ其ノ子孫ナルベシ此ノ後ニ至リテモ南淵ハ代々儒學ノ家ナリ  
子匡濟ノ心アリ入鹿君臣長幼ノ序ヲ失シ社稷ヲ闕闕スル權ヲ挾ムテ憤リ皇  
子ノ中ニ就キテ俱ニ事ヲ起スベキ人ヲ得ント欲シ先輕皇子後ノ皇ヲ試ミ次  
ニ心ヲ中大兄皇子後ノ天皇ニ屬ス然レドモ疏然トシテ其ノ幽抱ヲ展アルコト  
ヲ得ズ遇中大兄皇子法興寺ノ槻樹ノ下ニ於テ鞠ヲ蹴ル侶ニ預リ皮鞋脱落ノ  
事ヨリ遂ニ相善キコトヲ得タリ日本今昔物語ニ曰ハク天智天皇は御子にて  
御座しけるに鞠蹴させ玉ひけるところへ入鹿も参りて蹴てけり其の時大  
冠の未公卿分にも至らざるほどに大中臣の鎌子とて御座しけるも参りて共  
に蹴たまひけるに御子の鞠蹴たまひける御沓の御足を離れて上りけるを入  
鹿誇りたる心にて宮の御事を何とも恐れずして嘲りて其の御沓を外様に蹴  
遣りてけり御子此の事を極めて半無しと思召しければ顔を赤めて立たせ玉  
ひけるを入鹿猶事とも思はざる氣色にて立てりければ大冠冠其の御沓を拾

ひ取るとて我が惡しき事を翫ふとも思はざりけり御子は入鹿がかく半無く  
爲しつるに鎌子が沓を急ぎ取りて履かせつるありがたく嬉しき志なりと其  
の後は事に觸れて昵き者になん思し食しけるト鎌子以爲ヘラク我ハ連ニ  
テ神別ナリ故ニ我今事ヲ起シテ蘇我氏ヲ滅ボストキハ皇別ノ諸氏必我ヲ嫉  
ミ大ニ匡濟ヲ妨グノ如カズ皇別ニシテ而モ蘇我氏ノ一族中ヨリ同志ノ者ヲ  
得ンニハト乃中大兄皇子ニ勸メ大臣ト隙アリシ蘇我倉山田麿ノ女ヲ納レテ  
妃トセシム

○七 節 入鹿ヲ朝ニ殺ス 皇極天皇ノ四年六月ニ至リ鎌子ノ謀計定マリ

入鹿  
殊ニ伏

シカバ中大兄皇子密ニ倉山田麿ニ告グルニ三韓進調ノ日入鹿ヲ斬ラント欲  
スル旨ヲ以テセラル倉山田麿奉諾セリ當日天皇太極殿ニ御ス皇子乃十二門  
ヲ鏢サシメ祿ヲ給フト稱シテ悉禁衛ノ士ヲ一所ニ集ム鎌子又俳優ニ敷ヘテ  
入鹿ノ佩刀ヲ解カシム時刻至リ倉山田麿進ミテ三韓ノ表文ヲ讀唱ス恐レテ  
聲戰フ入鹿其ノ故ヲ問フ答ヘテ曰ハク天皇ニ近キガ故ニ覺エズ然リト中大  
兄皇子中臣連鎌子海犬養連勝麿佐伯連子麿等ト不意ニ出テ入鹿ノ頭肩ヲ

割ク入鹿驚キ起ツ子磨劍ヲ揮ヒテ其ノ一脚ヲ傷ク入鹿御座ニ轉ヒ就キ叩頭シテ曰ハク、當ニ嗣位ニ居スベキ天ノ子ナリ臣罪ヲ知ラズ乞フ審察ヲ垂レタマヘト。天皇大ニ驚キ中大兄皇子ニ詔シ給ハク、作ス所ヲ知ラズ何事アルカト。皇子地ニ伏シテ奏シテ曰ハク、入鹿天宗ヲ滅シ將ニ日位ヲ傾クントス。豈天孫ヲ以テ入鹿ニ代ヘンヤト。天皇即起チテ殿中ニ入り給フ。子磨等遂ニ入鹿ノ首ヲ斬ル。是實ニ天智中興ノ業ノ發端ナリ。是ニ於テ中大兄皇子、法興寺ニ入りテ兵ヲ備ヘ給フ。諸皇子、諸王、諸卿大夫、臣、連、伴、造、國、造、皆從フ。蘇我氏ニ附從セル漢直等、眷屬ヲ摠聚シ、甲ヲ着兵ヲ持シ、蝦夷、大臣ヲ助ケテ軍陣ヲ設ク。中大兄皇子、巨勢、巨德陀ヲ遣シテ大義ヲ説カシム。乃皆散亂ス。大臣蝦夷時ニ年六十歲、家ニ火ヲ放チテ失セヌ。紀ニ曰ハク、悉天皇記、國記、珍寶ヲ燒ク。船史、惠尺即疾ク火中ノ國記ヲ取リ、中大兄ニ奉ルト。即舊事記數卷是ナリ。カクテ皇極天皇ハ位ヲ辭シ、中大兄皇子ニ禪ラントシ給フ。然レドモ皇子ハ尙多クノ事業、前途ニ横ルヲ以テ、鎌子ノ勸メニ因リテ固辭シ、天皇ノ同母弟、即皇子ノ舅ナル輕皇子ヲ立テ、位ニ即カシメ、自皇太子ノ位ニ居テ、一ハ民望ヲ養ヒ、一ハ百方改新

天智中興ノ發端

蝦夷時ニ伏ス

舊事記

鎌子輕皇子ヲ立ツ

ノ制度ヲ調査シ給ヘリ。是ヨリ先鎌子ノ同志者ヲ諸皇子中ニ求メシトキ、先輕皇子ノ宮ニ詣リ宿シ侍ラントス。皇子鎌子ノ意氣高逸ニシテ、容止犯シ難キヲ知り、寵妃ヲシテ別殿ヲ淨掃シ、高ク新葺テ舖カシメ、具給シ給ハザルコト無ク、敬重特異ナリキ。鎌子所遇ニ感マ、舍人ニ語リテ曰ハク、殊ニ恩澤ヲ被リ、所望ニ過ク、雖カ能ク天下ニ王タラシメザラシヤト。是ニ至リテ一旦輕皇子ヲ立テテ翼戴ノ約ヲ履ミ、傍中大兄皇子ヲシテ中興ノ偉業ヲ完クスルコトヲ得シム。實ニ人傑ノ度量トイフベシ。

第廿七章 第三期ノ文物風俗

○一節 文藝

百濟ヨリ藝  
術ノ達人ヲ  
召シテ傳習  
セシム

漢學進步ノ  
困難

日本書紀ニ繼體天皇ノ七年、百濟ヨリ五經博士漢ノ段楊爾ヲ引シ、十年五經博士漢ノ高安茂ヲ貢シタルヲ始メトシテ、欽明天皇ノ十五年ニ五經博士王柳貴ヲ遣シテ固德馬ニ代ラシメ、丁安僧曇惠等九人ヲ遣シテ僧道深等七人ニ代ラシメ、別ニ勅ヲ奉テ易博士施德王道真、曆博士固德王保孫、醫博士奈卒王有陵陀、探藥師施德潘量、豐固德丁有陀、樂人施德三斤、季德已麻次、季德進奴、對德進陀ヲ貢ス。皆請ニ依リ之ヲ代ヘタル由見エタリ。是即當時百濟ヨリ藝術ノ達人ヲ召シテ、本邦人ニ諸科ノ藝術ヲ傳習セシメ、幾年ノ後、他人ト交替セシメシモノナリ。諸藝ノ中ニ就キテ最速成ヲ期シタルハ漢學ナルベク、レドモ、其ノ進歩ハ甚困難ナリシコトト見ユ。敏達天皇元年ノ紀ニ曰ハク、  
「天皇高麗ノ表疏ヲ執リテ大臣ニ授ク、諸ノ史ヲ召聚シテ讀解セシメタマフ。是ノ時諸ノ史、三日ノ内ニ於テ皆能ク讀ムコト能ハズ、爰ニ船史ノ祖王辰爾能ク讀釋シ奉レリ。是ニ由リ天皇大臣ト俱ニ讚美ヲ爲シテ曰ハク、勤メタル

本邦漢文ノ  
最古キモノ

伊豫ノ古碑

カナ、辰爾、汝若學ヲ愛セズ、誰カ能ク讀解セシ。宜シク今ヨリ始メテ殿中ニ近侍スベシト。既ニシテ東西ノ諸ノ史ニ詔シタマハク、汝等習フ所ノ業何故ニ就ラザル。汝等多シト雖辰爾ニ及バズト。  
然ルニ用明崇峻ノ二帝ヲ經テ推古天皇ノ時ニ至リテハ、漢學モ稍進ミタルガ如シ。當時ノ漢文ニシテ今日ニ遺レルモノ一二アリ。就中聖德太子ノ如キハ才學非凡ナリキ。紀ニ内教ヲ高麗ノ僧惠慈ニ習ヒ、外典ヲ博士覺荷ニ學ビ、並ニ悉達ストアリ。日本書紀ニ載セタル十七憲法ハ、太子ノ自草セラレタル漢文ナリト傳フ。然レドモ亦一説ニハ是當時ノモノニ非ズ。日本書紀編纂ノ時、或ハ其ニ前ニ當リテ多少色シ、又ハ改修シタルモノナリト云ヘリ。  
今日ニ存スル漢文中ノ最古キモノトシテ、文藝類纂ニ掲クル所ニアリ。  
○伊豫ノ碑ハ法興四年、即推古天皇丙辰ノモノニシテ、伊豫風土記ヨリ釋日本紀十四ニ之ヲ引キタリ。  
「法興六年十月歲在丙辰、我法王大王與惠總法師及葛城臣道造夷與村正觀神并歎世妙驗、欲叙意聊作碑文一首」

惟夫日月照於上而不私神井出於下無不給萬所以機妙應通高曰機字宜百姓所以滯扇若乃照給無偏私何異于養國隨草臺而開合沐神井而瘳添距升于落花地而化翮窺望山岳之巖罅反翼于平之能往椿樹相蔭而穹窿實相五百之張芳野按蓋臨朝啼鳥而戲吐下何曉亂音之聒且丹花卷葉映照玉菓彌葩以垂井經過其下可優遊豈悟洪濼霄庭意與才拙實慚七步後定芳野按君子幸無出咲也

法隆寺藥師佛背銘

○大和國法隆寺藥師佛背銘推古天皇十五年

池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時歲次丙午年召於大玉天皇與太子而誓願賜我大御病大平欲坐故將造寺藥師像作仕奉詔然當時崩賜造不堪者小治田大宮治天下大玉天皇及東宮聖王大命受賜而歲次丁卯年仕奉漢書

法興寺佛背銘

○大和國法隆寺釋迦佛背銘法興元年二月二十九日

法興元年卅一年歲次辛巳十二月鬼前太后崩明年正月廿二日上宮法皇枕病弗愈于食王后仍以勞疾並着於床時王后王子等及與諸臣深懷愁毒共相發願仰依三寶當造釋像尺寸王身蒙此願力轉病延壽安住世間若是定業以背世者往

登淨土早昇妙果二月廿一日癸酉王后即世翌日法皇登遐癸未年三月中如願敬造釋迦尊像并侍及莊嚴具竟乘斯微福信道知職現在安穩出生入死隨奉三主紹隆三寶遂共彼岸普遍六道法界合議得脫苦緣同趣菩提使司馬鞍首止利佛師造

○二造寺(法隆寺)

此ノ時代ヨリ盛ニ起リシハ寺院ノ建立ナリ。佛法初

四天王寺 法興寺 南都七大寺

メテ傳ハリシトキ大臣ノ邸宅ヲ以テ佛寺ニ充テタル頃ハサシタル壯嚴モ無カリシナラマド建築鑄造製瓦等ノ諸工百濟ヨリ來リシ以後ハ普通邸宅トハ異ナリテ多少支那天竺ノ風ヲモ交ヘタル伽藍ヲ作ルコトナレリ。其ノ最早ク歴史ニ見エタルハ崇峻天皇ノ時四天王寺ヲ難波ニ作ラレタルト蘇我馬子法興寺ヲ飛鳥ニ作レルトナリ。此ノ外ニ聖德太子ノ建立セラレシ所尙多シ扶桑略記ニ依ルトキハ太子ノ造ラレシ所合セテ九院ナリ即四天王寺法隆寺元興寺中宮寺橘寺峰岡寺池後葛城日向寺等是ナリ。四天王寺ハ今モアレドモ後ニ改造シタルバ古ノ風ヲ見ルニ由ナク其ノ他ハ皆荒廢ニ屬シ獨法隆寺ノミ尙存シテ南都七大寺ノ一タリ。

法隆學問寺

此ノ法隆寺スラモ屢火災ニ罹リ、今日ノ建築ハ、靈和銅前後ノモノナリト云フ説アリ。然レトモ太子時代ノ古物ヲ多ク保存セルガ故ニ、頗歴史上ノ價值アリ。推古天皇第十五、聖德太子斑鳩宮ノ西ニ一伽藍ヲ建テ、法隆學問寺ト名ヅケ、佛舍利ヲ安置ス。本朝法華維摩會、勝鬘三部ノ大乘ヲ此ノ寺ニ始ム。如來教法始マル所、故ニ學問寺ト名ヅクト、伊呂波字類抄ニ云ヘリ、斑鳩宮ハ今ノ法隆寺ノ東院、即夢殿ノ在ル所ナリ。同寺ノ金銅ハ、恐ラクハ當初ノ建築ノマ、ナルベシ、其ノ内ニ安置セル金銅藥師像ハ、正シク推古天皇ノ十五年ニ、太子止利佛師ニ命ヲテ敬造セシメラレシ者ニシテ、其ノ後光ノ銘文、及其ノ金銅釋迦佛ノ像ニ彫リタル銘文ハ上ニ載セタリ。是皆聖德太子時代ノモノナリ。又此ノ金堂ニ於テ有名ナルハ其ノ壁畫ナリ。寺傳ニ是僧曇徴ノ作ナリト見エタレド、後ニ度度修理セシガ故ニ、筆意稍新シキ所アリ。西壁ハ阿彌陀淨土東壁ハ宗生淨刹、北浦戸ノ東脇壁ハ藥師刹土、同戸ノ西脇壁ハ釋迦國土ヲ畫キ、其ノ他ノ壁ニハ菩薩立像ヲ畫キ、貫ノ上ニハ深山中ニ羅漢ノ住ム所ナドヲ畫ク。又同シ金銅ノ内ニ保存セル寶物ノ中ニ、有名ナル玉虫ノ厨子ト云フモノアリ、推古天皇ノ

夢殿

玉虫ノ厨子

一般ノ民心

民間ノ風俗

阿彌陀三尊ヲ安置スル爲ニ作ラシメ給ヒシ者ニシテ、玉虫ノ羽ヲ以テ布キ、滅金ノ唐草ヲ以テ之ヲ押ヘタリ。其ノ他古代美術ノ標品トスベキモノ頗多シ。當時佛法ト共ニ美術ノ甚盛ナリシヲ想像スベシ。

○三 節 民俗

此ノ如ク朝廷ニテハ、頗ニ佛寺ヲ建テ、佛像ヲ作り、偏ニ壯觀ヲ欲シ、人心修佛ニ傾キタリシカドモ、一般ノ人民ハ未佛法ヲ信ズルニ至ラズ、諸事前代ノ如クニシテ、人情稍、浮薄ニ流レタル感アリキ。第四期ノ始ニ至リ、民間ノ惡風ヲ禁マ給ヘル詔ハ、載セテ孝德紀ニ在リテ、此ノ時代ノ風儀ヲ見ルニ足レリ。曰ハク、凡人死亡ノ時、若ハ經レテ自殉シ、或ハ人ヲ絞シテ殉セシメ、及強ヒテ亡人ノ馬ヲ殉シ、或ハ亡人ノ爲ニ資ヲ墓ニ藏メ、或ハ亡人ノ爲ニ髮ヲ斷テ股ヲ刺シテ誅ス、此ノ如キ舊俗、一ニ皆悉斷メヨ、モシ詔ニ違ヒ、禁ズル所ヲ犯ス者有ラバ、必其ノ族ヲ罪セント。又曰ハク、マタ見テ見ズト言ヒ、見ズシテ見タリト言ヒ、聞カズシテ聞キタリト言ヒ、聞キテ聞カズト言ヒ、都ベテ正語正見無ク、巧詐スル者有ルコト多シ。又奴婢ニシテ主ノ貧困ヲ欺キ、自勢家ニ託シテ活ヲ求メ、勢家仍リテ強ヒテ留メ買ヒテ本主ニ送ラザルモノ有ルコト多シ、又妻妾



夫ノ爲ニ放ダレテ年ヲ經シ後、他ニ適クハ恒ノ理ナリ。然ルニ此ノ前夫三四年ノ後ニ、後夫ノ財物ヲ食求シ、己ガ利ト爲ス者有ルコト衆シ。又勢ヲ恃メル男、混ニ他女ヲ要シ、而シテ未納レザル際、女自人ニ適ケルニ、其ノ混ニ要スル者、購リテ兩家ノ財物ヲ求メ己ガ利ト爲ス者有ルコト甚衆シ。又夫ヲ失ヘル婦若ハ十年及廿年ヲ經テ人ニ適キ婦ト爲リ、并ニ未嫁セザル女、始メテ人ニ適ケル時、是ニ於テ斯ノ夫婦ヲ妬ミテ被除セシムル者有ルコト多シ。又妻ト爲リ、嫌ハレテ離レタルモノ、特惱マサル、テ慙愧スルニ由リ、強ヒテ事環ノ婢ト爲ル有リ。又雇己ガ婦他ニ姦セラルト嫌ヒ、好ミテ官司ニ向ヒテ決テ請フ有リ。假使明ナル三證ヲ得バ、俱ニ顯陳シ、然ル後ニ證スベシ。何ゾ混ニ訴フルコトヲナサソ、又邊畔ニ役セラル、民事了ヘテ郷ニ還ラソ日、忽然病ヲ得テ、路頭ニ臥死ス。是ニ於テ路頭ノ家乃之ニ謂ヒテ曰ハク、何ノ故ニ人ヲシテ余ガ路ニ死ナシムト。留メテ死者ノ友伴ヲ困メ、強ヒテ被除セシム。是ニ由リテ兄路ニ臥死スレドモ、其ノ弟收メザル者有ルコト多シ。又百姓河ニ溺死ス、逢フ者乃之ニ謂ヒテ曰ハク、何ノ故ニ我ヲ溺人ニ遇ハシムト。溺者ノ友伴ヲ留メテ困メ、強ヒテ被除セシム。是

ニ由リテ兄河ニ溺死スレドモ、其ノ弟救ハザル者有ルコト衆シ。又役セラル、民路頭ニ飯ヲ炊ク。是ニ於テ路頭ノ家乃之ニ謂ヒテ曰ハク、何ノ故ニ情ノ任ニ飯ヲ余ガ路ニ炊クトテ、強ヒテ被除セシムル有リ。又百姓他ニ就キテ飯ヲ借り、飯ヲ炊クニ、其ノ飯物ニ觸レテ覆ル。是ニ於テ飯主乃被除セシム。此ノ如キ類、愚俗ノ染マル所、今悉除斷シ、復爲サシムルコト勿レト。日本此等ハ當時民間ニ流行シタル惡弊ニシテ大化ノ改新ニ至リ禁遏セラレシモノナリ。

第四期 唐制模倣ノ代

第廿八章 孝德天皇及大化改新

孝德天皇

古人皇子位  
ヲ辭シテ出  
家シ給フ

○一節改新ノ朝廷 紀元千三百〇五年六月、入鹿誅ニ服シ、天皇位ヲ輕皇子ニ讓リ給フ。之ヲ孝德天皇トス。初メ皇極天皇位ヲ中大兄太子ニ讓ラントシ給ヒシニ、中大兄皇子中臣連鎌子ノ言ヲ納レテ之ヲ辭シ給ヘリ。乃更ニ位ヲ輕皇子ニ讓リ給ハントス。輕皇子再三固辭シ、之ヲ古人大兄皇子ニ讓リテ曰ハク、「大兄ハ昔ノ天皇明ノ生ミ給ヒシ所ニシテ、而モ又年長ナリ。此ノ二理ヲ以テ天位ニ居給フベシト。」古人大兄皇子座ヲ避ケ、遂巡シ、拱キテ辭シテ曰ハク、「天皇ノ聖旨ヲ奉順スベシ。何ソ勞シク臣ニ推讓センヤ。臣願ハクハ出家シテ吉野ニ入リ、佛道ヲ勤修シ、天皇ヲ祐ク奉ラント。」言訖ヘテ佩刀ヲ解キ、地ニ擲テ、又帳内ニ命ヲテ皆刀ヲ解カシメ、法興寺ニ入リテ剃髮セラル。是ニ於テ輕皇子壇ニ升リ、祚ニ即キ給フ。時ニ大伴長徳連金鞞ヲ帶ヒテ壇ノ右ニ立チ、大上健部君金鞞ヲ帶ヒテ壇ノ左ニ立チ、百官臣連國造伴造百八十部羅列匝拜ス。是ノ日號ヲ

皇祖母尊

左右大臣及  
内臣ノ官ヲ  
置カレ

皇極天皇ニ奉リテ皇祖母尊ト申シ、中大兄皇子ヲ立テ、皇太子トシ給ヘリ。始メテ左右大臣及内臣ノ官ヲ設ケ、阿部臣内麿ヲ左大臣ト爲シ、蘇我臣倉山田石川麿ヲ右大臣ト爲シ、中臣連鎌子ヲ内臣ト爲シ給ヘリ。

○二節 僧旻及高向玄理

是ノ時僧旻及高向史玄理ヲ以テ國ノ博士ト爲シ、改新ノ廟議ニ參與セシメラレタリ。蓋二人ハ推古天皇ノ十六年ニ、小野妹子ニ隨ヒテ隋ニ入り、唐ニ留學セシ者ニシテ、共ニ唐朝ノ制度ニ通曉セル故ヲ以テナリ。旻ハ廣ク經史ニ涉リ、博物詳正ナリ。其ノ學識ハ、天皇ノ六年ニ白雉ヲ

僧旻及高向  
玄理廟議ニ  
參與ス

年號ノ始メ

獻ズル者アリテ、旻ニ吉凶ヲ勅問アリシトキ、奏答ノ語ニテモ之ヲ觀ルベシ。玄理ハ初メ自漢人ト稱セリ。以テ其ノ漢土ノ學風ヲ景慕セシヲ知ルベシ。又黒麿ト稱ス。蓋其ノ和泉ヲ思ミテ、麿ヲ理ニ改メタルモノカ。此ノ二人才學アリシカドモ、門地ナカリシヲ以テ、當時ノ勢トシテ高官ニ任サ難カリシナリ。

○三年號ヲ立ツ

天皇即位ノ年、即皇極天皇ノ四年七月ヲ以テ年號ヲ大化ト定メ給フ。紀元千三百五年。是本邦ニ於テ公然年號ヲ建テラレシ始メナリ。而シテ大化六年ニ至リ、瑞祥ニ依リテ之ヲ白雉ト改メラレタリ。是ヨリ先孝

大化以前ノ  
年號

靈天皇ノ朝ニ列滴ノ號アリ、應神天皇ノ朝ニ重至ノ號アリ、繼體宣化、欽明、敏達、用明、崇峻、推古、舒明ノ朝ニモ數十ノ年號アリテ、今日ニ傳レリ。然レドモ正史ニハ之ヲ載セズ。唯ソレノ天皇ノソレノ年ト云ヘルヲ以テ、認メラ公然ノ年號ト爲ササルナリ。案ズルニ此等ハ支那三韓ト交通ノ便ヲ計ル爲ニ立テシモノニシテ、公然天下ニ公布セザリシナルベク、又私ニ定メテ漢土ノ風ヲ模シタルモノニモアルベシ。大化ノ後ハ天武天皇ノ元年ニ白鳳ノ號アリ、持統天皇ノ朝ニ朱雀ノ號アリ、然レドモ正史中之ヲ載セザルモノアリ。文武天皇ノ五年ヲ大寶ト改メラレシヨリ以後ハ、常ニ年號アリテ、即位、瑞祥、凶災、變亂アルゴトニ改元シ、繼續シテ明治ニ至レリ。年號ヲ建ツルハ即漢土ノ制ナリ。之ヲ唐制模倣ノ第一着トス。七月立后ノ事終ハリテ後、天皇左右ノ大臣ニ詔シ給ハク、當ニ上古聖王ノ跡ニ遵ヒテ天下ヲ治ムベシ。マタ當ニ信有リテ天下ヲ治ムベシト。當時ノ形勢ヨリ察スルニ、是蓋支那聖王ノ治跡ニ倣ヒ、信ヲ以テ天下ヲ治ムベシト詔リシ給ヒシモノナリ。翌日又大臣ニ詔シ給ハク、大夫ト百ノ伴、造等トニ問フニ、悦ヲ以テ民ヲ使フ路ヲ以テセヨト。蓋大夫トハ從來ノ臣、連ニテ、未官職

唐制模倣ノ  
第一着  
左右大臣ニ  
詔シ給フ

蘇我石川麿ノ奏

ノ制ヲ改メ給ハザリシナリ。時ニ右大臣蘇我倉山田石川麿奏シテ曰ハク、先神祇ヲ祭鎮シ、而シテ後ニ政事ヲ議スベシト。

(二九七)

東國ニ國司ヲ置キ、種々ノ事ヲ命令シ、又禁遏セラルレタリ。

○四國司ヲ置ク 八月、始メテ東國ニ國司ヲ置キ、之ニ種々ノ事ヲ命令シ、又禁遏セラルレタリ。(一)戶籍ヲ作ルコト、(二)田畝ヲ校スルコト、(三)其ノ任所ニ於テ、元ヨリノ國造、伴造、縣主、稻置ニ非ズシテ、地處ノ領有ニ付キ、訴訟スル者アルトキハ、先其ノ實狀ヲ審査シ、而シテ後官ニ申スコト、及(四)閑曠ノ所ニ於テ兵庫ヲ造リ、國郡ノ刀甲弓矢ヲ收聚スルコトヲ命令シ、(一)國地水陸ノ利ヲ私スルコト、(二)國中ノ民罪ヲ自判スルコト、(三)貨賂ヲ取ルコト、及(四)上京ノ時多ク百姓ヲ從フルコトヲ禁遏セラレタリ。又之ニ許スニ三事ヲ以テセラル。即(一)上京ノ時國造郡領ヲ從ハシムルコト、(二)公事ニテ往來ノトキ部内ノ馬ニ騎リ、部内ノ飯ヲ喰フコト、(三)長官ハ九人、次官ハ七人、主典ハ五人ノ從者ヲ率井ルコト是ナリ。此ノ時新制ニ依リ東國及大和ニハ始メテ國司ヲ遣シタレドモ、其ノ他ノ諸國ニ於テハ從來ノ國造尙存セシナリ。

○五鐘ヲ懸ケ、匱ヲ設ク 同月、鐘及匱ヲ朝ニ設ケ、以テ伴造及尊長ノ不

控訴ノ道ヲ開キ給フ

當ノ裁判ヲ朝ニ控訴スル道ヲ開キ給ヘリ。是天皇ヨリ諸氏ノ氏上ヲ措キテ直ニ從來諸氏ノ門族タリ私民タリシ男女ノ上ニ政ヲ施シ給ヒシ始メナリ。其ノ詔ニ曰ハク、若憂訴スル人、伴造アラバ、其ノ伴造先勘當シテ而シテ奏セ。尊長アラバ、其ノ尊長先勘當シテ而シテ奏セ。若其ノ伴造尊長訴フル所ヲ審ニセザルトキハ、牒ヲ收メテ匱ニ納レヨ。其ノ罪ヲ以テ之ヲ罪セン。其ノ牒ヲ收ムル者ハ、昧且牒ヲ執リテ内裏ニ奏セ。朕年月ヲ題シ、便群卿ニ示サソ。或ハ懈怠シテ理セズ、或ハ阿黨シテ曲アラバ、訴者以テ鐘ヲ撞クベシ。是ニ由リテ鐘ヲ懸ケ、匱ヲ朝ニ置カン。天下ノ民咸朕ガ意ヲ知レト。

其民ト賤民トノ區別

○六男女ノ法ヲ定ム 又奴婢ニ關シ、訴訟特ニ多カリシヲ以テ、同時ニ男女ノ法ヲ定メ給ヘリ。曰ハク、良男良女共ニ生メル子ハ、其ノ父ニ配シ、良男ノ婢女ヲ娶リテ生メル子ハ、其ノ母ニ配シ、即賤民ノ若良女ノ奴ニ嫁シテ生メル子ハ、其ノ父ニ配シ、若兩家ノ奴婢ノ生メル子ハ、其ノ母ニ配セヨ。若寺家ノ仕丁ノ子ハ、良人ノ法ノ如クシ、若別ニ奴婢ニ入ル者ハ、奴婢ノ法ノ如クセヨ。今克ク人ニ制ヲ爲ス始メテ見ス。ト。蓋東夷及三韓ヲ征伐セラレシ時ヨリ、囚虜アル毎

男女法ノ原

ニ之ヲ奴隸トシ、又本邦ノ良民ニシテ罪ヲ犯セル者ノ門族ヲ沒收シテ奴隸トセラレシコト、前ニ往々其ノ事實ヲ擧ゲタリ。而シテ大化ノ改新ニ至リ、國家公民ノ制ヲ立テントスルニ當リテハ、先良民ト賤民トノ區別ヲ立ツル必要ヲ見タルナリ。前述男女ノ法ニ於テ其ノ原則トスル所ハ、兩親ノ一方賤民ナルトキハ子ハ必賤籍ニ附クルニアリ。又父母共ニ賤民ナルトキ、其ノ子ヲシテ母ニ從ハシムルハ、奴婢ノ間ニ公許ノ婚姻ナク、從ヒテ母ハ分明ニシテ父ハ分明ナラザルモノアレバナリ。即甲家ノ奴ノ乙家ノ婢ニ通マテ生メル子ハ、乙家ノ所有ニ歸セシメシナリ。

○七 民數ヲ校ス 九月、民ノ元數ヲ錄シ大ニ國造等ノ專恣ヲ戒メ給ヘリ其ノ詔ニ曰ハク、

古ヨリ以降、天皇ノ時毎ニ標代民ヲ置キ、名ヲ後ニ垂レタマヘリ。其ノ臣、連、伴、造、國造等、各己ガ民ヲ置キ、恣ニ之ヲ驅使ス。又國縣ノ山海、林野、池田ヲ割キ、以テ己ガ財ト爲シ、爭戰已マズ。或ハ數萬頃ノ田ヲ兼併シ、或ハ全ク容針少ノ地モ無キニ至ル。調賦ヲ進ムル時ニ及ビ、其ノ臣、連、伴、造等、先自收メテ、然ル後分

兼併ヲ禁シ給フ

カチ進リ、宮殿ヲ修治シ、園陵ヲ築造スルニ、各己ガ民ヲ率テ事ニ隨ヒテ作ル。易ニ曰ハク、上ヲ損シ、下ヲ益シ、節スルニ制度ヲ以テセバ、財ヲ傷メズ、民ヲ害ハズト。方今百姓猶乏シ。然ルニ勢アル者ハ、水陸ヲ分割シテ以テ私地ト爲シ、之ヲ百姓ニ賣與シ、年ニ其ノ價ヲ索ム。今ヨリ以後ハ地ヲ賣ルコトヲ得ザレ。妄ニ主ト爲リテ劣弱ヲ兼併スルコト勿レト。

是ニ於テ百姓大ニ悦ブ日本書紀

總ベテ此等ノ詔旨ニ於テ、普通ニ顯ル、所ノ主義ハ他無シ。從來天皇ニ直隸スル人民ハ御名代ノ民、歸化ノ民、沒收ノ民ノミニシテ、其ノ他ノ庶民ハ所屬ノ氏上(即臣、連、國、造、伴、造)ノ支配ヲ受ケタリ。而シテ此ノ氏上等ニ於テ己ガ私民ヲ抑制スルハ罪ナキコトナガラ、遂ニハ他ノ細民ヲ苦メテ非曲ノ行多カリシガ故ニ、或ハ國司ヲ發シテ之ヲ監督セシメ、或ハ其ノ不當ノ裁判ヲ匡正セントセラレタルモノナリ。

大詔ノ一

○八 改新ノ大詔 カクテ大化二年ノ正月ニ至リ、天皇先賀正ノ禮ヲ受ケ給ヒ、式畢ハリテ改新ノ大詔ヲ發シ給ヘリ。是後ノ所謂律令ノ基本ナリ。

大詔ノ二

其ノ一ニ曰ハク、昔在天皇等ノ立テラレシ子代ノ民、處々ノ屯倉及刑臣、連伴、造國、造村、首ガ所有セル部曲ノ民、處々ノ田莊ヲ罷ム。仍リテ食封ヲ賜フ。大夫以上各差降アリ。布帛ヲ以テ官人百姓ニ賜フ差アリ。又曰ハク、大夫ハ民ヲ治メシムル所ナリ。能ク其ノ治ヲ盡サバ、則民之ニ願ラン。故ニ其ノ祿ヲ重クスルハ民ノ爲ニスル所以ナリ。

其ノ二ニ曰ハク、初メテ京師ヲ修シ、畿内ノ國司、郡司、關塞、斥候、防人、驛馬、傳馬ヲ置キ、及鈴契ヲ造リ、山河ヲ定ム。凡京ハ坊毎ニ長一人ヲ置キ、四坊ニ令一人ヲ置キ、戶口ヲ按檢シ、奸非ヲ督察スルコトヲ掌ル。其ノ坊令ハ坊内ノ明廉強直、時務ニ堪フル者ヲ取リテ充テヨ。里坊ノ長ハ、並ニ里坊ノ百姓ノ清正強幹ナル者ヲ取リテ充テヨ。若當ノ里坊ニ人無クバ、比ノ里坊ニ於テ簡用スルコトヲ聽ス。凡畿内ハ、東ハ名聖ノ横河ヨリ以來、南ハ紀伊ノ兄山ヨリ以來、西ハ赤石ノ櫛淵ヨリ以來、北ハ近江ノ狹々波ノ合坂山ヨリ以來ヲ畿内ノ國ト爲ス。凡郡ハ四十里ヲ以テ大郡ト爲シ、三十里以下四里以上ヲ中郡ト爲シ、三里ヲ小郡ト爲ス。其ノ郡司ハ、並ニ國造ノ性謙清廉ニシテ時務ニ堪フル者ヲ取リテ大領、小領ト爲シ、

(1100)

大詔ノ三

強幹聰敏ニシテ書算ニ工ナル者ヲ主政、主帳ト爲ヨ。凡驛馬、傳馬ヲ給フハ皆鈔傳符、尅ノ數ニ依レ。凡諸國及關ニハ鈴契ヲ給ヒ、並ニ長官執レ。無クバ次官執レ。其ノ三ニ曰ハク、初メテ戶籍、計帳、班田收授ノ法ヲ造ル。凡五十戶ヲ里ト爲シ、里毎ニ長一人ヲ置キ、戶口ヲ按檢シ、農桑ヲ課殖シ、非違ヲ禁察シ、賦役ヲ催驅スルコトヲ掌ル。若山谷阻險ニシテ、地遠ク人稀ナル處ニハ、便ニ隨ヒテ量リ置ケ。凡田ハ、長サ三十步、廣サ十二步ヲ段ト爲シ、十段ヲ町ト爲ス。段ノ租、稻二束、把町ノ租、二十二束トス。

大詔ノ四

其ノ四ニ曰ハク、舊ノ賦役ヲ罷メテ、田ノ調ヲ行フ。凡絹、綿、絲、綿、ハ、並ニ郷土ノ出ス所ニ隨ヒ、田一町ニ絹ハ一丈トシ、四町ニ匹ヲ成ス。長サ四丈、廣サ二尺半。綿ハ二丈トシ、二町ニ匹ヲ成ス。長廣絹ニ同シ。布ハ四丈トシ、長廣絹ニ同シ。一町ニ端ヲ成ス。別ニ戶別ノ調ヲ收ム。一戶ニ貨布一丈二尺。凡調ノ副物鹽、鹽、モ、亦郷土ノ出ス所ニ隨フ。凡官馬ハ、中馬ハ、一百戶毎ニ一疋ヲ輸シ、細馬ナラバ、二百戶毎ニ一疋ヲ輸セ。其ノ馬ヲ買フ直ハ、二戶ニ布一丈二尺。凡兵ハ、八身ゴトニ刀、甲、弓、矢、幡、鼓ヲ輸セ。凡仕丁ハ、舊ノ三十戶毎ニ一人ナリシヲ改メ、五十戶毎ニ一人、以

有位者ノ禮

テ諸司ニ充テ五十戸ヲ以テ任丁一人ノ糧ニ充テヨ。一戸ニ庸布一丈二尺庸米五斗トス。凡采女ハ郡ノ少領以上ノ姉妹及子女ノ形容端正ナル者ヲ買セヨ。丁一人從一人。一百戸ヲ以テ采女一人ノ糧ニ充テヨ。庸布庸米ハ皆任丁ニ準ズ。

○九節禮法ヲ定メ位冠ヲ制ス。三年禮法ヲ定メラル。其ノ制ニ曰ハク、

凡位アル者ハ要賓ノ時ニ南門ノ外ニ於テ左右羅列シ、日ノ初メテ出ヅルヲ伺ヒ、庭ニ就キテ再拜シ、乃廳ニ侍レ。若晚ク參ラバ入りテ侍ルコトヲ得ズ、午時ニ至ルニ臨ミテ鐘ヲ聽キテ罷レ。其ノ鐘ヲ擊タバ、吏者赤巾ヲ前ニ垂レヨ。其ノ鐘臺ハ中庭ニ起テヨ。同年七色十三階ノ冠ヲ制シ、其ノ制法ヲ定メラル。一ハ纁冠、二ハ纁冠、三ハ紫冠、四ハ錦冠、五ハ青冠、六ハ黑冠、七ハ建武ナリ、一ヨリ六ニ至ルマデ各大小二階アリ。唯建武ハ初位ニシテ一階アルノミ。此ノ冠ハ大會饗客及四月七月ノ齋時ニ着スル所トス。

冠位十九階

- (一)大纁冠
- (二)小纁冠
- (三)大纁冠
- (四)小纁冠
- (五)大紫冠

七色十三階ノ冠

- (六)小紫冠
- (七)大華上冠
- (八)大華下冠
- (九)小華上冠
- (十)小華下冠
- (十一)大山上冠
- (十二)大山下冠
- (十三)小山上冠
- (十四)小山下冠
- (十五)大乙上冠
- (十六)大乙下冠
- (十七)小乙上冠
- (十八)小乙下冠
- (十九)立身冠

○十節八省百官ヲ置ク。五年、又博士高向玄理ト僧旻トニ詔シテ、八省百官ヲ置キ給ヘリ。八省ハ中務省、式部省、治部省、民部省、兵部省、刑部省、大藏省、宮

八省ヲ置ク

唐ノ三省

門下省、尚書省ナリ。其ノ中書省ハ天子ノ命令ヲ傳フル官ニシテ、詔勅ヲ宣奉スル、コトヲ掌リ、門下省ハ詔勅ヲ諫規獻替シテ、後之ヲ覆奏スルコトヲ掌リ、尚書省ハ天下ノ事ヲ受クテ奏聞シ、詔勅下ルトキハ之ヲ施行スルコトヲ掌ル。六部トハ吏部、戸部、禮部、兵部、刑部、工部ナリ。我が中務省ハ唐ノ中書省ニ準シ、式部省ハ唐ノ吏部ニ準シ、治部省ハ唐ノ禮部ニ準シ、民部省ハ唐ノ戸部ニ準シ、兵部省ハ唐ノ兵部ニ準ズ。而シテ唐ノ工部ニ準ズルモノハ本朝ニ於テ之ヲ設クス。又我が大藏省ハ唐ノ太府等ニシテ、我が宮内省ハ唐ノ殿中ナリ。又唐ニハ六部ノ下ニ各四司アリ。凡二十四司ト爲ス。而シテ本朝各省附屬ノ寮職司ハ省ニ依

唐ノ六部

模範ヲ支那  
切取ラレン

天皇ヨリ直  
勅ヲ傳ヘラ  
レシ始メ

リテ其ノ數ヲ異ニセリ。其ノ詳細ハ古代法釋義、大寶令ノ部ニ之ヲ述ベタリ  
 ○十一 儒道ヲ標準トス 以上ハ即大化改新ノ要點ナリ。其ノ大略ニ於  
 テ漢土ノ理論ヲ採用シタルハ、鎌子ノ爲人ヨリ之ヲ見ルモ、玄理僧曼ヲ博士ト  
 セラレシヨリ之ヲ察スルモ既ニ明ナリ。又夫ノ大詔ノ翌月ニ發シ給ヒシ甲午  
 ノ詔ノ如キハ、最善ク模範ヲ支那ニ取ラレシ明證トスルニ足ルモノナリ。且天  
 皇ヨリ直ニ百姓ニ對シテ詔勅ヲ傳ヘシメ給ヘルモ此ノ時ヲ始トスレバ、左ニ  
 日本書紀ノ全文ヲ譯出セン、曰ハク、蘇我、倉山田石川麻呂、左大臣  
アキモカミト、アノシラヤ、マトコ、  
 「明神御宇、日本根子、天皇集侍セル卿等、臣、連、國造、伴、造、及諸ノ百姓ニ詔ス  
 ラク、朕聞ク明哲ノ民ヲ御スル、鐘ヲ門ニ懸クテ百姓ノ憂ヲ觀、屋ヲ衢ニ作リ  
 テ路行ノ謗ヲ聽キ、芻蕘ノ説ト雖、親問ヒテ師ト爲ス。是ニ由リテ朕前ニ詔ヲ  
 下シテ曰ハク、古ノ天下ヲ治ムル、朝ニ進善ノ旌、誹謗ノ木アリ。治道ヲ通シ、諫  
 者ヲ來ス所以ナリ。智廣ク下ニ詢フ所以ナリ。管子ニ曰ハク、黃帝明堂ノ議ヲ  
 立ツルハ、上、賢ニ觀ルナリ。堯、衢室ノ問アルハ、下、民ニ聽クナリ。舜、告善ノ旌有  
 リテ主弊カクレズ。禹、建鼓ヲ朝ニ立テ、訊望ニ備フ。湯、總術術ト云フノ廷アリ、以

テ民ノ非ヲ觀ル。武王、靈臺ノ固有リテ賢者進ム。此古ノ聖帝明王ノ有テテ失  
 フコト勿ク、得テ亡フコト勿キ所以ナリ。故ニ鐘ヲ懸ク、匱ヲ設ク、表ヲ收ムル  
 人ヲ拜シ、憂諫ノ人ヲシテ表ヲ匱ニ納レシメ、表ヲ收ムル人ニ詔シテ毎旦奏  
 請セシム。朕奏請ヲ得、仍リテ又群卿ニ示シテ、便勘當セシム。希ハクハ留滯ス  
 ルコト無カラシ。如群卿等或ハ懈怠シテ勸ニセズ、或ハ阿黨比周シ、朕復肯テ  
 諫ヲ聽カズ。バ、憂訴ノ人當ニ鐘ヲ撞クベシト。詔已ニ此ノ如シ。既ニシテ民明  
 直ノ心ニ國士ノ風ヲ懷キ、切諫ノ陳疏有ラバ、設匱ニ納レヨ。故ニ今集在ノ黎  
 民ニ顯示ス。其ノ表ニ稱ク、國政ニ奉ズルニ縁リテ京ニ到レル民ヲ、官官留メ  
 テ雜役ニ使フト云云。朕猶之ヲ以テ傷惻ス。民豈復此ニ至ルヲ思ハンヤ。然ル  
 ニ遷都未久シカラズ、遷リテ賓ニ似タリ。是ニ由リテ使ハザルヲ得ズシテ強  
 ヒテ之ヲ役ス。斯ヲ念フ毎ニ、未嘗テ安寝セズ。朕此ノ表ヲ觀テ嘉歎休ミ難シ。  
 故ニ諫ムル所ノ言ニ隨ヒ、處々雜役ヲ罷メシ。昔ニ詔シテ曰ハク、諫者ハ名ヲ  
 題セヨト。而シテ詔命ニ隨ハザルモノハ、自利ヲ求ムルニ非ズシテ、國ヲ助ケ  
 ントスルナリ。題不ヲ言ハズ。朕ノ廢忘ヲ諫メヨ。又詔ス。集在ノ國民訴フル所



多ク在リ。今將ニ理ヲ解カントス。歸ニ宣アル所ヲ聽ク。其ノ疑ヲ決セント欲シ京ニ入り朝集スル者且退散スルコト莫ク朝ニ聚侍セヨト。由是觀之當時ノ主義ハ堯舜湯禹ノ治跡ニ倣ハントセラレタルモノナルコト疑ヲ容レズ。

○十二遣唐使及留學生

白雉四年五月使ヲ唐ニ遣ス。大使小山上吉士長丹副使小乙上同吉士駒學問ノ僧道嚴道通道光惠施覺勝辨正惠照僧忍知聰道照定惠定惠ハ内大臣兼足輕皇子ノ安達道觀并ニ學生巨勢臣藥水連老人等

一百二十一人俱ニ一船ニ乘ラシメ室屋首御田ヲ以テ送使ト爲ス。又大使山下高田首根麻呂副使小乙上掃守連小麻呂學問ノ僧道福義向并セテ一百一十一人俱ニ一船ニ乘ラシメ土師連入手ヲ以テ送使ト爲ス。

更ニ遣唐使ヲ發ス

五年二月更ニ遣唐使ヲ發セラル。押使大錦上高向史立理大使小錦下河邊臣磨副使大山下藥師惠日判官大乙上香直麻呂宮首阿彌陀小乙上崗君宜置始連大伯小乙下中臣間人連老田邊史鳥等分レテ二船ニ乘リ留連數月道ヲ新羅ニ取リ遂ニ唐ノ帝都長安ニ達ス時ニ彼ノ國永徽五年ナリ。唐ノ天子高日本ノ使

高向立理唐ニ卒ス

節ヲ引見シ臣下ヲシテ日本ノ地理國初ノ神名ヲ問ハシム。高向立理問ニ隨ヒテ答ヘタリ。立理唐ニ在リテ卒ス。學問ノ僧惠妙智國知聰覺勝義通ハ或ハ唐土ニ於テ亡シ或ハ海上ニ於テ死セリ

### 第廿九章 大化改新ノ大義

國家編制ト  
族制トノ關  
キ保ノナリ

○一節 國家ト族制トノ分離 上古ニ於テハ、血統ニ基ケル社會ノ秩序即族制ヲ以テ國家編制ノ基本ト爲シタルコト前述ノ如シ。此ノ關係ハ第一期ヨリ第三期ニ至ル日本歴史ノ骨髓ニシテ、其ノ積弊ハ終ニ大氏ノ爭權ヲ來タシ、カド大化改新ノ制ニ依リ、始メテ國民ノ靜狀ヲ復スルコトヲ得タリ。是ニ於テ國家ノ編制ト族制トノ關係ハ如何ニ成リユキシカヲ知ルコト、向後ノ變遷ヲ理會スル爲ニ甚緊要ナリ。

第一期ヨリ第三期ニ至ルマデハ所謂骨ノ制ニシテ、元來人々私權上ノ秩序タル血統ノ關係ヲ以テ、直ニ國家公權ノ編制トシタルナリ。此ノ時ニ當リテハ只尊屬卑屬ノ順序アリシノミニシテ、其ノ他政事上ノ順序トイヘルモノ有ラザリキ。然ルニ大化ニ至リテ此ノ制ヲ廢シ、血統ノ尊卑ヲ以テ言フトキハ、他人ノ下ニ立チテ之ニ使役セラルベキ者モ、才能アルトキハ則舉ゲラレテ國家ノ重職ニ補セラル、コト、ナレリ。即大化改新ノ大義ハ、私權ノ秩序タル族制ト公

身分ト官職  
ト分ル

公權ノ編制タル國家ト全然分離シタルニアリ。カク國家ト族制トノ分離セル第一ノ形跡ハ、身分ト官職ト相分ル、ニ在リ。大化以前ノ制ニ依ルトキハ、一氏ノ氏上タル者ハ、其ノ身分ニヨリテ全氏ノ諸家ヲ總括スルコトヲ得タルナリ。然ルニ大化以後ハ氏ノ末葉ニ屬スル者タリトモ、才能有ラバ大臣ニ任ゼラル、コトヲ得ベシ。此ノ如クナルトキハ氏上モ國家政事ノ上ニ於テハ、此ノ末葉ノ一人ニ從ハザルヲ得ザルナリ。例ヘバ蘇我倉山田麿ノ身分ハ臣ニシテ、中臣鎌子ノ身分ハ連ナレバ、大化以前ノ制ニ依ルトキハ、臣ハ大臣ノ下ニ立チテ、其ノ命令ヲ受ク、連ハ大連ノ下ニ居テ、其ノ指揮ヲ受クベキモノナルニ、前者ハ右大臣後者ハ内臣ノ官ニ任セラレテ、天皇ノ外ニ命令ヲ受クルコト無キ身分ト成レルガ如シ。此ノ如キハ仁德雄略ノ時代ニ於テ決シテ有ルベカラサル事實ナリ。即血統ノ尊卑ニ依リテ上下ノ順ヲ立ツルハ、全ク之ヲ社會交際上ノ事トナシ、國家公共上ノ事ニ關シテハ、均シク才能アル者ヲ以テ之ニ任シ、亦門地ノ如何ヲ問ハザルヲ大躰ノ原則ト爲スニ至レリ。是國家ト族制ト分離スル端緒ナリ。

社會交際上  
ト國家公共

爵位ト至  
立スルニ至

尊冠ノ起ル  
所以

(三二〇)

○二 爵位ノ起原 此ノ分離ハ更ニ他ノ點ニ於テ明瞭ナリトス。即身分ノ尊卑ヲ表スル所以ノ爵ト官等ノ上下ヲ示ス所以ノ位トノ二者並立スルニ至リタルコト是ナリ。大化以前ノ如ク血統ノ尊卑ヲ以テ直ニ主治被治ノ別ヲ定メシ時ニ在リテハ、此ノ尊卑ヲ表示スベキ大臣、大連、臣、連等ノ稱號アレハ既ニ足リヌ。然ルニ此ノ外ニ別ニ位冠ノ稱號ヲ設ケタルハ、是血統ノ上ヨリ定マレル尊卑ノ等級ノ外、尙人々ノ間ニ等差アルニ至レル證據ナリ。今案ズルニ大化四年四月古冠ヲ罷メ、翌年二月ニ至リ、織、錦、紫、華、山、乙、各三等及立身ノ十九階冠制ヲ定メラレタルモノハ蓋是ニ因ルカ。是ヨリ先推古天皇ノ朝、聖德太子十ニ階ヲ制セラレシコトアレドモ、此ノ時ハ只支那三韓ノ制ニ倣ヒ、之ヲ以テ華飾トナシ、血統門閥ノ高下ヲ表セラレタルノミニテ、別ニ官職ニ關係セザリシナリ。然ルニ大化五年八省百官ヲ設ケラル、ニ及ビテハ其ノ百官中職ヲ異ニスレドモ、名譽品格ノ相同シキ者往々之アリ。其ノ順序ヲ表セザルベカラズ、何ヲ以テ之ヲ表センカ。夫ノ門閥血統ノ順序ハ之ト符合セザルガ故ニ、必別ニ尊稱ヲ設ケ、同格者ヲ呼ブニ同稱ヲ以テスル制ヲ立テザル可カラズ。是位冠ノ起

授爵ノ制ノ  
原由

ル所以ナリ。即姓序ハ血統ノ尊卑ヲ表スルニ對シテ、位冠ハ官等ノ高下ヲ表スルモノナリ。前者ハ社會私交ノ範圍ニ屬シ、後者ハ國家公務ノ範圍ニ屬ス。(後ニ天武ノ朝ニ至リ姓序ヲ定メラレタルハ、官職ヲ離レテ身分ノ區別ヲ明ニセラレシ始メニシテ、後世ノ授爵ノ制モ亦此ニ原由セリ。即公侯伯子男爵ハ私交上ノ順序ニシテ、官職ニ關係セズ。有爵者必官アルニ非ズ、在官者必爵アルニ非ザルナリ。) 只右ノ姓序ハ全ク血統ノミニ依リテ定マリ、後世ノ爵ハ勳功ニ因リテ殊ニ天皇ノ授ケ給ヘル所ヲ雜フル差アルノミ。

○三 公權私權ノ背馳

此ノ所ニ於テ大化以前ハ國家編制ノ基本タリシ族制ノ大化以後ハ如何ニ成リニキシカヲ概言セバ、其ノ此ノ後ニ至リテ更ニ一大變動ヲ起セル原因ト爲リシ次第モ明ナルベシ。即大化ノ改新ニ依リ一ノ氏族ト他ノ氏族トノ間ニ於テ國家ニ對スル權利ヲ異ニスルコト止ミ、原理ニ於テ各氏平等ニ歸シタリト雖、各氏ノ内部ニ於テハ尙大氏小氏宗家支家ノ別アリ。又一家族ノ内部ニモ尙父子兄弟主從ノ差等ヲ存シタルナリ。蓋一氏族ト他ノ氏族トノ間ニ於テモ門地品格ノ差アリテ、大化以後モ尙臣、連等ノ

名稱ヲ用非テ此ノ差ヲ表示シ、天武天皇ノ時ニ至リ、八色ノ姓ヲ立テ、之ヲ區別セラレタリ。然レドモ例ヘバ眞人ハ品格ニ於テ朝臣ノ上ニ在レバトテ、朝臣姓ノ諸氏ヲ總管スルコト上古大連ノ連姓諸氏ヲ總管シタルガ如クナルニ非ズ、其ノ權利義務ノ上ニ於テハ全ク同等ナルコト、恰モ今日ノ公侯伯子男爵ノ如クナリキ。サレバ諸ノ氏族ニ關シテハ、天皇ノ御一族ヲ除キ、其ノ他ハ悉公權上ニ同等ノ地位ニ達シタルナリ。是固ヨリ大ナル進歩ト謂フ可シ。但實際ニ於テハ中臣氏、蘇我氏、阿部氏、巨勢氏等他ノ諸氏ヨリモ多ク實力ヲ有シタル者アラシ。然レドモ改新ノ理論ヨリ推ストキハ其ノ間ニ權利ノ差違ヲ生ズル所以ノモノ決シテアラザリシナリ。カク理論ト實際トヲ異ニシタルハ、是尙此ノ上ニ政體ノ變更スベキ原因トナリタルモノナリ。後ニ之ヲ解カシテ而シテタタ此ノ所ニ於テ最注意スベキハ他ナシ。氏族ノ内部ニ在リテハ天然ニ定マリタル血統ノ尊卑アルニ因リ、公權上ニ於テ同等ナル諸家ノ間ニモ、私權上ニ於テハ尙差等ヲ存セシコト是ナリ。是今日マデモ多少繼續セル事實ニシテ、日本普通法上ノ一大要點ナリトス。語ヲ換ヘテ之ヲ言ハバ、骨ノ制即血統ノ尊族

諸氏族ハ公權上同等ノ地位ニ達セ

私權上ニハ尙差等アリ

公權上骨ノ制ニ對ス

ニ於テ卑族ヲ制スル次第ハ、只公權上ニ於テ之ヲ廢シタルノミ、私權上ニ於テハ決シテ尊屬卑屬ヲ制スル關係ヲ廢シタルニ非ザリシナリ。之ヲ公權私權ノ背馳ト曰フ。此ノ背馳今日ニ於テハ最低點ニ在レドモ、上世ニ於テハ最高點ニ在リシガ故ニ、國家ハ猶幾回ノ變遷ヲ經ザルヲ得ザリシモノナリ。公權上ニ於テ骨ノ制ヲ廢ストハ、政府ニ對スル權利義務ノ上ニ於テ公民私民ノ差別ヲ立ツルコトヲ廢シタル謂ヒナリ。例ヘバ從來氏々ノ私民ハ產物又ハ勞力ヲ其ノ氏上ニモ輸シ、ヲ廢シテ天皇ニノミ奉ルコト、セラレタルハ是政府ニ對スル義務ノ上ニ於テ公民私民ノ差別ヲ廢セラレシナリ。又國地水陸ノ利ハ國家ノ共有物ナレバ、國家ノ人民ニ彼此ノ別無ク之ヲ使用スルコトヲ得ベキ理ナリ。然ルヲ臣連伴造國造ノ如キ有權者ノミ之ヲ使用シタルガ故ニ、元年ノ詔ヲ以テ其ノ利ヲ百姓ト俱ニセヨト命セラレシハ、是政府ニ對スル權利ノ上ニ於テ公民私民ノ差別ヲ廢セラレタルモノナリ。然レドモ政府ニ對スル義務及權利ヨリ外ノ事ニ關シテハ、大化以後ト雖全ク其ノ以前ニ異ナルコト無カリシナリ。例ヘバ子弟妻妾トシテ家長ニ對スル關係、奴婢トシテ主

人ニ對スル關係ノ如キ皆從前ノ儘ナリキ。サレバ大化元年改新制度施行ノ最中ニ於テ、男女ノ法ヲ定メテ、良民及奴婢ノ生メル子ニ對スル家長ノ權力ヲ明ニシ、又同三年四月ニ、諸臣ノ氏族ヲ辨ゼラレタリ。其ノ詔ニ曰ハク、

「惟神我が子治セト事寄シタマヒキ。是ヲ以テ天地ノ始メヨリ君臨ノ國ナリ。始治國皇祖神ノ時ヨリ天下大同ニシテ、都ベテ彼此ナシ。既ニシテ頃者神ノ名別、天皇ノ名名別ヨリ始マリ、或ハ別レテ臣連ノ氏ト爲リ、或ハ別レテ造等ノ色ト爲ル。是ニ由リテ率土ノ民心、固ク彼此ヲ執リ、深ク我汝ヲ生マ。各名々ヲ守ル。又拙弱ノ臣、連、伴、造、國、造ハ、彼ヲ以テ姓ト爲シ、神ノ名、王ノ名、自心ノ歸スル所ニ從ヒ、妄ニ前々ヲ人々ト云。處々ニ付ス。カク神ノ名、王ノ名ヲ以テ人ノ賂物ト爲スガ故ニ、他ノ奴婢ニ入レテ、清名ヲ穢汗シ、遂ニ民心整ハズ、國政治メ難シ云云。」

是私權上ニ於テハ、門閥ノ貴賤ヲ認メ、僞リテ良家ノ氏姓ヲ稱フルヲ禁制シ給ヘルモノナリ。家長ト家人奴婢トノ間ニ尊卑ノ差別尙若カリシ次第ハ、大寶律令ノ明文ニ詳ナリ。

私權上ニハ門閥ノ貴賤ヲ認

### 第三十章 大化改新ノ國家

○一 國家ト人民トノ關係 上古血統ノ秩序ヲ以テ、國家編制ノ基本

トシタル時ニ當リテハ、人民ハ皆諸ノ氏ノ氏族タルニ非ズバ、必其ノ部曲タリシニテ、常ニ其ノ氏上ノ支配ヲ受ケ、天皇ハ氏上ニ命令ヲ給ヒテ、直接ニ其ノ私民ニ統治ノ權ヲ及ボシ給フコトアラザリシナリ。即上古ニ於テハ、後世ノ如ク、直ニ國中ノ各人ヲ以テ國家ノ公民トスルコトアラザリシナリ。然ルニ前章開示セル次第ニ由リ、血統ニ基ク秩序ヲ以テ國家編成ノ基本トスルコト息ミタリシ後ハ、國家ト人民トノ關係モ亦從ヒテ變動シタリ。大化改新ノ結果ニシテ日本人民ノ政治上ノ發達ニ最著明ナル一段落ヲ畫シタリシモノハ、即日本全部ノ民衆ヲ以テ日本國家ノ公民ナリトナシ、日本全部ノ土地ヲ以テ日本國家ノ公土ナリトスルニ至リタルコト是ナリ。大化二年正月、大詔ノ第一ヲ以テ諸氏ノ私民、私領ヲ廢シ、代フルニ食封ヲ以テシ給フニ及ビ、三月皇太子中大兄、皇子ハ率先シテ則テ天下ニ示サシガ爲ニ、使ヲ以テ左ノ如ク奏請セシ

全國ノ民衆ヲ以テ國家ノ公土トシ

皇太子私民  
給地ヲ奉リ

メラレタリ。曰ハク、在昔ノ天皇等ノ世ハ、天下ヲ混齊シテ治メ給ヘリ。今ニ遠ビテ分離シテ業ヲ失ス。諸氏ノ間ニ分テス。我が皇萬民ヲ牧シ給フベキ運ニ屬リテ天人合應シ、厥ノ政維新ナリ。是ノ故ニ之ヲ廢ビ、之ヲ尊ビ、頂戴シテ伏シテ奏ス。現爲明神、御入島國、天皇、臣ニ問ヒタマハク、其ノ群ノ臣、連及伴、造國、造ノ所有ノ職、昔在ノ天皇ノ日ニ置カレシ子代、入部ノ私民、皇子等私ニ有スル御名、入部上及其ノ屯倉ハ、猶古代ノ如クニシテ置カンヤ否ヤト。臣即恭シク詔スル所ヲ承リ、答ヘ奉リテ曰ハク、天ニ雙日ナク、國ニ二王ナシ。是ハ故ニ天下ヲ兼併シテ萬民ヲ使フベキハ、唯天皇ノミ。別ニ入部及所封ノ民ヲ以テ仕丁ニ簡ヒ宛ツルコト前ノ處分ニ從フベシト。自餘以外私ニ驅役セシコトヲ恐ル。故ニ入部五百二十四口、屯倉一百八十一所ヲ獻ラント。又同年八月ノ詔ニ曰ハク、

原夫天地陰陽、四時ヲシテ相亂レシメズ。惟ルニ此ノ天地、萬物ヲ生ズ。萬物ノ内、人是最靈ナリ。最靈ノ間、聖人主ト爲ル。是ヲ以テ聖主ノ天皇ハ、天ニ則リ御寓ス。人ノ所ヲ獲シテ思ヒ、暫モ胸ニ廢テズ。而シテ始ノ王ノ名、臣連、伴、造、國、造、其ノ品部ヲ分ケテ、彼ノ名ヲ別ツ。復其ノ民ノ品部ヲ以テ、交雜シテ

大化改新ニ  
隨ヒテ起ル  
果大ノ結

國縣ニ居ラシメ、遂ニ父子ヲシテ姓ヲ易ヘ、兄弟ヲシテ宗ヲ異ニシ、夫婦ヲシテ更互ニ名ヲ殊ニセシム。一家五分六割ス。是ニ由リ爭競ノ訟、國ニ盈テ朝ニ充テ、終ニ治ヲ見ズ。相亂ル、コト彌盛ナリ。粵ヲ以テ今ノ御寓天皇ヨリ始メ、臣連ニ及ブマテ有スル所ノ品部、宜シク悉皆罷メテ、國家ノ民ト爲スベシ。其ノ王名ヲ假借シテ伴、造ト爲リ、大連部、造部、白部、其ノ祖名ニ襲據シテ臣連ト爲ルモ、吉備津彦命ノ後ヲ吉備臣トシ、阿直岐ノ後ヲ阿直史ト爲ス類ナリ。此等深ク情ヲ悟ラズ。忽是ノ如ク宣スル所ヲ聞キ、祖名ノ借レル所減ズト思フベシ。是ニ由リ預宣シテ朕ガ懷フ所ヲ聽キ知ラシム。王者ノ見ハ相續ギテ御寓セリ。信ニ知ル時ノ帝ト祖皇トノ名ハ世ニ忘ラルベカラザルヲ。而ルニ王名ヲ以テ輕シク川野ニ掛ケ、雄略天皇名ハ大泊瀨川アル類名ヲ百姓ニ呼バル。賊ニ畏ル可キナリト。

○節二校民、行政區畫及一般稅法 是ニ至リテ國中ノ民部ヲ一統シテ

國家ノ公民ト爲シ、以テ天皇ニ直隸セシメタル事ハ既ニ明ナリ。而シテ此ノ政制ニ隨ヒテ起リシ結果ノ重大ナルモノ尙多カリキ。其ノ第一ハ國家ノ統治ヲ全國ノ人民ニ及ボサンニハ、國家ノ主府タル朝廷ニ於テ必先國中ニ幾人ノ民

衆アルカヲ知ルヲ要スルヨリ、諸國ニ使者ヲ遣シテ民ノ元數ヲ錄セシムル事起リ、大化元年又單ニ其ノ元數ヲ知ルヲ要スルノミナラズ、其ノ各一人ノ貫屬ヲ定メテ政府ノ命令ヲ逃ル、コトヲ得ザラシムルヲ要シタルヨリ、國郡ノ境界ヲ定メテ管轄ヲ明ニシ、里ノ編制ヲ立テ、戶籍計帳ヲ造ル事起レリ。今日ノ縣ヲ以テ之ヲ言ハ、二年大詔ノ第二ハ行政區畫ヲ一定シ、其ノ第三ハ町村行政ノ大綱ヲ示サレタルモノナリ。諸氏ニ於テ之ニ屬スル民部ヲ統轄シ、天皇ハ只其ノ氏上ニ命令シ給フノミナリシ時代ニ於テハ、系譜ヲ以テ政治ヲ經綸スベシ。地理ニ依レル行政區畫トイフモノヲ要セズ、之ヲ要スルニ至ルハ中央政府ト地方人民トノ間ニ直接ノ連絡ヲ通ズル日ニ在ルナリ。又其ノ次ノ結果ハ、國家ノ事業ニ必要ナル勞力ハ之ヲ人民一般ニ課スルコト、ナリ、終ニ將來ノ税法ノ端緒ヲ開キタルコト是ナリ。大化以前ニ於テモ朝廷ニハ祭祀、外交、兵戰ノ事アリテ、其ノ祭祀、兵戰ノ如キハ殊サラ費用ヲ要スルコトナルガ故ニ、此ノ費用ヲ天下ノ人民一般ヨリ徵發セラレシ例ハ上古ヨリアリテ、崇神天皇ノ時ニモ行ハレタリシコト前述ノ如シ。而シテ大抵ハ祭祀、兵戰ニ入用ナル物品

行政區畫ヲ定メ町村ヲ示ス

税法ノ端緒ヲ開ク

戶別調ノ制

田租ノ法起ル

ヲ出ダサシムルヲ原則トシタリ。然ルニ大化以後ニ於テハ朝廷更ニ他ノ事業アリ。即臣連、國造、伴造ノ有セシ民部ニ至ルマデモ直接ニ天皇之ヲ統治シ給ハントスルニ及ビテハ、之ガ爲ニ八省百官ヲ置キ、又諸國ニハ國司郡司ヲ置クベキ必要ヲ生シ、是ヨリシテ官府ノ費用モ亦前代ノ比ニ非ザルニ至レリ。故ニ二年大詔ノ第四ヲ以テ戶別ノ調ノ制ヲ定メ、之ヲ以テ朝廷及官府ノ費用ニ當テラレタルモノナリ。其ノ配當ノ法ニ至リテハ古代法釋義大寶令ノ部ニ之ヲ詳悉セリ。

○節三 國家ト土地トノ關係

又大化二年ノ大詔ニ、處々ノ田莊ヲ廢シトアルハ、即臣連、二造ノ私領ヲ廢シ、天下ノ土地ヲ舉ゲテ國家ノ公田トセラレタル始メナリ。然レドモ天下ノ土地ハ直接ニ朝廷ヨリ耕耘セシメラルベキニ非ズ、必其ノ地方ニ在ル人民ヲシテ耕耘セシメ、收穫ヲ以テ朝廷ニ輸サシメザルベカラザルコト勿論ナリ。此ニ於テ田租ノ法起レリ。又地方ノ土地ヲ以テ人民ノ領有ニ歸セシムルトキハ、後ニハ多ク土地ヲ領有シテ權勢ヲ收メ、終ニ大化以前ノ轍ヲ覆ム恐レアルヲ以テ、此ノ度ハ全ク私領ヲ許サル原則ヲ取リ、

班田收授ノ  
法

人口ニ當分シテ之ヲ貸附シ、六年ニ一回改附スル制ヲ立テラレタリ。班田收授ノ法是ナリ。然ルニ此ノ法ハ當時ノ政治上ノ要求ヲ滿ツルニ適シタリト雖、經濟上ノ原理ニハ全ク背反スルモノナルヲ以テ、到底十分ノ實行ヲ見ズ。且其ノ果シテ實行セラレタル範圍ニ在リテハ、却リテ變亂ノ原因トナリタル事後ニ至リテ述ブル所アルベシ。

○四節 食封、國造任命、及國司黜陟 蓋臣連、二造ハ從來其ノ領有スル所

三ノ政略

ノ土地人民ニ依リテ生存セシモノナルガ故ニ一時ニ之ヲ廢スルハ策ノ善良ナルモノニ非ズ。必大亂ヲ醸ス恐レアリ。是ヲ以テ大化ノ政府ハ三ノ政略ヲ施シ、以テ此ノ難點ヲ無事ニ經過スルコトヲ得タリ。其ノ政略左ノ如シ。

私領ニ代ヘテ食封ヲ興ヘラル

第一ハ私領ニ代ヘテ食封ヲ興ヘラレタル事第一是ナリ。即戸數ヲ定メテ其ノ出ダス所ノ庸調ノ全部若ハ幾分ヲ給與スル法ナリ。之ヲ封戸ト云フ。蓋其ノ人民ハ國家ノ公民ニシテ諸氏ノ私民ニ非ザレドモ、其ノ政府ニ納ムル所ヲ以テ諸氏ニ納メシメタルモノナリ。

國造ノ才幹アル者ヲ擧ゲテ郡司トセラレタル事是ナリ。即大詔

第二ハ從來ノ國造ノ才幹アル者ヲ擧ゲテ郡司トセラレタル事是ナリ。即大詔

從來ノ國造ヲシテ新任國造ニ任シメラル

ノ第二ニ、其ノ郡司ニハ、并ニ國造ノ性識清廉ニシテ時務ニ堪フル者ヲ取リテ、大領小領ト爲シ、強幹聰敏ニシテ書算ニ工ナル者ヲ主政主帳ト爲スト見エタル是ナリ。コレニテ國造ノ大半ハ、朝廷ニ對スル法理ヨソ改マリタシ。下民ニ對スル權勢ニ於テハ、略前代ト同一ノ關係ヲ保ツコトヲ得タリト知ルベシ。然リ而シテ第三ノ策ハ最善ク中、大兄皇子及鎌子ノ政事家タリシヲ證スルニ足ルモノナリ。即新制度ニ從ヒテ國司ヲ諸方ニ派遣シ、從來ノ國造ヲシテ却リテ監督ノ地位ニ立タシメタル事是ナリ。元年八月、始メテ國司ヲ東國ニ派遣セラレシトキ、之ニ種々ノ訓令ヲ與ヘ置キ、二年三月大詔ノニ至リ朝集使及國造ヲ呼ビテ其ノ治績ヲ言ハシメ、之ニ依リテ黜陟ヲ行ハレタリ。其ノ詔ニ曰ハク、集侍セル郡卿大夫及臣連、國造、伴造并ニ諸ノ百姓等咸之ヲ聽クベシ。ソレ天地ノ間ニ君トシテ萬民ヲ宰スル者ハ、獨制ス可カラズ。略中故ニ前ニハ良家ノ大夫ヲ以テ東方ノ入道ヲ治メシム。既ニシテ國司任ニ之キ、六人ハ法ヲ奉ツ、二人ハ令ニ違ヘリ。毀譽各聞ニ。朕便厭ノ奉法ヲ美メ、斯ノ違令ヲ疾ム。凡治メントスル者ハ若ハ君若ハ臣、先自己ヲ正クシテ、而シテ後他ヲ正スベシ。自正シカラズ



國造等ヲシテ新制ニ從ハシムル計略

三大權

ハ、何ゾ能ク人ヲ正サンヤ。是ヲ以テ自正クセザルモノハ、君臣ヲ擇マズ、乃殃ヲ受クベシ。豈惶マザランヤ。汝率非テ正シクバ孰ヲ取テ正シカラザラン。今前勅ニ隨ヒ之ヲ處斷セヨト。又東國ノ朝集使等ニ詔シ給ハク、集侍ノ群卿、大夫、及國造、伴造并ニ諸ノ百姓等咸聽クベシ。去年八月ヲ以テ、朕親臨ヘテ曰ハク、官ノ勢ニ因リテ公私ノ物ヲ取ルコト莫カレ。部内ノ食ヲ與スベシ。部内ノ馬ニ騎ルベシ。若誨フル所ニ違ハハ、次官ヨリ以上ハ、其ノ爵位ヲ降シ、主典ヨリ以下ハ、其ノ笞杖ヲ決シテ、已ニ物ヲ入レタル者ハ、倍シテ之ヲ徵セント。詔既ニ斯ノ若シ。今朝集使及諸國造ニ問ハン。國司任ニ至リ誨フル所ヲ奉ズルカ否ト。是ニ於テ朝集使等具ニ其ノ狀ヲ陳ス。依リテ所犯ノ輕重ニ從ヒテ罪ヲ定メ、當ニ處分スベキニ至リ新宮ヲ作ルニ緣リテ、天下ニ大赦セラレタリ。是豈國造等ヲシテ新制ニ從ハシムル爲ニ構ヘタリシ計略ニ非ザルヲ得ンヤ。

○**五** 天皇統治權ノ範圍擴張 前ニ述ベタルガ如ク、最初天皇が皇別神別諸氏ノ上ニ立チテ行ハセ給ヒシ政務ハ、三ヲ出テズ。即

(一) 國中氏族ノ宗嫡トシテ國神ノ祭祀ヲ舉行シ給フ事

(三三三)

盟ノ詔旨

(二) 外國ニ對シ國中氏族ヲ代表シテ宣戰媾和シ給フ事

(三) 氏族ノ長ヲ命ジ、之ヲ廢置シ、其ノ爭訟ヲ決シ給フ事

以上ノ三ニ關シテハ大化以後モ、其ノ以前ト敢テ異ナルコト無カリキ。現ニ蘇我氏ノ暴逆ニ因リテ其ノ政權ヲ奪ヒ給ヒシモ、第一第三ノ大權ヲ有シ給ヒシニ由ル事明ナリ。逆賊鎮平ノ後ニ於テ天皇、皇祖母、尊皇太子、大槻樹ノ下ニ群臣ヲ召集シテ盟ヒ給ハク、

「天神地祇ニ告ス。天ハ覆ヒ地ハ載ス。君道唯一ナリ。而シテ末代ノ澆薄ニシテ、君臣序ヲ失フ。皇天手ヲ我ニ假シ、暴逆ヲ誅殄セシム。今共ニ心血ヲ瀝ス。自今以後、君ハ二政無ク、臣ハ二朝無カラフ。若此ノ盟ニ貳クトキハ、天災ヲ地妖シ、鬼誅シ人伐タノコト、皎トシテ日月ノ如クナラント。」

此盟旨ハ逆賊ヲ誅シ給ヒシテ以テ、全ク第一ノ神事大權ト第三ノ統族大權トニ依ルモノトスル理論ヲ明言スルニ非ズシテ何ソヤ。然ルニ大化以後ニ至リテハ天皇ノ政務以上ノ三權ノ外ニ尙一アルニ至リタリ。即國中諸氏ノ男女ヲ國家ノ公民ト見做シテ之ニ政令ヲ下シ、違フ者ハ罰シ給フ事務是ナリ。今之

行政大權

諸氏ノ氏上ニ委任シ給フテ給ヒシ政務ヲ行フ理由

行政大權ト稱セントス。從前直接ニ天皇ノ行政ヲ受クシ者ハ子代ノ民ヲ除キ諸氏ノ長者アルノミ、各氏ニ屬スル諸家ノ男女ノ如キハ其ノ氏上ノ支配スル所ニシテ、天皇ハ常ニ氏上ニ對シテ政令ヲ發シ賞罰ヲ行ヒ給フノミナリキ。然ルニ大化以後ハ氏上ニ政權ヲ分チ與フル制ヲ廢セラレシヲ以テ、前コハ天皇ニ屬セザリシ政務ノ一部モ今ハ天皇ニ屬スルコト、成レリ。然レドモ此マテ諸氏ノ氏上ニ委任シ給ヒシ政務ヲ今サテ親行シ給ハフニハ、必其ノ理由ナカル可カラズ。サレバ何ヲ以テ其ノ理由トセラレシカト云フニ、血統上ノ資格ハ以テ其ノ理由ト爲スニ足ラズ。何トナレバ血統上ヨリ言フトキハ、諸氏ノ民衆ハ其ノ氏ノ氏上ニ於テ支配スルヲ自然ノ順序トスレバナリ。是ヲ以テ孝德天智ノ二帝ハ、此ノ理由ヲ漢土ノ君者國之父母主義ニ求メ、自然ノ順序ヨリ言フトキハ氏上ニ支配セラルベキガ順序ナレドモ氏上ハ往々尊長ノ德ヲ缺キ、不正偏頗ノ沙汰多ク、天皇ハ元來諸氏ヲ總理スル權アルノミナラズ、亦大仁德アレバ、諸氏ノ民モ天皇ニ就クベシトノ理論ヲ取リテ懸鐘置匱ノ政ヲ行ヒ給ヒシモノナリ。民ノ信ヲ得ルヲ專一トセラレシ所以ハ此ニ在ルコト

(三二四)

大權ノ二區

元來ノ三大權ハ依然タ

少シク注意シテ當時ノ形勢ヲ觀ルトキハ則疑フ可カラサルモノアリ。之ヲ要スルニ現在日本天皇ノ有シ給フ所ノ大權ニ二區アリテ、其ノ第一區ハ神武建國ノ時ヨリ既ニ存シ、日本民種ノ族長タル血統上ノ關係ニ基ケルモノナレバ、日本民種ノ後嗣ト其ノ繼續ヲ一ニスベク、其ノ第二區ハ大化改新ノ時始メテ事實ニ顯レタル者ニシテ、當時ハ民ノ信ヲ基本トシ、中途ニシテ律令格式ノ規程ニ依準シ、封建ノ時ニ至リテ一旦帝室ヲ離レタレドモ、維新ノ時再舊ニ復シ、向後ハ將ニ憲法ノ條規ニ依リテ其ノ運營ヲ試ミントスル所ノモノナリ。此ノ如ク行政大權ノミハ時勢ニ從ヒテ變動アリ、又其ノ基本ヲ或ハ漢學ニ取リ、或ハ律令ニ取リ、或ハ憲法ニ取ルコトアレドモ、元來ノ三權(即神祇大權、外交兵馬ノ大權及統族大權)今度ノ憲法ニハ受爵ノ大ニ至リテハ、建國ノ始メヨリ今ニ至ルマデ未曾テ皇族ノ宗家ヲ離レズ、將來モ亦永ク離ル、コト無カルベシ之ヲ離サントスル者ハ實ニ日本ノ逆賊ナリ。

○六節 改新ト革命トノ差別 革命ト改新トノ間ニハ自然ニ差別アリテ而モ其ノ差別ヲ知ルハ、我が國ノ國體ノ漢土及泰西諸國ニ異ナル所以ヲ知ル

ニ必要ナリ。革命トハ支那ニテ王家統代ノ更迭ヲ云フナリ。而シテ改新ハ統代ニ變更ナク、唯政治ノ形式ヲ改メタルヲ云フナリ。革命ノ字義ハ、王者ハ天命ニ依リテ治民ノ位ニ居レドモ、此ノ命ニ戻リテ逆威ヲ振フトキハ天之ヲ退ク、代フルニ有道ノ君ヲ以テスト云フニ在リ。即易ニ「天地革而四時成、湯武革命、順於天、應於人」ト云ヘル儒教主義ニ基クモノナリ。サテ大化ノ變更ハ之ヲ革命ト云フベキカ。將改新ト云フベキカト云フニ、六月改元アリテ翌日ノ詔ニ「復當有信可治天下」トノタマヒシコト、及以テ上驛出スル甲午ノ詔ニ依リテ之ヲ見ルニ、從來天皇ハ日嗣ニ渡ラセ給ヘル故ヲ以テ民ニ君タル權アリトセル理論ヲ廢シテ、稍異ナルモノヲ取り、民ニ信アルヲ以テ天下ヲ治ムルニ必要ノ資格トスル漢土ノ理論ヲ採用セラレタルモノ、如シ。是畢竟漢土ノ制ヲ模範トシ、夫ノ血統ノ團結ヲ以テ國家ヲ組織セル制ヲ一變セントセラレシ結果ナリ。天皇ハ固ヨリ諸氏ヲ總統シ給フ權アルヲ以テ、此ノ權ニ依リテ諸氏ノ政治上ノ關係ヲ改革シ給ヒ、之ヲ改革スルト同時ニ帝權ノ據リテ立ツ所ノ理論ヲモ一變セントシ給ヒシモノナリ。又必之ヲ一變セザルヲ得ザルモノ有リキ。何ト

帝權ノ基礎ヲ一變セラレタル理由

ナレバ舊來ノ如ク天神ノ正嫡トシテ諸氏ヲ總統シ天下ニ君臨スルハ、尙血統上ノ關係ヲ以テ帝權ノ基本トスルニ外ナラズ。然ルトキハ他ノ血統上高キ地位ニ在ル諸氏ノ氏上ニモ其ノ高キニ從ヒ政權ノ幾分ヲ分チ與フベキ道理ヲ生ズベシ。然レドモ之ヲ分チ與フルハ即前ノ骨制ノ惡弊ノ由リテ起リシ所ニシテ、物部蘇我二氏執政ノ時ヨリ其ノ改革ヲ要スルハ既ニ明瞭ナリケレバナリ。サレバ大化ノ時ヨリシテ日本天皇ヲ日本國民ノ中心タル祖神ノ正嫡ナリトシテ奉戴スルコトハ止ミ、全ク漢土ノ天子ノ如ク明德アル故ニ天祐ニ依リテ民ニ君タルモノトシテ奉戴スルニ至リタルカト云フコト歴史上一ノ問題ナリ。此ノ問題ハ實ニ重大ナル關係アリ。何トナレバ日本ノ君主ハ果シテ其ノ明德ニ因リ民心ヲ得テ位ニ在ルモノナリトスルトキハ、其ノ裏面ニ於テ不徳ノ君主出ヅルトキハ位ニ居ラシムベカラズト云フ教ヲ生スレバナリ。果シテ斯ノ如クナルトキハ決シテ萬世一系ヲ以テ皇室典範ノ原則ト爲スコトヲ得ズ。夏桀殷紂ノ如キ不徳無道ノ君主アルトキ、湯武ノ如キ天ニ代ハリテ其ノ命ヲ革ムル者ノ起ルテ正當トセザルヲ得ズ。即日本ノ歴史ニ於テモ漢土

大化ノ變更  
ハ改新ニシ  
テ革命ニア  
ラズ

ノ歴史ニ於ケルガ如ク統代ノ變更アルヲ認メザル可カラズ。是日本國體ノ決  
シテ容レザル所ナルコト明白ナリ。日本國體ニ於テハ湯武ハ不忠ノ逆賊ナリ。  
然ラバ即日本君位ハ徳不徳信不信ニ關係ナキモノナリトセシカ、堂々タル大  
化ノ詔勅ハ虛文ニ屬シ。入鹿ヲ斬リ國造伴造ヲ廢シ、氏上ノ政權ヲ奪ハレタル  
ハ背理ノ政トナラン。君徳ヲ主トセシカ、國體ノ變ヲ如何セシ。系統ヲ基本  
トセシカ、門閥ノ弊ヲ如何セシ。此ノ相關問題ヲ解クコト甚困難ナルハ古ノ學  
者モ既ニ之ヲ感シタル所ニシテ、漢學者流モ日本ノ帝權ヲ漢土ニ比スルニ躊  
躇シテ皇統ノ連綿ヲ稱シ、和學者流モ無道ノ君ハ君ニ非ズトスル漢土ノ理論  
ヲ斷然排斥スルコト能ハズシテ、頻ニ延喜帝ノ徳行ヲ贊セリ。然レドモ前節  
開陳スルガ如ク大化ノ時ニ變更ヲ被リタルハ唯天皇政務ノ第四、即行政大權  
ノミニ限ル所以ヲ理會セバ、之ヲ改新ト稱スベク、革命ト唱フ可カラザル所以  
ヲ解スベシ。漢土革命ノ風ノ本朝ニ在リテ忌ムベキハ昔公既ニ定論アリ。

(三三九)

齊明天皇  
飛鳥ノ始

大ニ宮室ヲ  
盛ニ給フ

### 第三十一章 齊明天皇

○一節 齊明天皇 白雉五年、紀元千三十四年孝德天皇崩御シ、前ノ皇極天皇再天位  
ニ即キ給フ。之ヲ本邦重祚ノ始トス。而シテ中大兄皇子ハ攝政タリ。蓋改新ノ業  
尙ホ未ダ成ラザリシヲ以テ、ワザト登位ヲ避ク、補佐ノ職ニ居テ斡旋ノ便利ヲ  
計リ給ヒシ者ナリ。是ヨリ先孝德天皇ハ難波ノ長柄ノ豊崎ニ都シ給ヒシニ、皇  
太子及皇祖母尊、先大和ノ飛鳥ニ遷リ給ヒ、公卿太夫百官モ亦隨ヒ遷リシヨリ  
天皇之ヲ恨ミ、讓位ノ御意アリキト云フ。齊明天皇位ニ即キ給フニ及ビ、大ニ  
宮室ヲ飛鳥ニ起シ都ヲ此ニ遷シ給ヘリ。之ヲ後、飛鳥岡本宮ト云フ。田身嶺ニ冠  
セシムルニ周垣ヲ以テシ、嶺上ノ兩槻樹ノ邊ニ高殿ヲ起テ、之ヲ兩槻宮ト號シ  
又天宮ト曰フ。又水工ヲシテ香山ノ西ヨリ石上山ニ至ルマデ渠ヲ穿タシメ、舟  
二百隻ヲ以テ石上山ノ石ヲ載セ、流ニ順ヒテ宮東ノ山ニ引キ、石ヲ累テ垣ト  
爲ス。是レ蓋シ漢土ノ交通盛ナルニ從ヒ、帝都ノ壯觀ヲ裝フコトヲ要シタルニ  
因ル。

○二三韓事件 齊明天皇ノ御宇ニ於テ特ニ記憶スベキハ三韓トノ交渉

事件ナリ。是ヨリ先欽明天皇ノ時、新羅ハ任那ヲ滅シ、任那ニ在リシ日本府ヲシテ保チ難カラシメタルヲ以テ、朝廷任那ヲ恢復セントシテ屢、兵ヲ三韓ニ用キタリ。而シテ百濟ハ常ニ我ニ忠貞ニシテ、新羅高麗ハ反服常ナカリキ。時ニ支那ハ隋ノ代ヨリ内國略一統ニ歸シ、漸次權勢ヲ三韓ニ及ボサントス。而シテ唐ノ世トナリ、内國益、太平ニシテ専力ヲ新羅高麗ニ用キシカバ、新羅ハ遂ニ唐ニ屬シ、其ノ兵ヲ導キテ百濟ヲ滅ボサシメタリ。是ニ於テ天皇親海軍ニ將トシテ進發シ、筑前ノ朝倉ヲ行宮トシ、三韓ノ恢復ヲ計畫シ給フ。然レドモ勝ツベカラザル兆現レ、果サズシテ行宮ニ崩シ給ヘリ。齊明神功共ニ婦人ノ身ヲ以テ親征ヲ企テ給ヒシハ、壯ト謂ヒツベシ。天智天皇ノ朝ニ至リテモ屢、恢復ニ力ヲ盡サレキ。然レドモ我が軍唐軍ノ爲ニ破ラレ、剩高麗モ唐ニ侵略セラレタリ。是ニ至リテ我が國ハ全ク三韓ノ屬國ヲ失ヘリ。其ノ後十餘朝百數十年ノ間時々新羅ト交通アリシニ、新羅ハ既ニ屬國ニ非ザレドモ、猶習慣ニ依リ、臣ト稱シ、朝貢ト唱ヘシカド、終ニハ其ノ禮ヲ失フコト多ク、且我が邊海ノ國々

新羅唐ニ屬シ百濟ヲ滅ス

天皇親征

三韓ノ屬國ヲ失フ

百濟ノ歸化人ヲ諸國ニ分置ス

國防ヲ嚴ニス

唐使來聘シ和交ヲ修ス

三韓ヲ失フ

ニ來リテ暴亂ヲ爲スニ至リシヲ以テ、仁明天皇ノ朝、新羅人ノ來ルコトヲ一切禁斷セラレタリ。百濟滅亡ノ後、其ノ臣民陸續本邦ニ歸化ス。朝廷此等ノ人口ヲ近江武藏等ノ諸國ニ分置シ、百濟王ノ弟善光ヲ難波ニ置キ、百濟王ノ姓ヲ給ヒテ故國ノ人口ヲ統ベシム。

三韓事件ニ因リ唐國ノ或ハ我ニ寇センコトヲ恐レ、對馬筑紫等ニ防烽ヲ置キ、城壁ヲ築キ、筑紫ニハ大堤ヲ築キテ水ヲ貯ヘ、多ク牧ヲ置キテ馬ヲ養ヒ、又兵ヲ近郊ニ練リ、以テ國防ニ備ヘタリ。然レドモ唐軍遂ニ至ラズ。天智天皇ノ四年ニ唐使來聘シ、和交ヲ修ス。因リテ朝廷ヨリモ大使ヲ遣シテ應答シ、三韓事件茲ニ落着ス。三韓ヲ失ヒタルハ惜ムニ餘アリト雖、之ヲ保有センニハ大ニ資力ヲ要シ、得失相償ハズ、且文物技藝ノ我ニ益アルモノハ既ニ悉之ヲ修メタルヲ以テ、今ニシテ之ヲ失フトモ神后征服ノ功ハ決シテ徒空ニ屬セシニ非ザルナリ。

○三蝦夷事件 三韓ニ對スル設計ハ奏功セザリシカド、蝦夷ニ對スルモノハ十分ノ成績ヲ見タリ。大化改新ノ後、內地ノ治着々トシテ歩ヲ進メタルドモ、蝦夷ハ前期ノ末ヨリ不順ナルモノ多ク、時ニ邊境ヲ侵シテ人民ヲ苦シメ

阿部臣松師  
ヲ率ヒテ蝦夷  
ヲ伐ツ

蝦夷朝獻ス

蝦夷人ニ位  
階ヲ賜フ

タルニ因リ、齊明天皇四年四月、阿倍臣ヲシテ船師一百八十艘ヲ率ヒテ蝦夷ヲ伐タシメラル。蝦夷ノ諸族恐怖シテ降ヲ乞フニ及ビテ、之ヲ嚴罰セズ、却リテ其ノ罪ヲ免シ、處々ノ威望アル酋長ヲ以テ郡領ト爲シ、賞録ヲ賜ヒ、冠位ヲ授ク、一ニ恩德ヲ施シテ心服セシムル策ヲ取ラレタリ。是ニ於テ酋長等皆赤心官朝ニ仕ヘント誓ヒタリキ。同年七月ノ紀ニ曰ハク、蝦夷二百餘闕ニ詣テ朝獻ス。褒賜給常ヨリ加ルコトアリ。仍リテ柵養ノ蝦夷二人ニ位一階、淳代郡ノ大領沙尼具那ニ小乙下、少領宇婆左ニ建武、勇健者二人ニ位一階ヲ授ク、別ニ沙尼具那等ニ納旗二十頭、鼓二面、弓矢二具、鎧二領ヲ賜フ。津輕郡大領馬武ニ大乙上、少領青森ニ小乙下、勇健者二人ニ位一階ヲ授ク、別ニ馬武等ニ納旗二十頭、鼓二面、弓矢二具、鎧二領ヲ賜フ。都岐沙羅柵造ニ位二階、判官ニ位一階ヲ授ク、淳足柵造、大伴君稻積ニハ小乙下ヲ授ク、タマノト。又五年ニ至リ、蝦夷人等ノ言ニ依リテ、後方羊蹄ニモ郡領ヲ置カレタリ。

(三三三)

### 第三十二章 天智天皇

天智天皇  
志賀宮

大友皇子  
大海人皇子

○節一天智天皇中興 紀元千三百二十一年齊明天皇崩御ノ後、皇太子久シク制ヲ稱シテ登位ノ事ナク、七年ヲ經テ始メテ天皇ノ位ニ即キ給ヘリ。天智天皇是ナリ。即位ノ前、都ヲ近江ニ遷シ給フ。之ヲ志賀宮ト云フ。是ノ時天下ノ百姓遷都ヲ願ハズ、諷諫スル者多ク、童謡亦衆シ。日夜處々ニ火災アリ。即位ノ年古人大兄皇子ノ女倭姫王ヲ立テ、皇后トシ、四嬪ヲ納レ給フ。一ハ蘇我山田石川磨大臣ノ女遠智娘ニシテ、鷓野皇女ヲ生ム。皇女ハ後ノ持統天皇是ナリ。二ハ倭姫ノ妹ニシテ、阿倍皇女ヲ生ム。皇女ハ後ノ元明天皇是ナリ。三ハ阿倍倉梯磨大臣ノ女橘娘ナリ。四ハ蘇我赤兄大臣ノ女常陸娘ナリ。然レドモ四妃ノ所生多クハ皇女ニシテ、皇子ハ成人シ給ハザリキ。伊賀ノ采女宅子ガ所生ニ伊賀皇子アリ。又大友皇子ト稱ス。天性明悟、文武ノ才坐シシカバ、天皇之ヲ鍾愛シ給フ。天皇ノ弟ニ大海人皇子アリ。天皇稱制ノ始メ、三韓ノ事急ニシテ内政ヲ治ムルニ遠ナカリシニ因リ、政事ヲ大海人皇子ニ委テ給ヘリ。然レドモ登位ノ後ハ之ヲ

尊ビラ皇太弟トシ、大友皇子ヲ以テ太政大臣ニ拜セラレタリ。中臣鎌子内臣タルコト故ノ如シ。蘇我赤兄左大臣タリ中臣連金右大臣タリ。

天皇ノ二十餘年間皇太子トシテ力ヲ以テ改革ニ盡シ

天皇ノ偉業

大化改新ノ時ヨリ茲ニ至ルマデ二十三年ヲ經タリ。此ノ間天皇常ニ皇太子ノ位ニ居テ、鎌足ト共ニ力ヲ改革ニ盡シ、自天位ニ登リ給ハザリシノ實ニ深意ノ存スルナリ。何トナレバ千年ノ積弊ヲ改ムルハ固ヨリ容易ノ事ニ非ス。故ニ若身天皇ノ位ニ在リテ直接ニ困難ノ衝ニ當リ萬一失敗スルトキハ、其ノ災害ハ延キテ天位ノ上ニ及ブベシ。君主ハ乾々トシテ萬機ヲ統ブレドモ、親一事ヲ爲スベカラズ。是易理ノ蘊奧ニシテ、鎌足ノ南淵先生ニ學ビ皇太子ニ傳ヘタル所ナリ。後世ニ至リ後醍醐天皇ハ親改革ノ事ヲ行ヒ給ヒシニ因リ、事成ラザルニ及ビテ遂ニ皇位ヲ危クシ給ハリ。南北兩朝ノ分レシハ實ニ茲ニ原由ス。嗚呼君主ノ業モ亦難キ哉。

中興ノ宗

天皇鎌足ノ病ヲ助ヒタマフ

藤原ノ姓ヲ賜フ

防止シ給ヒシノミナラズ、保元平治ノ亂ニ至ルマデ五百年間治平ノ基礎ハ實ニ天皇ノ偉業ニ依リテ定マリタリト謂フ可シ。故ニ後世天皇ヲ尊ビテ中興ノ宗ト爲シ、歷朝歲時ノ奉幣ニモ天皇ノ御靈ノ爲ニ特別ノ禮典アリキ。

○二内大臣鎌足薨ズ。天智天皇ノ八年、紀元千三百二十九年鎌足病アリ。紀ニ曰

ハク、天皇藤原内大臣ノ家ニ幸シ、親シク所患ヲ問ヒタマフ。而シテ憂悴極メテ甚シ。乃詔シタマハク、天道仁ヲ輔クトハ、何ゾ乃虛説ナラン。積善餘慶ト言フ猶是徵無カラシ。若所須アラバ便以聞スヘント。對ヘテ曰ハク、臣既ニ不敏、當ニ復何ヲカ言フベクン。但其ノ葬事ハ宜シク輕易ヲ用ウベシ。生キテハ則軍國ニ務ナク、死シテハ則何ソ散テ重テ難マサント。時ノ賢者聞キテ歎マテ曰ハク、此ノ一言往昔ノ善言ニ比ブト。天皇又皇太弟ヲ鎌足ノ家ニ遣シ、大織冠ト大臣ノ位トヲ授ク。姓ヲ藤原ト賜フ。尋イテ鎌足薨ズ。時ニ歲五十。今昔物語ニ曰ハク、葬送ノ夜、天皇行幸して山送りせんとありければ、時ノ大臣公卿會議ありて、天皇の御身に於て、大臣の山送り、例なき事なりと度々奏しければ、泣く泣く返らせ玉ひて、證の宣旨を下して此より大織冠と申すト。

多武峰

編年集成ニ曰ハク、天智天皇皇子ノ時、多武峰大和國十市郡ハ帝都ノ東深山ノ奥ナリ。皇子大臣ト彼ノ所ニ於テ入鹿ヲ伐チ天下ヲ平クベキ由常ニ之ヲ談ズ。仍リテ彼ノ山ヲ以テ談武峰ト名ヅク。近來多武ト稱ス。其ノ時大纓冠我若此ノ願ヲ遂クナバ大中臣ノ姓ヲ改メテ藤原ノ姓ヲ賜ハラント欲ス。何トナレバ藤花盛リナル下ニ皇子ト談ズレバナリト。談武峯ト名ヅクシ起因ハ俗説ナントモ藤原ノ姓ヲ賜ハラント望ミシハ或ハ然ラン。今尙多武峰ニ鎌足ノ廟アリ。

○節三 近江律令

天皇在位ノ時ニ於テハ別ニ詔勅ノ大政ニ關係アルモノヲ見ザレドモ、年來ノ改正ハ著々其ノ歩ヲ進メタリ。特ニ群臣ニ命ヲ撰定セシメ給ヒシ律令二十二卷ハ、實ニ本邦律令ノ始メタリ。之ヲ近江律令ト稱ス。讀者曰ハク、十七條憲法ハ上宮太子ノ佛教ヲ弘メムトテ制シ給ヘル書ノサマナレバ、國家ノ憲法トハ云ヒ難クヤアラン。近江朝廷ノ令ト云フ物ゾ、大寶ノ令典ノ撰定セラレベキ權輿ニテ、古書ノ中ニモ最モ尊ビ重ンズベキ物ナルヲ、世ニ傳ハラヌハイト惜シ。近江朝廷トハ天智天皇ノ御代ヲ指セル也。此ノ御代ニ令典ヲ撰バシメ給ヘルヨシハ、鎌足公傳ニ、天智天皇七年ノ事ヲ記セル件ニ、先此

本邦律令ノ始メ

戸籍ヲ作ラシメ始メ  
庚午年籍

帝令大臣撰禮義判定律令、作朝廷之訓、大臣與賢人、撰書章、略爲條例ト有ルニテ、知ルベシ日本紀ニハ。今傳文ナル略爲條例ノ略字ヲ玩フニ、天智ノ御時ニハ、未卷數ナドモ定マレルニハアラザリケラシ。ソハ、天智紀十年正月ニ、東宮皇太弟奉宣施行官位法度之事、大赦天下法度冠位之各トアルガ、律令テフ名、マタ其ヲ施シ給フ事ノ物ニ見エタル始ニテ云云ト。近藤氏令義解校本

○節四 朝禮、戸籍

天皇九年稱制ヲ除クトノ紀ニ曰ハク、正月朝廷ノ禮儀ト行路ノ相違トヲ宣ベ、復經妄妖偽ヲ禁斷ス。二月戸籍ヲ作り、盜賊ト浮浪トヲ斷ツト。是即大化ノ大詔ヲ實行シテ全國ノ戸籍ヲ作ラレタル始メナリ。戸籍ハ古語ニ之ヲ、ヘフミタト云ヒ、此ノ時ノモノヲ庚午年籍ト稱シ、永年除カズレテ戸籍ノ原簿トシ、氏姓ノ紛亂ヲ正スニ用ユ。初允恭天皇ノ四年ニ、諸氏姓ヲ争ヒ、紛亂定マラザリシニヨリ、探湯ヲ行ヒテ其ノ眞偽ヲ定ム。此ニ至リテ又其ノ詐僞ノ起ランヲ慮リ、精細ニ氏族ヲ正シ、戸籍ヲ造ラレシナリ。サレバ庚午年籍ハ姓氏ヲ正スヲ本トシテ造ラレタルコト論ナシ。仍リテ永世之ヲ除カズ。大寶三年七月ノ詔ニモ、籍帳ハ國家ノ大信ナリ。時ヲ逐ヒテ變更セバ、詐僞必起ラン。



庚午年籍ヲ定メシテ更ニ改易ス可カラズトアリ。又天平實字八年七月文室眞人淨三ノ奏言ニ曰ハク、庚午年籍ヲ除カザルハ、氏姓ノ根本トシテ、姦欺ヲ遏ムル爲ナリト。亦以テ證トスヘシ。皇典講究所 卷第四十七

第三十三章 壬申ノ亂

○一 壬申ノ亂 天智天皇崩御シ、陵土未乾カザルニ當リテ、帝室ノ内部ニ不和ヲ生マ、未曾有ノ禍亂ヲ來メシタルソ不幸ナル。皇子大友太政大臣ト爲リテ朝政ヲ執リ給ヒ、才學無雙ナリシヲ以テ、父ノ天皇ノ寵愛甚深カリキ。然レドモ皇弟大海人早クヨリ、儲嗣ニ定マレリ、而シテ天皇ト皇太弟ト相善カラズ。萬葉集ニ載セタル皇太弟ノ歌ノ意ヲ以テ推ストキハ、天智天皇ノ大海人皇子ト額田皇女ヲ得ントテ、競ヒ給ヒシ如キモ、兄弟不和ヲ生マタル原因ノ一トナレリ。其ノ歌ニ曰ニク

むらさきの葉にははへるいもを 女 姉ナル には、あらば、無クアひとづまゆまに  
他人ノ妻 われこひめやも 吾 何ソト

天皇病篤キトキ、皇太弟ヲ召シ、委ヌルニ後事ヲ以テシ給フ。然レドモ皇太弟ハ是天皇ノ本意ニ非ザルコトヲ察シ、病ト稱シテ位ヲ辭シ、猶疑ヲ避ケンガ爲ニ出家セント請ヒ給ヘリ。天皇之ヲ許シテ、袈裟ヲ賜ヒシカバ、直ニ吉野ニ入りテ

天智天皇ト  
大海人皇子ト  
ノ不和

大海人皇子  
ノ出家

制髮シ給ヒキ。時人之ヲ評シ、虎ニ翼シテ放ツニ同マト云ヘリ。皇太弟吉野ニ入

リ給フトキノ歌モ萬葉集ニ在リ。曰ハク

ふよしぬのみゝがのたけに、耳我ノときなくぞゆきはふりける。ひまなくぞ  
あめはふりける。そのゆきの、時ときなきがごと、ルガルガ如ク降そのあめのひまなき  
がごと、間ナク間ナク降くまもあちず、一隔サ一隔サもひつゝぞくる、喚喚來ルッそのやまみ  
ちをト。

弘文天皇

大友皇子代リテ皇太子ニ立テ給フ而シテ必争位アラントテ慮リテ左大臣蘇我  
赤兄、右大臣中臣金、御史大夫蘇我果安、巨勢比等、紀大人ト天皇ノ前ニ盟ヒ、天皇  
近江ニ崩シ給フニ及ビテ遂ニ位ニ即キ給ヘリ。然ルニ大海人皇子ノ出家ハ  
其ノ素志ニ非ザルコト右ノ歌ニテモ明ニ殊ニ智慧秀テ、人望モ坐シ、カハ、近  
江ノ朝廷ニテハ竊ニ非常ノ用意ヲセラレタリ。是ニ於テ世論器レク、近江ノ  
軍今ニモ攻メ來ラントスルヨレ吉野ニ聞エ、又其ノ實證アリシカハ、大海人皇  
子大ニ怒リ、我位ヲ讓リテ出家セシハ、病ヲ治シテ百年ヲ終ヘンガ爲ナリ。然ル  
ニ今將ニ害セラレントス。何ゾ手ヲ束テ死ヲ待タマヤトテ、即東國ニ據リテ

大海人皇子  
兵ヲ擧ゲ給フ

大海人皇子  
東國ニ入り  
給フ

天下ヲ二分セントノ意ヲ決シ、最敏速ノ處置ヲ施シ給ヘリ。先村國、連男依、和  
珥部、臣君手、身毛、君廣ニ命、急ニ美濃國ニ行キ、安八磨郡ノ湯沐令多臣品治ニ  
告ケテ、當郡ノ兵ヲ發シ、仍リテ國司等ニ經テ諸軍ヲ發シ、以テ不破ノ道ヲ塞ガ  
シム。又大分君惠尺ヲ近江ニ遣リ、高市皇子、大津皇子ヲ喚ベシム。共ニ大海  
人皇子ノ子ナリ。カクテ大海人皇子ハ妃鶴野、皇女ト吉野ヲ發シ、東國ニ向ハ  
ントシ給ヒシニ、事急ナルヲ以テ駕ヲ備フルニ遠ナシ。偶縣、犬養、連大伴ノ鞍馬  
ニ逢フ。因リテ之ヲ以テ御駕ニ供シ、皇妃ハ輿ニ乘リテ從ヒ給ヘリ。是ノ時大海  
人皇子ニ從ヒシハ、草壁、子子、大海人、忍壁、皇子、及舍人朴、井、連雄君、縣、犬養、連大伴、  
佐伯、連大目、大伴、連友國、稚櫻部、臣五百瀬、首根、摩呂、書直、智德、山背、直小林、山背  
部、小田、安斗、連智德、調首、淡海等二十有餘人、女孺十有餘人ナリ。即日菟田ノ吾城  
ニ至ル。大伴、連馬來田、黃書、造大伴、吉野、宮ヨリ追ヒ至ル。又美濃王ヲ徵サレシニ、  
乃參リ赴キテ從ヘリ。伊勢ノ駄五十匹米ヲ運ブニ遇ヒ、曾米ヲ棄テ、歩者ヲ乘  
ラシム。夜半、隱郡名、伊賀伊賀ニ至リ、驛屋ヲ焚キ、天皇東國ニ幸スト稱シテ人夫ヲ集ム  
レドモ參リ赴カズ。横河ニ及ブコト、黑雲廣サ十餘丈、天ニ經ルヲ見ル。大海人皇

子天文通甲ノ術ニ通マ給ヒシヲ以テ親式ヲ乘リ占ヒテ宜ハク、是天下兩分ノ  
 祥ナリ。然レドモ吾遂ニ之ヲ得ノカ下。伊賀ノ山中ニ遠ヒテ當國ノ郡司等數百  
 ノ衆ヲ率キテ歸ス。積殖<sup>ツキヅク</sup>植<sup>ウヅ</sup>ノ山口ニ至リ高市皇子、民直大火赤染、造徳足、大藏  
 直廣<sup>ナホシ</sup>隅<sup>スミ</sup>坂上、直國麻呂、古市、黑麻呂、竹田、大徳、勝香瓦、臣安倍ヲ從ヘテ來リ會ス。伊  
 賀ノ鈴鹿ニ至ルトキ國司三宅、連石床、介三輪、君子首田、中臣足麻呂、高田、首新家  
 等參リ赴ク。明朝五百ノ軍ヲ發シ鈴鹿ノ山道ヲ塞ガシム。進ミテ三重ニ至ル  
 トキ雷雨甚シク衣裳濡ヒテ寒ニ堪ヘズ。郡家ニ入り、一屋ヲ焚キテ燭ヲ取ル時  
 ニ大津皇子、大分、君惠尺、吉士、三綱、山邊、君安麻呂等數人ト共ニ到ル。大海人皇子  
 大ニ喜ヒ給フ。男依驛ニ乘リ來リ奏シテ曰ハク、美濃ノ師三千人ヲ發シテ不  
 破ノ道ヲ塞クヲ得タリト。大海人皇子大ニ男依ノ功ヲ稱シ、高市皇子ヲ不破  
 ニ遣リテ軍事ヲ監ヒシメ、又人ヲ遣シテ東海及東山ノ軍ヲ發セシム。而シテ自  
 桑名ニ到リ、郡家ニ宿シテ復進ミ給ハズ。是ノ時近江ノ朝ハ大海人皇子東國  
 ニ入り給フト聞キ、群臣皆驚キ京内震動ス。或ハ遁レテ東國ニ入ラントシ、或ハ  
 返キテ山澤ニ匿レント欲ス。一臣アリ天皇ニ勸メテ曰ハク、遅ク昧ラバ期ニ

高市皇子軍  
事ヲ監ス

天皇東國四  
國ノ兵ヲ徵  
シ給フ

大伴吹負  
將軍トス

後レシ。如カズ急ニ驍騎ヲ聚メ、跡ニ乘ラテ之ヲ逐ハシメ、ノニハト天皇從ハズ、  
 先東國、大和、筑紫及吉備ノ兵ヲ發セントシ給フ。然レドモ東國ノ路ハ既ニ塞ガ  
 リ、筑紫ノ兵ハ外防ノ空シクスベカラザルヲ稱シテ應ゼズ。高市皇子不破ニ  
 在リテ軍ヲ督シ、使テ桑名ニ遣シ、遠居ハ不便ナレバ、近處ニ移リ給ヘト請フ。大  
 海人皇子乃皇妃ヲ止メ、自不破ニ入りテ野上ニ居給フ。時ニ尾張國司小子部  
 連<sup>ツルギ</sup>鉤<sup>カネ</sup>、二萬ノ衆ヲ率キテ大海人皇子ニ歸ス。爰ニ大伴連馬來田弟吹負ト時  
 ノ否ヲ觀、其ノ嗣位ニ登ルハ必皇太弟ナランコトヲ察シ、兄先東國ニ赴キ、弟ハ  
 留マリテ同志ヲ集メ、功名ヲ期シ、自高市皇子ト稱シテ軍ヲ起シ、小墾田ノ兵庫  
 ヲ陷ル。大海人皇子大ニ喜ヒ、吹負ヲ擧ゲテ將軍ニ拜シ給フ。是ノ時三輪、君高市  
 麻呂、鴨<sup>カモ</sup>君蝦夷以下ノ豪傑、擧ノ如ク應マテ將軍吹負ノ麾下ニ會ス。乃更ニ別將  
 及軍監ヲ撰ミ、近江ヲ襲フト計ラシム。  
 七月紀、臣阿閉麻呂多、臣品治、三輪、君子首<sup>オホノミ</sup>始<sup>ハジメ</sup>連<sup>ツルギ</sup>菟<sup>ウ</sup>ヲ遣リ、數萬ノ衆ヲ率キテ伊  
 勢、大山ヲ越エテ大和ニ向ハシメ、又村國、連男依、誓首根麻呂、和珥部、臣君手、勝香  
 瓦、臣安倍ヲ遣シ、數萬ノ衆ヲ率キテ不破ヨリ出テ直ニ近江ニ入ラシム。其ノ衆

西軍敗走ス

天皇自殺シ給フ

近江ノ兵ト別チ難キヲ恐レ、赤色ヲ以テ衣上ニ着ク。近江ノ朝廷ニテハ山部王、蘇我、臣果安、巨勢、臣比等ニ兵數萬ヲ率井テ不破ヲ襲ハシム。而シテ諸將不和ヲ生マテ山部王殺サレ、全軍爲ニ進ムコト能ハズ。東軍瀬田ニ至リ、河ヲ隔テテ西軍ト相對ス。時ニ天皇及左右大臣陣中ニ在リ。將軍智尊精兵ヲ率キテ先鋒トナリ、橋板ヲ撤シテ拒ク。東軍ノ勇士大分稚臣等度リ進ミ、西軍遂ニ敗走ス。廿三日粟津ニ戰ヒ、西軍大ニ敗レ、左右大臣并群臣等皆逃ク。獨物部連麻呂一二ノ舍人ト天皇子ニ從ヒテ山前ニ走ル。敵軍追ヒ至リ、逃ル、ニ處ナシ。是ニ於テ天皇自殺シ給ヘリ。八月二十五日、不破宮ニ於テ高市皇子ニ命マ、近江群臣ノ犯狀ヲ宣セシム。乃重罪八人ヲ極刑ニ處シ、右大臣中臣連金ヲ斬リ、左大臣蘇我臣赤兄、大納言巨勢、臣比等、及子孫、并ニ中臣連金ノ子、蘇我、臣果安ノ子ヲ配流ニ處シ、餘ハ悉赦シ給ヘリ。

○二弘文天皇

天皇崩マ給ヒシ時年廿五歳ナリ。即位ノ後幾バクモナクシテ終ラセ給ヒシカバ久シク天皇ノ中ニ數ヘ奉ラザリシニ、今上天皇ノ明治三年ニ至リテ弘文天皇ノ銚號ヲ奉リ、歷代ニ列シ給ヒヌ。蓋幼ニシテ詩文ヲ善

弘文天皇ノ銚號

クシ給ヒシニヨリテ此ノ銚號アルカ。懷風藻ニ曰ハク。

「皇太子ハ淡海帝天智ノ長子ナリ。魁岸奇偉、風節弘深、眼中精耀、顧盼煒燁タリ。唐使劉德高見テ異ナリトシテ曰ハク、此ノ皇子風骨世間ノ人ニ似ズ。實ニ此ノ國ノ分ニ非ズト。嘗テ夜夢ミラク、天中洞啓ヨリ、朱衣ノ老翁日ヲ捧ゲテ至リ、聲クテ皇子ニ授ク。忽人有リ、腋底ヨリ出テ來テ便奪ヒ將去ルト。覺メテ驚異シ、具ニ藤原、内大臣ニ語ル。歎マテ曰ハク、恐ラクハ聖朝萬歳ノ後、巨猾ノ間諜有ラフ。然レドモ臣平生曰ハク、豈此ノ如キ事有ラフヤト。臣聞ク、天道親無シ。惟善是輔クト。願ハクハ大王勤メテ徳ヲ修メヨ。災異憂フルニ足ラズ。臣息女有リ、願ハクハ後庭ニ納レテ、箕掃ノ妾ニ充テント。遂ニ姻戚ヲ結ビテ以テ之ヲ親愛ス。年甫メテ弱冠、太政大臣ニ拜ラセル。百揆ヲ總ベシメテ以テ之ヲ試ム。皇子博學多通、文武ノ材幹アリ。始メテ萬機ヲ親ス。群下畏服シ、肅然タラズトイフコト莫シ。年二十三ニシテ立チテ皇太子ト爲ル。廣ク學士抄宅、紹明塔、季春初、吉太尙許率母木素貴子等ヲ延キテ以テ賓客ト爲ス。太子天性明悟、雅愛博古、筆ヲ下セバ章ヲ成シ、言ヲ出セバ論ト爲ル。時ノ識者其ノ洪學ヲ歎